

修士論文

北海道夕張市における地域再生に寄与する観光のあり方に関する研究

—炭鉱遺産を活用したエコミュージアムの構想—

A Study of Ecomuseum for Regional Revitalization in Yubari City

札幌国際大学大学院 観光学研究科 観光学専攻 修士課程 2年

佐藤 真奈美

SATO Manami

2009年1月

主 査 : 中鉢 令兒 教授
副 査 : 河本 光弘 准教授
副査(指導教員) : 吉岡 宏高 准教授

目次

第1章 序論	1
1-1 はじめに	1
1-2 研究目的	2
1-3 用語の定義	3
1-4 研究対象地域の概要	6
1-5 研究の流れと方法	13
第2章 先行研究と採用する概念の整理	15
2-1 夕張を対象とした研究	15
2-2 観光研究の変遷	16
2-2-1 マス・ツーリズムから「新たな観光」へ	16
2-2-2 地域への視点	18
2-2-3 小括	19
2-3 観光まちづくりの概念	20
2-3-1 観光まちづくりの概念に関する先行研究	20
2-3-2 観光まちづくりの事例	20
2-3-3 観光まちづくりの導入に向けて	21
2-4 夕張市における観光まちづくりに援用する概念の検討	22
2-4-1 「地域資源の活用」に主眼を置いた概念	22
2-4-2 「地域住民主体」に主眼を置いた概念	22
2-4-3 「来訪者との交流」に関する概念	23
2-4-4 包括的な概念	24
2-4-5 夕張市の観光まちづくりに導入されるべき概念	25
2-5 エコミュージアムの枠組みに関する検討	28
2-5-1 エコミュージアムの発生	28
2-5-2 エコミュージアムの定義・概念	28
2-5-3 エコミュージアムの構造	30
2-5-4 従来型の博物館との相違点	32
2-5-5 日本におけるエコミュージアムの現状	34
2-5-6 エコミュージアムと観光との関わり	35
第3章 夕張市の歴史的経緯と求められる観光	37
3-1 成立から炭鉱閉山までの歴史的経緯	37
3-1-1 石炭の発見による夕張市の成立	37
3-1-2 戦後期における石炭産業の消長と夕張市の歩み	37

3-1-3 炭鉱閉山による地域への影響	41
3-2 閉山後から現在に至る観光を中心とした経緯	42
3-2-1 観光主体のまちへの転換	42
3-2-2 財政破綻に至った経緯	43
3-2-3 財政破綻が及ぼした影響	44
3-3 今後の夕張市に求められる方向性	46
3-3-1 「炭鉱から観光へ」という発想の検証	46
3-3-2 財政破綻後における観光の現状	47
3-3-3 新しい観光への転換	49
3-4 炭鉱遺産に対する評価	51
3-4-1 産業遺産を活用する機運の高まり	51
3-4-2 空知支庁の産炭地域活性化施策	53
3-5 炭鉱遺産を活用した住民主体による観光の実現可能性	56
3-5-1 炭鉱遺産の残存状況	56
3-5-2 市民団体の活動状況	58
3-5-3 エコミュージアムの導入に際する課題の検討	59
第4章 地域内外協働のタウンウォッチングによる地域資源の選定・評価	61
4-1 清水沢地区の概観	61
4-1-1 清水沢地区の概要	61
4-1-2 清水沢地区の特徴	66
4-2 「清水沢まち歩きタウンウォッチング」の実施	67
4-2-1 そらち事業における清水沢地区の位置づけ	67
4-2-2 タウンウォッチングならびに調査の概要	68
4-3 参加者に関する分析	72
4-3-1 参加者のプロフィール	72
4-3-2 参加者の行動と感想	72
4-4 清水沢地区の地域資源の特徴	76
4-4-1 地域資源の分布状況	76
4-4-2 地域資源の特徴	80
4-4-3 地域資源の捉え方に存在する市内外の差	82
4-4-4 視点場に着目した分析	84
4-4-5 「清水沢が誇れるものベスト3」による評価	86
4-5 まとめ	88
第5章 地域内外の双方向的な交流を目的とした「炭鉱住宅オープンハウス」イベント	90

5-1 清水沢地区における地域資源としての炭鉱住宅	90
5-1-1 炭鉱住宅コミュニティへの着目	90
5-1-2 清水沢地区の炭鉱住宅の変遷	90
5-1-3 清水沢地区における地域資源としての炭鉱住宅の利用	91
5-2 「炭鉱住宅オープンハウス」の実施	93
5-2-1 催事の概要	93
5-2-2 居住者の概要	94
5-3 催事当日における参与観察の結果分析	99
5-3-1 催事の様子	99
5-3-2 D宅の状況	99
5-4 参加者の意識変化	103
5-4-1 基本属性の把握	103
5-4-2 感想の分析・考察	103
5-4-3 清水沢地区の印象の変化	104
5-5 催事による居住者の意識変化	106
5-5-1 分析方法	106
5-5-2 催事前の居住者の反応	108
5-5-3 催事後の居住者の反応	110
5-6 まとめ	114
第6章 清水沢地区におけるエコミュージアムの構想	115
6-1 本計画の位置づけ	115
6-2 基本構想	116
6-2-1 計画の目標	116
6-2-2 コンセプト	116
6-2-3 計画期間	117
6-3 エコミュージアムの構成	118
6-3-1 エコミュージアムの空間的構造	118
6-3-2 エコミュージアムにおける「炭鉱の記憶」再生機能	123
6-4 実現までのプロセス	125
6-5 清水沢エコミュージアム構想の妥当性	127
第7章 結論	128
7-1 本論文の総括	128
7-2 今後の研究課題	131
参考文献・参考資料・参考 URL・初出論文	132
謝辞	136

資料編

資料①	リヴィエールによる「発展的定義」フランス語原文	ii
資料②	タウンウォッチングのアンケート用紙	iv
資料③	追加調査のアンケート用紙	vi
資料④	オープンハウス参加者アンケート用紙	x
資料⑤	居住者アンケートの分析方法	xii

第1章 序論

1-1 はじめに

北海道空知地方を中心とする産炭地域は、基幹産業の崩壊による地域の劇的な変容を経験した。戦後から高度経済成長期にかけ、石炭は、自給できるエネルギー資源として日本の発展に多大なる貢献をしてきたが、石油へのエネルギー転換や安価な輸入炭利用への転換などにより、次々と大炭鉱が閉山した昭和末期以降、産炭地域の活力は急激に低下した。地元自治体は、地域再生のためにさまざまな対応策をとったが、恒常的に効果を発揮するには至らず、2007年に夕張市が財政再建団体となるなど、地域崩壊の危機から抜け出せないでいる。

開拓以降の北海道においては、鉱業や林業など産業によって形成された集落が多数あり、その産業が衰退すれば、環境条件が悪い集落は消滅することさえあった¹。しかし近年の北海道においては、基幹産業である第一次・第二次産業の衰退を逆手に取り、観光に地域活性化の方策を見出した地域が存在する。

その代表例と言える小樽市は、1880(明治14)年に開鉱した幌内炭鉱とを結ぶ、日本で3番目の鉄道が開通し、石炭の積み出しや樺太との交易により繁栄した。しかし石炭産業の衰退や港湾拠点としての地位低下、商業機能の札幌移転などの要因により、著しく衰退した。産業の衰退とともに役割を失った小樽運河の埋め立て計画が浮上したが、反対する市民運動が起こり、これによりまちの一体感が高まった。結局、運河は半分が埋め立てられたものの、保存された運河は観光客の評価を受け、全国的な人気観光地と発展した²。これは、住民の意志に基づき、産業で反映した地域の象徴的遺物を保存したことにより、観光が活発化した代表的事例と言える。

一方で、財政破綻した夕張市も、地域再生の打開策として観光事業を展開した地域である。しかし、谷間の袋小路である夕張市においては、観光客を多数誘客することを必要とするマス・ツーリズムに依拠した観光開発は有効な手立てとはならず、財政破綻の要因の一つとなった。財政再建計画では、観光事業は指定管理者へ委託もしくは休廃止となったため、観光政策は事実上無策となっている。

しかし、観光の経済・社会効果を勘案すると、単に観光を忌避することは得策ではないと考える。これまで行ってきた観光政策について検討し、反省を踏まえた上で、その地域に適した規模・方法による観光まちづくりが模索されるべきではないかという問題意識を持つに至った。

¹ 例えば、紋別市鴻之舞(鉱業)、上士幌町三股(林業)などが該当する。

² 国土交通省「地域いきいき観光まちづくり-100-」ホームページ(最終検索 2009年1月29日)

1-2 研究目的

本論文では北海道夕張市を対象に、疲弊した地域の再生に寄与する観光のあり方を追求することを研究目的とする。財政再建団体という制約条件下での夕張市においては、日本有数の炭鉱都市として発展した歴史的な文脈に位置づけられる足元の地域資源に、新たな価値を見出し、住民自らが主体となり進められる観光まちづくりに、新たな観光展開の可能性を見出すことができるのではないかと考えた。そこで、その手法としてエコミュージアムに着目し、事例地域を設定して、導入に向けた障壁となる事実やその解決方法などの諸要因を明らかにし、構想の有効性を検証する。

夕張市は、全国で唯一の財政再建団体という最も厳しい条件に置かれ、著しい人口減少・高齢化など地域崩壊の危機に瀕している。従って夕張市で導入する手法に一定の効果がみられれば、他の疲弊した地域の再生に寄与する観光のあり方に、知見を援用できるのではないかと考えた。また、夕張市が財政破綻した主たる要因は観光にあると言われる中で、対案としての観光振興策を示すことは、夕張市の閉塞した道筋を打開することに貢献できると考えた。

1-3 用語の定義

本論文で使用する基本的な用語について、本節で最初に定義する。

観光

「観光」の語源は、中国周時代『易経』の一説である「観国之光、利用賓于王」に由来するとされる³。一方英語では、観光に相当する単語は「tourism」であり、ラテン語でろくろを意味する「tornus」が語源であるとされ、再び戻ることを前提とした人々の移動を指す⁴。どちらも今日では一般的に「楽しみを目的とする旅行」⁵と捉えられており、本論文もこの定義を採用する。

観光による効果は、観光客の消費や観光開発に伴う経済効果と、人と人との交流に伴う社会文化変容という二点が挙げられる⁶。ただし、それぞれの効果には負の側面もあり、効果を過度に追求することは、そもそもの観光資源を破壊するに至ることも念頭に置かなければならない。

まちづくり

日本において「街づくり」という言葉が最初に用いられたのは、1962年名古屋市栄東地区における都市再開発市民運動であるといわれており、1970年代にはマンション建設反対運動などで盛んに用いられるようになった⁷。ひらがなの「まちづくり」が用いられるのは1970年代後半からである。

田村(1999)は、「まちづくり」をよいまちをつくる、即ち「住んでいるすべての人々にとって、生活が安全に守られ、日常生活に支障なく、気持ちよく豊かに暮らせ、緊急時にも対応できる」まちを、ハードの施設だけでなく生活全体のソフトを含めて「つくって」いくことであると定義している⁸。

観光まちづくり

「観光まちづくり」は、2000年12月に答申された観光政策審議会「21世紀初頭における観光振興方策」の主要施策として掲げられたことから、意識的にその用語が使用されるようになった。この審議会の委員であった西村幸夫を中心として設置された「観光まちづくり研究会」は、観光まちづくりを「地域が主体となって、自然、文化、歴史、産業、人材など、地域のあらゆる資源を活かすことによって、交流を振興し、活力あるまちを実現するための活動」と定義している⁹。本論文ではこの定義に依拠しつつも、2-3-1において、本論文における観光まちづくりの捉え方を示す。

³ 前田編(2006)p15.

⁴ 山村(1995) p1.

⁵ 前田編(2006)p6.

⁶ 前田編(2006)p48.

⁷ 延藤(1990) pp.9-10.

⁸ 田村(1999)p28.

⁹ 観光まちづくり研究会編(2000)p5.

エコミュージアム

エコミュージアムは、1970年前後に、国際博物館会議(ICOM)初代会長であるフランスの博物館学者、ジョルジュ・アンリ・リヴィエール(Georges Henri Rivière)によって考案された、博物館の新しい概念である。日本において本格普及させた新井重三は、「生活・環境博物館」と訳し、「地域社会の人々の生活と、その自然環境、社会環境の発達過程を史的に探求し、自然遺産および文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することを通して、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする博物館である」と定義している¹⁰。本論文では2-4ならびに2-5でエコミュージアムについて詳細を論述するが、ひとまずはこれをエコミュージアムの定義とする。

炭鉱遺産

遺産という言葉は、一般的に「死後に遺した財産。比喩的に、前代の人が遺した業績」(広辞苑)を指す。一方で、英語の heritage には「後の世代に伝えるもの」という意味合いが強く、次世代や未来へ向けたとらえ方をしている¹¹。これらから炭鉱遺産とは、石炭産業や炭鉱に関連する事物を財産として捉える表現であると言える。

北海道空知支庁において、旧産炭地域における炭鉱遺産を活用した地域振興を目的とした最初の事業である「そらち・炭鉱の記憶¹²発掘事業」では「そらち・炭鉱の記憶」を以下のように定義している。

表 1-1 そらち・炭鉱の記憶の定義

出所:そらち・炭鉱の記憶推進委員会(2000)¹³

空知地域に開花した特異な時代性を有する『炭鉱』の

- ① 産業・石炭生産の姿
 - ② まち並み・景観・風景
 - ③ 炭鉱に生きる人々の働く様子・暮らし・文化
- などを現在に語り継ぐ様々な記録・情報。
- ・現存の有無・有形無形の別を問わない
 - ・明治初期から概ね昭和 40 年代初期までを対象範囲とする。

しかし、「現在に語り継ぐ様々な記録・情報」は、現在も人々の生活に根付いている暮らしや文化も対象であり、実際のリストには閉山まで使用されていた施設なども対象となっていることから、この定義が対象とする年代を限定しているのは適切ではないと考える。

¹⁰ 新井(1995)p11.

¹¹ 伊東(2000)p29.

¹² 本論文において「炭鉱の記憶」という用語を用いる際は、すべて「やまのきおく」と読み、本項以下ではルビを省略する。

¹³ そらち・炭鉱の記憶推進委員会(2000)p5.

そこで本論文では、観光まちづくりの立場に立ち、石炭産業に関連する産業施設の遺構のみにとどまらず、景観・人々の社会慣習・文化などを含む、炭鉱の存在に起因する有形無形のあらゆる資源を炭鉱遺産と呼ぶことにする。

1-4 研究対象地域の概要

空知産炭地域¹⁴は、1879(明治 12)年に開拓使による幌内炭鉱の開発が着手されて以降、日本の高度経済成長を支える一大エネルギー基地として機能し、最盛期である 1960 年代後半には 100 を超える炭鉱が操業していた。しかし、エネルギー革命に伴い炭鉱は相次いで閉山、1995(平成 7)年に空知炭鉱(歌志内市)の閉山により、空知から坑内掘り炭鉱が消滅した。

炭鉱閉山による地域活力の低下は著しく、現在に至っても地域の疲弊は深刻である。5市1町の人口は、1960 年と2005 年を比較すると、80.6%の減少、また高齢化率は36.5%(全道平均21.4%)と、深刻な人口減少・高齢化が進んでおり、将来的には、まち全体が社会的共同生活を維持できない「限界集落化」する恐れがある。

本論文の研究対象地域である夕張市は、空知支庁南部の山間地帯に位置し、東西24.9km、南北34.7km、面積763.2km²を有する。面積の90%以上が山林で、市街地は、夕張川と支流の志幌加別川の流域に沿って帯状に形成されている。

1890(明治 23)年、北海道炭礦鉄道会社(後の北海道炭礦汽船株式会社、以下北炭)夕張採炭所の開鉱により、市街地の形成が始まって以降、夕張市は日本有数の炭鉱都市として、100 年間にわたり石炭産業の消長と軌を一にした。

炭鉱末期以降は、「炭鉱から観光へ」をキャッチフレーズに、当時の中田鉄治市長主導によるリゾート開発や遊園地運営、映画祭の開催など次々に大型観光事業を展開した。しかしマス・ツーリズムに依拠した観光開発の失敗や、産炭地域振興臨時措置法による優遇措置の失効などにより、財政は危機的な状況に陥り、2007(平成19)年に財政再建団体に指定された。

石炭産業の最盛期である1960(昭和35)年には、人口107,972人であったが、閉山時の1990(平成2)年には20,969人、さらに2008年12月末現在、約10分の1の11,739人にまで減少している(図 1-4)。人口減少とともに高齢化も進み、2005 年の高齢化率は全国の市で最も高い 39.7%である。また生活保護率が高いことも大きな特徴で、2005 年度末では、全国の 2 倍以上の水準である 25.9%となっている¹⁵。

財政破綻が表面化して以降、人口の流出が進み、2006 年の 1 年間で 589 人(対前年減少率4.4%)、2007 年は 630 人(同 4.9%)減少した。2008 年は 459 人(同 3.8%)と若干緩やかになったものの、破綻前 10 年ほどの間は、人口減少数が年間 300~400 人(同 2~3%)で推移してきたことから、財政破綻が人口減少に拍車をかけていることが伺える。

¹⁴ 夕張市・三笠市・歌志内市・赤平市・芦別市・上砂川町の5市1町を指す。産炭地域振興臨時措置法第2条(石炭鉱業の不況による疲弊の著しい石炭産出地域及びこれに隣接する地域)に指定された9市7町のうち、第8次石炭政策(1987~1991 年度)の開始時に坑内採掘炭鉱が残っていた自治体である。

¹⁵ なお 2008 年現在、高齢化率は 42.3%、生活保護率は 27%にそれぞれ上昇している。北海道新聞 2008 年 3 月 4 日付「検証 夕張再建1年(1)誤算 負担増で働き手流出」



図 1-1 夕張市の位置

地理情報分析支援システムMANDARAを使用して筆者作成



図 1-2 1960年ごろの夕張市

出所: 国土地理院発行50000分の1地形図(夕張・大夕張・追分・紅葉山)を50%に縮小

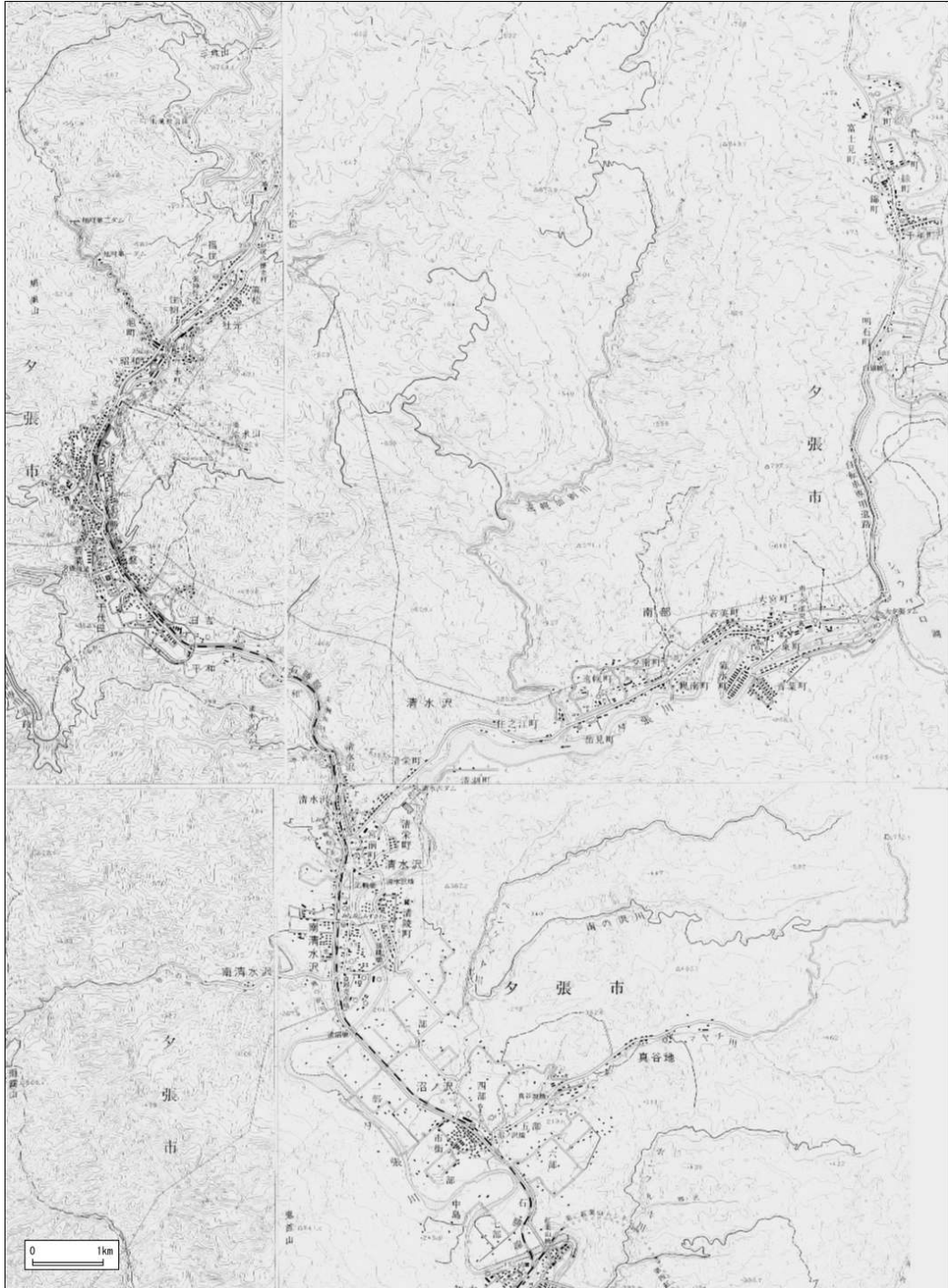


図 1-3 2000年ごろの夕張市

出所: 国土地理院発行50000分の1地形図(夕張・石狩鹿島・追分・紅葉山)を50%に縮小

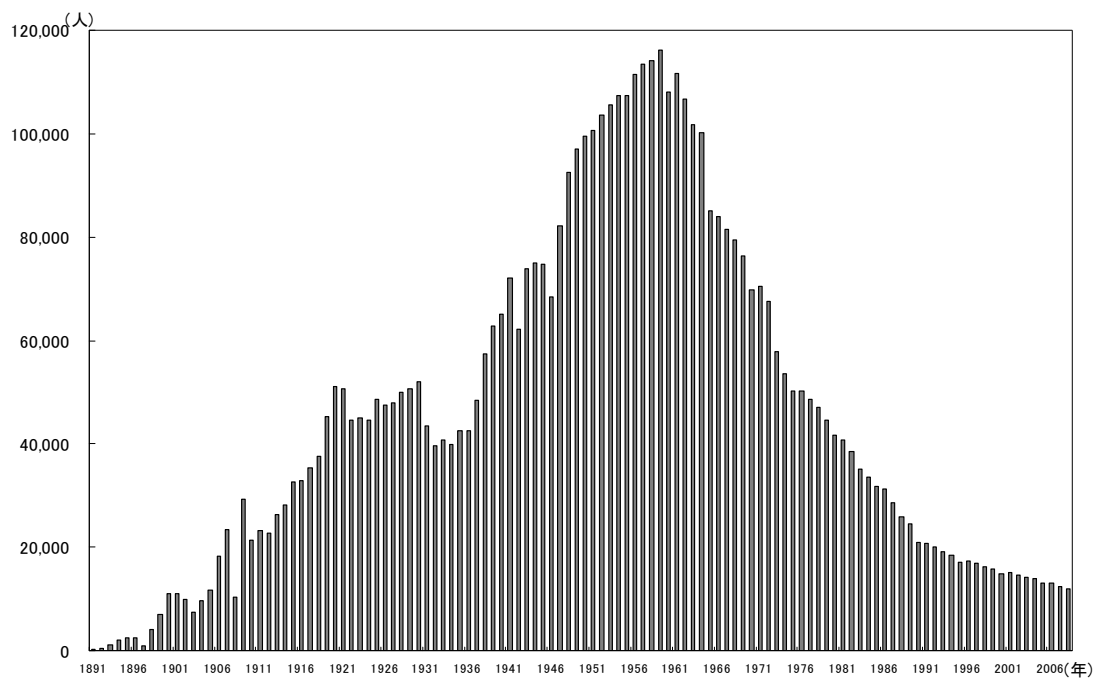


図 1-4 夕張市の人口推移

夕張市統計書から作成

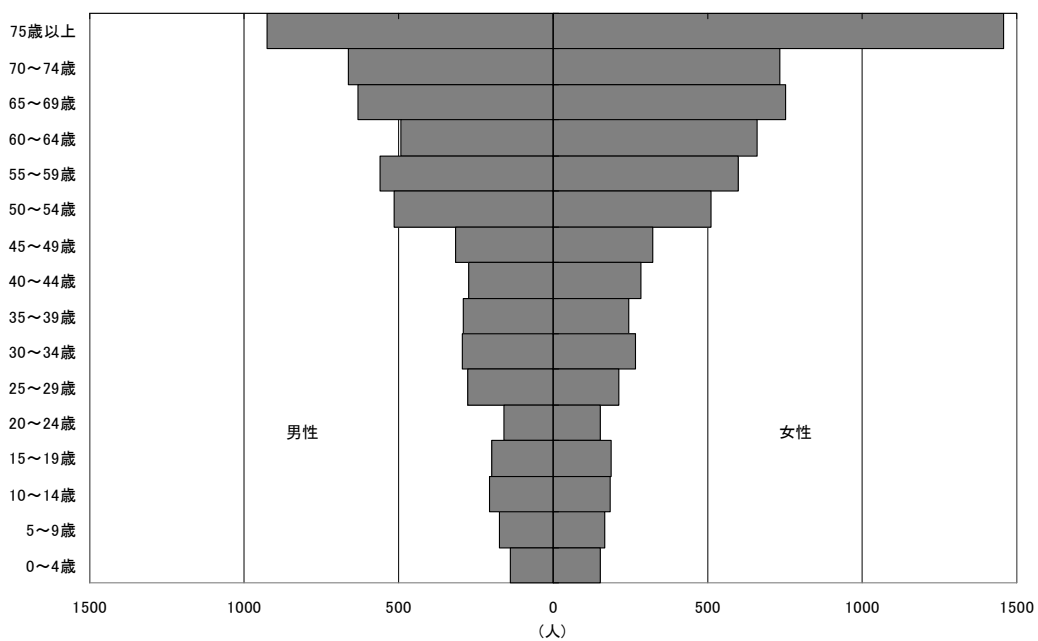


図 1-5 夕張市の人口構成

2005年国勢調査から作成

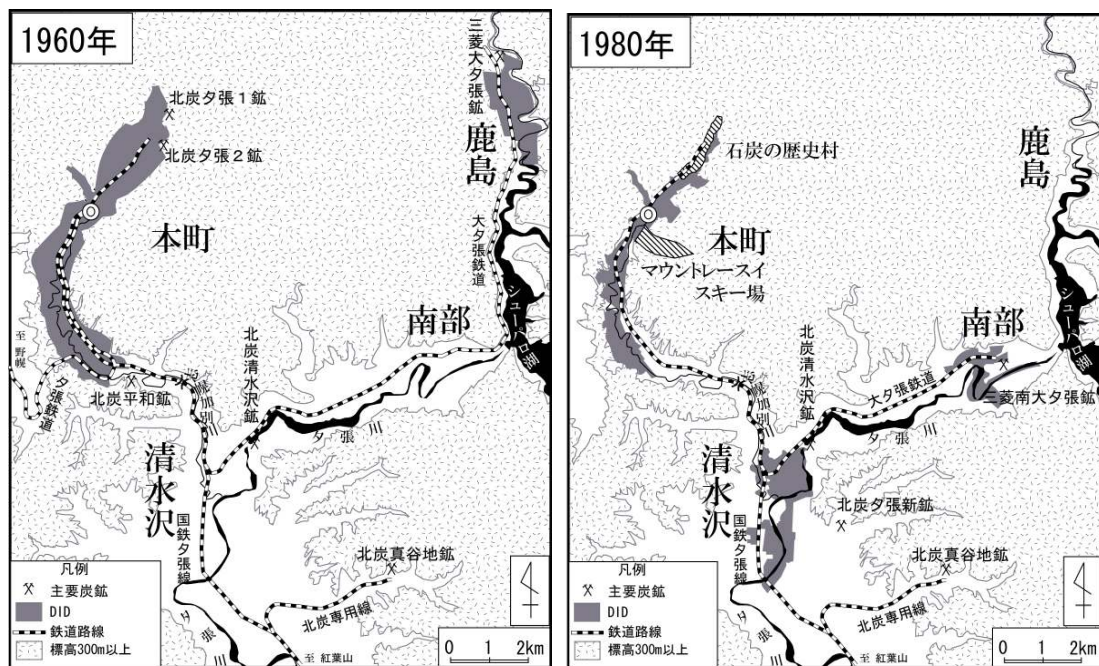


図 1-6 DID の変遷

吉岡(2007)をもとに筆者作成

夕張市は、三笠市、歌志内市、上砂川町と同様、石炭の発見により開基された純粋な炭鉱都市である¹⁶。地形が複雑で、広い後背地がなく、交通も袋小路状であることから、もともと農村として開拓が行われたところに石炭が発見された芦別市・赤平市とは異なり、石炭産業への依存度が極めて高いという特徴を持つ。すでに明治末期には「うなぎの寝床」と形容される、狭い谷地に市街地が並び、急な斜面に張りつくように炭住が密集して建てられている市街地の形が形成されていた¹⁷。

夕張炭田の炭層は北から南に向け傾斜しているため、市北部から炭鉱開発が進んだ。そのため市街地は北炭夕張鉱や三菱鉱業株式会社(後の三菱大夕張炭礦、三菱石炭鉱業。以下三菱)大夕張鉱などの大規模炭鉱が立地する北部を中心に発展し、市中部の清水沢地区や市南部の沼ノ沢・紅葉山地区は農業を中心に発展した。

1960年代後半以降、北部の炭鉱は炭量の枯渇や施設の老朽化が懸念されるようになった。技術の進展に伴い深部の掘削が可能になると、1970年代には清水沢地区や南部(南大夕張)地区に大規模な炭鉱が開発され、生産の主力は市北部から中南部に移動した。これに伴い北部(本町地区)や鹿島から市中南部地区へ人口が移動した。夕張市における人口集中地区(DID)を示した図 1-6からも明らかなように、1960年に市北部で広がっていたDID面積は1980年には著しく縮小し、

¹⁶ 吉岡(2005)pp.40-41.

¹⁷ 夕張市(1981)上巻 pp.16.

清水沢地区や南部地区で新たにDIDが発生している。しかし、全炭鉱が閉山した1990年には、すべてのDIDが消滅し、以降現在までDIDはみられない。

これらの経緯により、縦に長い市街地に人口過疎集落が点在する、現在の夕張市が形成された。このような集落形態は交通やインフラの管理などの面で非常に効率が悪く、財政破綻後には集落を市中部に集約する検討も起こっている。

1-5 研究の流れと方法

第1章「序論」では、本論文の目的や、事例となる夕張市の概要について述べる。

第2章「先行研究と採用する概念の整理」では、本論文の下地となる観光研究の系譜や、観光まちづくりとそれに類似する概念について、主に先行文献研究により整理する。

第3章「夕張市の歴史的経緯と求められる観光」では、夕張市の歴史的背景や現状の分析から、今後のあるべき観光の方向性について、文献・資料調査、関係者へのヒアリング調査などから明らかにする。

第4章「地域内外協働のタウンウォッチングによる地域資源の選定・評価」では、第3章で示した夕張市における観光のあるべき姿を具体的に検証する。清水沢地区で行われた地域内外の人々を対象としたタウンウォッチングにおいて、写真投影法によるデータ収集ならびに追加調査を行い、地域住民が炭鉱遺産を地域資源と認識するために必要な検討を行う。

第5章「地域内外の双方向的な交流を目的とした『炭鉱住宅オープンハウス』イベント」では、第4章で得られた知見を発展させ、炭鉱住宅の持つ資源性に着目し、催事での参与観察、アンケート、ならびに自宅公開者を対象とした催事前後のインタビュー調査により、対話を通じて地域内外の双方向的な交流を深化させていくという手法が、清水沢地区での新たな観光展開にどのように貢献するかを検討を行う。

第6章「清水沢地区におけるエコミュージアムの構想」では、これまでの知見を踏まえ、地域再生を目標とするエコミュージアムの構想を行う。

第7章「結論」では本論文の総括と今後の研究課題について述べる。

以下で本論文の流れを示す。

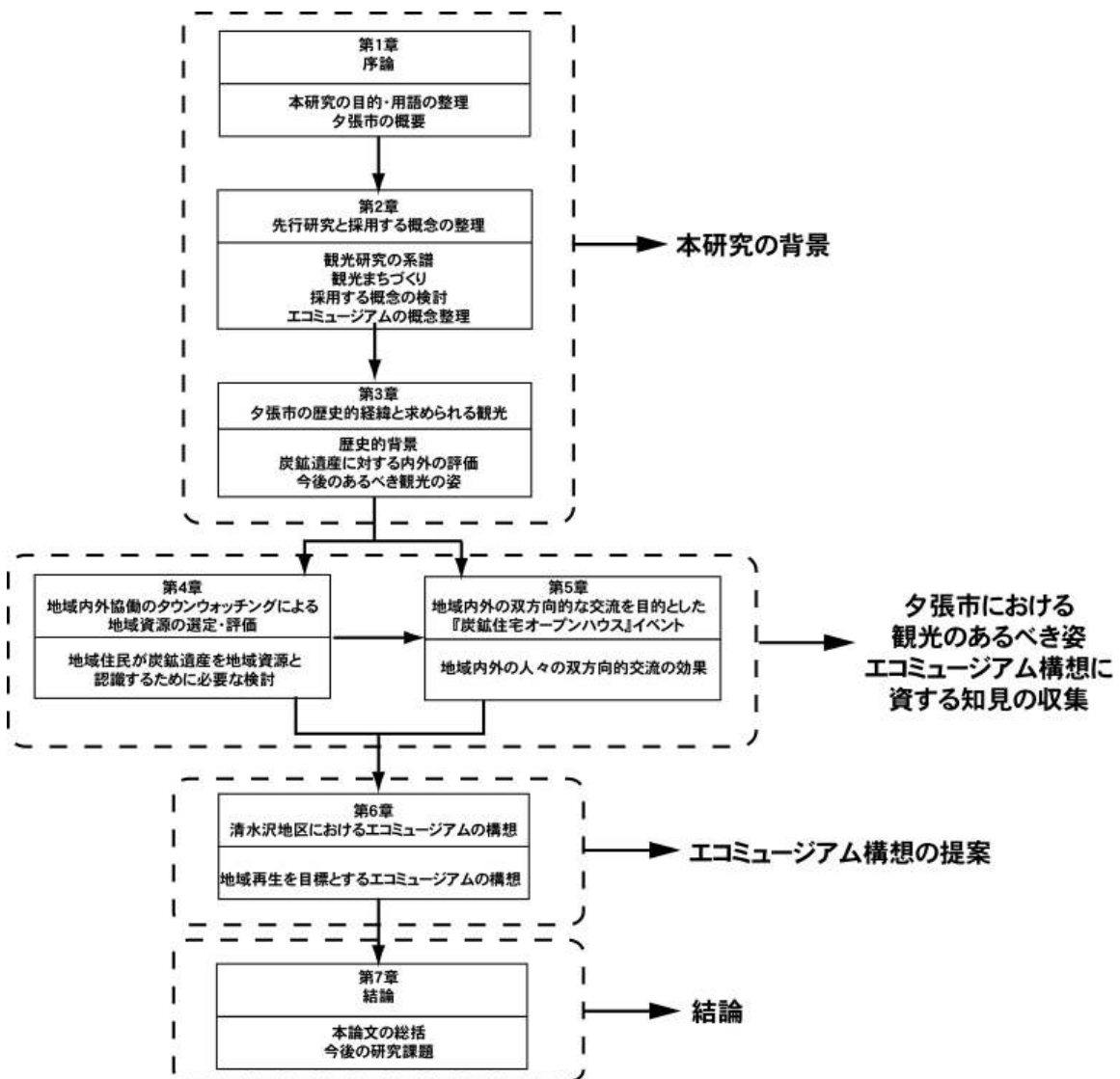


図 1-7 本論文の流れ

筆者作成

第2章 先行研究と採用する概念の整理

2-1 夕張を対象とした研究

夕張を対象とした研究は戦前から地質学を中心に見られ、炭鉱稼行中は・鉱山学・工学などの分野において蓄積された。炭鉱住宅の構造や住区レイアウトなどは、建築学の立場¹からアプローチされている。

社会科学における夕張を対象とした研究は、主に戦後の社会学において、労働問題や社会構造などにアプローチした研究が多い。その中でも、布施鉄治の研究グループは、1972年から9年に及ぶ夕張地域総合調査の結果を、『地域産業変動と階級・階層』として1982年に発表した。夕張市の地域社会を構成する、炭鉱労働者を中心としたさまざまな階級・階層の人々の現実について、生産・労働—生活史・誌を土台にモノグラフ研究として構成している。

また1980年代には、学問分野以外でも炭鉱事故を扱ったレポートや写真集²、炭鉱から観光への転換に焦点を当てた書籍³が数多く発表され、社会的関心の高かったことが伺える。

近年は旧産炭地の地域振興やまちづくりに関する研究⁴や産業遺産の活用などの観点⁵、また財政破綻表明後は、学問の有無に関わらずさまざまな分野からその原因の究明や背後関係に関心が寄せられている⁶。しかし、観光学の視点から夕張市の観光政策や観光振興を論じたものは、ほとんど見られない。

¹ 例えば駒木(1993)、瀬戸口(2008)などが挙げられる。

² 例えば、小池弓夫(1983)『地底の葬列—北炭夕張 56・10・16』桐原書店などがある。

³ 例えば、青野(1987)などがある。

⁴ 例えば、山下・進藤(1999)、今(2003)、高橋ほか(2007)などがある。

⁵ 例えば、須田ほか(2002)、中野ほか(2006)などがある。

⁶ 例えば日本経済新聞社編(2007)、吉岡(2007)、鷲田(2007)、橋本(2007)、読売新聞北海道支社夕張支局編(2008)など多数。

2-2 観光研究の変遷

2-2-1 マス・ツーリズムから「新たな観光」へ

観光は、社会と経済の発展とともに様々な形態をとった。ジャファリは観光についての個人の主張や著作を「観光を位置づける特徴と整理の土台」という視点から、4つのグループに集約した。それぞれの土台は年代順に現れるが、それぞれが現在も個別に用いられている^{7・8}。

<擁護の土台>(1960年代)観光、つまりマス・ツーリズムの経済的重要性に焦点を当て、観光開発の推進を支持。

<警告の土台>(1970年代)社会文化的影響や環境的影響など観光のもたらすマイナスインパクトへの批判

<適合の土台>マス・ツーリズムに代わる新たな観光の戦略としてオルタナティブ・ツーリズムなど、コミュニティ中心志向型観光論の展開。現在の観光研究の主流。

<知識ベースの土台>今後の目標として、3つの土台を架橋し、科学的知識の集積体を編成する。観光論から観光学への転換。

本節では今日の観光が置かれた状況を把握するため、現時点の主流である<適合の土台>までの観光研究の系譜を概観する。

マス・ツーリズム(Mass Tourism)

マス・ツーリズムは、前田編『現代観光学キーワード事典』(1998)によれば、「産業化を達成した国々において、観光産業の発達により、人びとが広く観光に参加する近代観光の特徴的現象の一つ」⁹である。

貴族階級の特権であった観光は、20世紀半ば以降ジャンボ・ジェット旅客機の登場など観光産業の発達により便宜化が図られ、爆発的に一般大衆にも拡大した。このようなマス・ツーリズムの形態は、先進諸国で1960年代初め頃から出現し、1960年代後半には世界中に拡散、1980年代にはアジアでもみられるようになった。

マス・ツーリズムの拡大は、「北」の豊かな送り出し国と、「南」の貧しい受入れ国という構図を生み出し、観光公害と呼ばれる混雑・騒音・ごみ・犯罪・買春や、環境の汚染や破壊、文化の変容などの深刻な「南北問題」を、観光の受入れ側の国にもたらした¹⁰。

オルタナティブ・ツーリズム(Alternative Tourism)

⁷ スミス・エディントン、安村訳(1996)p11.

⁸ 安村(2001)pp.29-37.

⁹ 前田編(1998)p5.

¹⁰ 安村(2006)p58.

1970年代頃からマス・ツーリズムの弊害を考慮した観光形態が発生し始め、1980年代になるとマス・ツーリズムの現実批判がますます高まった。1980年代末期、第三世界観光超教派教会連合が「オールタナティブ・ツーリズム」という用語を初めて用い、1989年には国際観光学アカデミーの議題としてこの概念が取り上げられた。

オールタナティブ・ツーリズムの特徴は、小規模、地域主体、住民参加、管理強化、交流重視などである¹¹。しかしこの会議において、オールタナティブ・ツーリズムの概念が曖昧と指摘され、代替案として「持続可能な観光」、「責任を伴う観光」などが提案されたが、オールタナティブ・ツーリズムは、マス・ツーリズムの観光形態に代わる新たな観光形態の全体を表す広義の概念として広く定着した¹²。

サステナブル・ツーリズム (Sustainable Tourism)

サステナブル・ツーリズムは、サステナブル・ディベロップメント (Sustainable Development) の理念にならって提唱された、観光の「新しいあり方」である¹³。

「サステナブル・ディベロップメント」は、1987年の国連環境開発世界委員会(ブルントラント委員会)の報告書で初出した後、1992年の国連環境開発会議(地球サミット)を経て広く認識されるようになった。観光の領域でも、この概念に基づいた「サステナブル・ツーリズム」の実現に向けた取り組みが主流となった。前述したとおり、「サステナブル・ツーリズム」の用語は既に1989年の国際観光学アカデミーで「オールタナティブ・ツーリズム」に代わる用語として提唱されていたが、地球サミット以降急速に認識が広まり、1990年代からはほぼ同一の意味として置き換えられたり、同時に用いられたりしている。

UNWTO(2004)はサステナブル・ツーリズムの概念を以下のように定義している。

「サステナブル・ツーリズムは観光開発の環境、経済、社会文化的側面を対象とし、あらゆる観光形態や目的地にも適用される。長期にわたる持続可能性を保証するために、環境資源の最適な利用、地域社会の社会文化的な尊重、社会経済的利益の公正な配分の三次元のバランスを保持しなければならない」¹⁴

新たな観光形態

近年、前述したオールタナティブ・ツーリズムないしサステナブル・ツーリズムの理念が反映された、新たな観光形態¹⁵が出現してきた。代表的な概念であるエコツーリズムは、セバーリョス・ラスク

¹¹ 安村(2006)p61.

¹² 安村(2001)pp.21-22.

¹³ 前田編(2003)p6.

¹⁴ UNWTO(2004)UNWTO ホームページ(最終検索 2009年1月29日)

¹⁵ なお本論文では、これらの理念を表す表現として、以降「新しい観光」の用語を用いる。安村(2001)も「マス・ツーリズムに代わる観光のあり方」と「ポストモダンへの時代的転換に関わる観光のあり方」という二つの視点から「新たな観光」の用語を使用している。(安村(2006)では、同義で「新しい観光」を用いている。) 安村(2001)p22.

ライン(1983)によれば、「比較的荒らされていない自然地域で、自然を楽しみ味わうことを目的とした、環境に配慮した観光。環境保全を推進し、来訪者による負荷を極力減らし、地域住民に何らかの社会経済的利得を提供するもの」とした¹⁶。

日本においては、「日本エコツーリズム協会」が、エコツーリズムを以下のように定義している¹⁷。

エコツーリズムとは

1. 自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること。
2. 観光によってそれらの資源が損なわれることがないよう、適切な管理に基づく保護・保全をはかること。
3. 地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果を実現することをねらいとする、資源の保護＋観光業の成立＋地域振興の融合をめざす観光の考え方である。それにより、旅行者に魅力的な地域資源とのふれあいの機会が永続的に提供され、地域の暮らしが安定し、資源が守られていくことを目的とする。

つまりエコツーリズムは、自然及び人文的な生態の保護と活用を目的とした観光で、地域社会への経済的効果に配慮されるものであり、この特徴はまさしくオールタナティブ・ツーリズムやサステイナブル・ツーリズムに通じる、新しい観光の一形態と言える。

そのほかにも、グリーン・ツーリズム、カルチュラル・ツーリズム、エスニック・ツーリズムなども新しい観光形態の代表例といえる。また、観光者が自らの関心や目的に基づき観光を通じての体験的学習を意図するスペシャル・インタレスト・ツーリズム(Special Interest Tourism: SIT)も、これに含まれることがある¹⁸。

2-2-2 地域への視点

Peter E. Murphy(1985) “Tourism- A community approach”(ピーター E. マーフィー, 大橋泰二訳(1996)『観光のコミュニティ・アプローチ』)は、地域社会を重視したアプローチ(コミュニティ・アプローチ)を提唱したものである。ジャフアリの分類では「適合の土台」に位置づけられる本著は、「オールタナティブ・ツーリズム」「サステイナブル・ツーリズム」という概念が定着する以前に刊行されたものであり、今日の観光研究に非常に有用な示唆を与えた。

マーフィーは、観光の諸問題を解決し、広く観光が支持されるために、「コミュニティ志向のアプローチにより観光を地域資源と見なすことができれば、観光産業は社会的、経済的利益の潜在力を高める」¹⁹とし、環境・経済・文化面からコミュニティにおける観光開発の適切な管理・運営方法について検討し、土地の受け入れ能力や地域社会の意思決定に基づきながら、観光は再利用可能な資源産業としてシステム論的に統合された計画、運営が必要であると結論付けている。このコミュニティ・アプローチの根拠は、「観光商品の一部をなす地域住民の善意と協力に大きく依存している」²⁰という観光のホスピタリティ依拠の性質による。ひとたび地域に受け入れられないような事態が

¹⁶ 前田編(2003) p29.

¹⁷ 日本エコツーリズム協会ホームページ(最終検索 2009 年 1 月 29 日)

¹⁸ 安村(2001)p105.

¹⁹ マーフィー(1996)p64.

²⁰ マーフィー(1996)pp.211-240.

起これば、観光に対する拒否反応や敵対心が生じ、観光商品の魅力が大きく低下するからである。

その後の新しい観光の展開により、「コミュニティ・アプローチ」は、必然的な概念として認識されるようになった。長谷編(1997)では、「コミュニティ・アプローチ」を「観光地やリゾートづくりに対して、コミュニティ(地域社会)側が積極的にアプローチすべきとする考え方である」²¹としている。

吉田(2003)も、日本における観光地経営の先行研究では、「観光事業者」・「観光客」・「観光対象」との関連のみで捉えられ、地域住民の関与や影響は無視されていると批判している²²。マス・ツーリズム以降の観光は、地域に与える経済的・文化的効果だけではなく、地域社会に与える負のインパクトという側面を含める必要があるとし、観光の構成要素として学説で確立している先の三要素に「地域社会」を加え、四要素とすることを提唱し、諸要素間をバランスよく考慮する必要があるとしている²³。

2-2-3 小括

以上のことから、今後の観光においては、新しい観光の概念、すなわち環境・経済・社会文化などあらゆる側面において、持続可能性を考慮した方法をとることが求められていると言える。このような新しい観光においては、観光が展開される地域社会への配慮は欠かせないものであり、かつ地域住民自身にも観光プランニングへの主体的な参加が求められる。

本論文では、これらの学説に立ち、現実的にマス・ツーリズムからの転換に迫られている地域での新しい観光のあり方を論じる。マス・ツーリズムの反省点を述べるにとどまらず、同一の地域において新しい観光のありかたを論じることは、閉塞した地域に新たな展開をもたらすことに貢献すると考えた。

²¹ 長谷編(1997)p23.

²² 吉田(2003)p76.

²³ 吉田(2003)p12.

2-3 観光まちづくりの概念

2-3-1 観光まちづくりの概念に関する先行研究

前節では新しい観光の特徴として、あらゆる側面における持続可能性の保持や、地域社会の重視という点を述べた。観光まちづくりの「観光」とは、1-3で掲げた定義からも、このような新しい潮流に位置づけることができる。

井口(2005)は、観光まちづくりと同義の「まちづくり観光」について、「まちづくり観光とは“まちづくり”、“くらしづくり”、そして“観光振興(あるいは、本当の意味での観光地づくり)”を三位一体のものとして捉え推進する文化施策なのである」²⁴とし、まちづくり観光を「オールタナティブなツーリズムのひとつの形態」と表現している。

また安村(2006)は、観光まちづくりを「新時代に向けて新しい生活空間を“観光”で再生する住民の社会運動」とし、その基本指針を「観光まちづくりの主役は住民である。住民が持続可能な“まち”を、持続可能な観光でつくる」²⁵としている。この「持続可能性」については、西村も指摘しており、「観光まちづくりの三要素である『地域の住民・地域の資源・来訪者』が、他と齟齬を来すことなくサスティナビリティを保証されていることが観光まちづくりの基本である」²⁶としている。

これらのことから観光まちづくりは、観光により地域の持続可能な発展を指向し、住民の生活を向上させるために取り組まれる活動の概念と言え、疲弊した地域の再生に寄与する可能性が期待できる。

そこで、本論文において「観光まちづくり」は、1-3で述べた観光まちづくり研究会の定義に依拠しつつも、「持続可能性に配慮した新しい観光によるまちづくり」、つまり「地域住民が主体となり、地域の資源を活かすことで、来訪者との交流を振興し、地域での生活をよりよくすることを目的とする概念」として捉える。

2-3-2 観光まちづくりの事例

「観光まちづくり」という用語が使用されるようになる以前から、地域住民が主体的に地域内の資源の活用に取り組む活動が各地で見られた。例えば、本論文の冒頭で引用した小樽市の事例は、住民たちが小樽運河に対し、まちの宝としての価値を見出したことに端を発した。同様の取り組みとして、“黒壁”と呼ばれて親しまれていた建物の取り壊し問題がまちづくりの契機となった滋賀県長浜市や、木蠟生産で栄えた街並みを外部から評価されたことをきっかけに、自治体と住民が協働して町並みや大正時代の劇場である内子座の保存に取り組んできた愛媛県内子町などが代表的である。

²⁴ 井口(2005)p9.

²⁵ 安村(2006)p110.

²⁶ 観光まちづくり研究会編(2002)pp16-32.

このような先進事例に共通するのは、地域住民が主体的に、滅失の危機に直面した地域資源の活用に取り組んだことで、地域の価値を認識し、地域をよりよくしようとする機運の醸成に繋がったということである。もともと観光を意図してまちづくりに取り組んだのではなく、まちづくりの過程において地域資源の価値が効果的に表現され、それに惹かれた来訪者との交流の促進、つまり観光に発展していったと言える。

2-3-3 観光まちづくりの導入に向けて

観光まちづくり研究会編(2000)²⁷では、観光まちづくりの具体的取り組み方針を18点掲げており、安村(2006)²⁸においても観光まちづくりの実践の仕掛けとして4点挙げている。しかし、どちらも網羅的な内容であるため、地域に導入する際には焦点を明確化し、戦略的な取り組みが不可欠であると考ええる。

前項の考察を踏まえると、観光まちづくりの端緒は「地域住民が主体的に地域資源の活用に取り組むこと」にあると言える。またそれは、地域資源の価値を効果的に表現する方法であるのが望ましい。従ってこれらを明快に実現する概念を、個別の地域によって検討するべきである。

夕張市においては、日本有数の旧炭鉱都市であったという地域固有の歴史的な文脈が存在する。夕張市における観光まちづくり導入に当たっては、この特徴を最大限に表現し、地域住民が主体的に地域資源の活用に取り組むことができる概念を援用するべきである。

そこで次節では、観光まちづくりの概念である「地域住民主体」・「地域資源の活用」・「来訪者との交流」に共通性を持つと考えられる概念・手法から、夕張市における観光まちづくりに援用すべき概念の検討を行う。

²⁷ 「まちづくり活動の振興、理解・共感の促進、知識・活動意欲の支援、組織的な対応の促進、計画的なまちづくりの推進、生活環境の保全・向上、産業の振興、生きがいの創出、資源の発見・再認識、資源価値の向上、利用と保全の調和、ホスピタリティの向上、情報の提供、共有化の促進、快適な移動環境の確保、情報収集・共有化の促進、行政による情報発信、観光収入による保全資金の確保、取り組みに関するモニタリング、チェック」の18点。観光まちづくり研究会編(2000) p9.

²⁸ 「魅力づくりの仕掛け、安全と安心の仕掛け、利便化の仕掛け、経済活性化の仕掛け」の4点。安村(2006)p133.

2-4 夕張市における観光まちづくりに援用する概念の検討

2-4-1 「地域資源の活用」に主眼を置いた概念

観光まちづくりでは、地域資源の価値を高めることや、持続可能な形態で活用することが求められる。まず、地域資源である自然・文化遺産を保全しながら活用する概念を二つ挙げる。

ナショナル・トラスト(National Trust)

ナショナル・トラストは、開発や都市化から貴重な自然や歴史的環境を守るために、広く人々から寄付金を募って、土地や建物などを買い取り、あるいは寄付を受けて保存・管理・公開する活動である²⁹。1895年、イギリスにおいて創立した「歴史的な名勝および自然的景勝地のためのナショナル・トラスト」(National Trust for Places of Historic Interest or Natural Beauty)が発祥である。

日本においても、鎌倉市や知床などで文化・自然の両面にわたり活動が展開されている。

町並み保全型まちづくり

町並み保全型まちづくりとは、西村(2004)によると、「歴史的な町並みという残された空間資源を手がかりに、地域社会の活性化と再生をはかる総合的なまちづくり運動」である³⁰。世界文化遺産の白川郷や江戸時代の雰囲気伝える蔵造り町家が立ち並ぶ埼玉県の川越など、人の暮らし・生活の香りが感じられる町並みの保存を、まちづくりの手がかりとする。

1975年の文化財保護法改正により、「伝統的建造物群保存地区」制度が創設され、それまでの単体としての歴史的建造物の保全にとどまらず、町並みや集落の保全という「面的保全」が制度化された。近年は文化財登録制度³¹や、重要文化財における近代化遺産³²の保全、2004年の景観法の制定などにより、町並み保全型まちづくりは対象を広げており、さらなる展開が期待されている³³。

2-4-2 「地域住民主体」に主眼を置いた概念

前節の地域資源の活用に加えて、夕張市での観光まちづくりにおいて非常に重要な概念となるのは、「地域住民の主体性」である。これらを備える概念として、グラウンドワークが挙げられる。

グラウンドワーク(Groundwork)

グラウンドワークは「行政・住民・企業がパートナーシップを組み、地域環境の改善を通して経済

²⁹ 前田編(2006)p78.

³⁰ 日本建築学会編(2004)p5.

³¹ 文化財登録制度については、3-4-1を参照のこと。

³² 近代化遺産については、3-4-1を参照のこと。

³³ 日本建築学会編(2004) pp.8-21.

および社会の再生を図り、持続可能な地域社会を構築すること」である³⁴。各地域の拠点である「グラウンドワーク・トラスト(Groundwork Trust)」は、専門能力を備えたスタッフを有し、コミュニティ・土地資源・雇用・教育・企業・若者の6つのキーワードで多様な事業を展開する。

1981年、イギリスセントヘレンズ市とノーズリー市にまたがる地区に、最初のグラウンドワーク・トラストが設立された³⁵。日本では1992年に静岡県三島市で組織されたのが最初である。

グラウンドワークは来訪者との交流を意識した概念ではないが、「住みよいまちを作る」という活動は、観光まちづくりに通じるものと言える。

2-4-3 「来訪者との交流」に関する概念

一方で、地域の歴史や文化を題材とした地域資源の活用に加えて、観光まちづくりで体现される、サステナブル・ツーリズムやオールタナティブ・ツーリズムの理念に立脚する新しい観光のうち二つを取り上げる。

ヘリテイジ・ツーリズム(Heritage Tourism)

ヘリテイジ(遺産)・ツーリズムとは、「観光学辞典」によれば、「歴史的遺産を含む文化遺産に限らず、自然遺産をも含めて、人類の遺産を訪ねる観光」³⁶とされている。1992年のユネスコの世界遺産条約批准前後より、日本でも「遺産」を訪ねる観光が盛んになった。

しかし西山(2001)は、伝統的な集落や町並みもヘリテイジ・ツーリズムの対象として注目されるとし、このような地域住民の生活空間に来訪者を招き入れることによって成り立つヘリテイジ・ツーリズムこそが、自律的な観光であるとしている³⁷。

北海道においては、自然・文化・産業・生活などの有形・無形の財産を保全・活用することを通じて、北海道の新たな魅力づくりを目的とする「北海道遺産構想」³⁸が推進され、2001年と2004年に「北海道遺産」52件が選定された。同様の取り組みは全国各地で行われており、西山の言うような地域に立脚したヘリテイジ・ツーリズムの好例となっている。

産業観光

産業観光とは須田(2006)によると、「歴史的文化的価値のある産業文化財(古い機械器具、工場遺構等)、生産現場(工場、工房等)及び産業製品を観光資源としてそれらを通じて物づくりの心にふれるとともに人的交流を促進する観光活動」³⁹とされる。これには、現在の技術や工場を対象と

³⁴ 日本グラウンドワーク協会パンフレットより

³⁵ グリーン、小倉他訳(1999)p239.

³⁶ 長谷編(1997)p10.

³⁷ 西山(2001)p10.文化遺産観光の定義は(河野 1995)による。

³⁸ 北海道遺産構想推進委員会(2001).

³⁹ 須田(2006)p110.

する場合や、過去の産業遺産を対象とする場合があり⁴⁰、学びや体験を伴う産業観光は、SIT の要素を持つ、新しい観光形態の一つと言える。

国レベルにおいても、2007 年に施行された観光立国推進基本法に基づく観光立国推進基本計画において、「産業観光の推進」は施策の一つとして挙げられた⁴¹。

2-4-4 包括的な概念

これら3つを包括する概念として考えられるのが、地元学(地域学)とエコミュージアムである。さらにこれらの概念を具体化する重要な手法として、近年着目されるようになった「まち歩き観光」を取り上げる。

地元学・地域学

地元学は、提唱者である吉本(2000)によると、「外部地域の視点や助言を得ながら地域住民が主体となり、自分たちの足で地域を調べ、地域の固有性や豊かさへの視点を開発し、地域づくりに生かしていく知的創造行為」である⁴²。調査地域に居住する「土の人」、外部地域に居住する「風の人」が地域内をともに歩き、「あるもの探し」をコンセプトとして、「水のゆくえ」や「地域資源」を調査するのが主な手法である⁴³。1990年代前半ごろから熊本県水俣市で発祥し、その後岩手県や三重県などで取り入れられた。

地域学も地元学と同様の意味で使用され、北海道においては下川町で「地域学『しもかわ学会』」の例が見られる⁴⁴。地域名を冠した「〇〇学」のような名称を用いる例も多い。

これらは「学」を名乗っているが、深い学術性を求めるものではなく、運動論や生涯学習の機会としての側面が強い。外部の人の参画により、内部の住民が気づかない資源や価値の指摘という効果が期待でき、また人的交流が観光振興に通じる可能性もある。

エコミュージアム

新井による定義⁴⁵ではエコミュージアムを、地域資源の活用の方法として「現地で保存・育成・展示する」と明確に位置づけていることが特徴的である。また発案者であるリヴィエールは、自身の定義において「行政と住民の協働」や「住民が自らの地域を認識し、来訪者に提示するための鏡」という位置づけを行っている⁴⁶。即ちエコミュージアムは、「住民主体」「地域資源の保存・活用」「来訪者

⁴⁰ 須田(2006)pp.162-183.

⁴¹ 「観光立国推進基本計画」(観光庁ホームページ) p19,44,54.(最終検索 2009 年 1 月 29 日)

⁴² 吉本(2000)p8.

⁴³ 大塚「『地元学』の特徴と背景—水俣における地域再生の取り組み—」(最終検索 2009 年 1 月 29 日)

⁴⁴ (財)下川町ふるさと開発振興公社クラスター推進部ウェブサイト(最終検索 2009 年 1 月 29 日)

⁴⁵ 1-3、2-5-2 を参照のこと。

⁴⁶ リヴィエールによる定義は 2-5-2 を参照のこと。

を意識」という、観光まちづくりの概念を包括的に体現する概念であると言える。

まち歩き観光

「まち歩き観光」という形態は、2001年から開催されている「別府八湯温泉泊覧会」(通称オンパク)⁴⁷や、長崎市が2006年に開催した「長崎さるく博'06」⁴⁸により着目されるようになった。観光客が地元住民や専門家の案内によりまちを歩くことで、「いまそこに住んでいる人々の暮らしぶりを、それに反映している地域の歴史を、直接体験する」ことに主眼が置かれ⁴⁹、特に都市部における生活観光のあり方を示す手法といえる。

これらの概念は、観光まちづくりの目指すところの「地域での生活をよりよくすること」をも含んだ概念であり、観光まちづくりを体現する概念として、非常に示唆に富んでいると言える。

2-4-5 夕張市の観光まちづくりに導入されるべき概念

これらの概念の特徴を比較したのが下表である。

⁴⁷ 大分県別府市で1999年から行われていた「いかに温泉の恵みを活かしてまちが作られてきたかを紹介し、入浴だけではないまちの多面的な魅力を広く伝える」ことを目的とした「別府八湯ウォーク」を発展させたものである。観光まちづくり研究会編(2000)p30.

⁴⁸ 2006年に長崎市で212日間にわたって開催された、市内を散策することがメインの博覧会。延べ1,000万人の参加者があった。

茶谷(2008)pp12-22.

⁴⁹ 茶谷(2008)(最終検索2009年1月29日)

表 2-1 観光まちづくりに関連する概念の比較

筆者作成

名称	地域資源の活用	地域住民主体	来訪者との交流	地域資源の現地保存	遺産の保護	教育・研究	地域の発展	行政との連携	雇用	持続可能性
ナショナルトラスト	●	△	×	●	●	×	×	△	×	●
町並み保全型まちづくり	●	●	△	●	●	×	●	●	×	△
グラウンドワーク	●	●	△	△	△	●	●	●	●	●
ヘリテイジ・ツーリズム	●	△	●	●	●	●	△	●	×	△
産業観光	●	△	●	●	△	●	×	×	●	△
地元学・地域学	●	●	●	×	△	●	●	△	×	●
エコミュージアム	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
まち歩き観光	●	●	●	×	×	△	●	×	●	△

●…合致している
 △…場合によっては含む
 ×…含まない

観光まちづくりの要素を網羅する概念としては、2-4-4で挙げた地元学やエコミュージアムが最も適切である。しかし、夕張市が日本有数の旧炭鉱都市であったという歴史的な文脈の活用を考慮すると、歴史的な地域資源を対象とする「町並み保全型まちづくり」や「ヘリテイジ・ツーリズム」が持つ特有の要素についても網羅されるべきである。

一つ目は「地域資源の現地保存」である。資源が本来の役割を果たしていた場所にそのまま保存されるという形態は、資源に「場の持つ力・空気・雰囲気・人々の思い・記憶」など測定不能の価値を付加することができる。これは、「人々と、場所あるいは環境との間の、情緒的な結びつき」というトゥアンの「トポフィリア」⁵⁰や、吉岡(2005)の「歴史的な文脈の持つ気配(=暗黙知)を感じ取り、想像力の喚起(=知識創造)を触発するという、地域資源の所在している『場』が固有に持つ可能性」⁵¹に通じており、資源のある空間だけでなく、資源が存在し続けてきた時間をも捉える概念として、地域資源の観光資源としての説得力増大に貢献できると考える。

二つ目は「遺産の保護」という形態である。単なる資源の持続可能性よりも積極的に資源を守ろうとする意味合いであり、歴史的資源を対象とした概念以外では見過ごされる傾向にある。

三つ目は「行政との連携」である。歴史的な資源は所有関係が複雑である場合が多く、権利の調査・優遇などの便宜を図るためには、行政とのパートナーシップが欠かせない。

⁵⁰ 吉田(2006)p45.

⁵¹ 吉岡(2005)p37

これらの要素を概念中に含んでいるのは、表 2-1ではエコミュージアム以外にはない。さらにエコミュージアムが特徴的であるのは、「博物館」であることにより、遺産の現地保存という最大の特徴のほか、研究や活用という機能を備える点、これにより一定の学術性を追求できる点である。また運動論的にも、展示により歴史を振り返ることだけを目的とするのではなく、住民自らが地域資源の研究・保存・活用に取り組むことで、地域社会の過去から現在を捉え直し、未来にそれらの価値を提示していくことが可能になる。これらの点が、他の概念にはないエコミュージアム特有の機能であると言える。

従って、夕張市が日本有数の炭鉱都市であったというアイデンティティを効果的に発揮し、「地域での生活をよりよくする」ためには、エコミュージアムの概念を観光まちづくりの骨幹とするのが最も有用であると考えられた。

そこで、次節において、エコミュージアムについて詳細に検討する。なお本節で検討した概念は、エコミュージアム構想の過程において、調査のための具体的手法やエコミュージアムのコンテンツとして、有用な示唆となる。

2-5 エコミュージアムの枠組みに関する検討

2-5-1 エコミュージアムの発生

エコミュージアムの起源は、1960年代のフランスにおいて、地域格差解消に向けた中央集権制緩和政策の一環として、地方自治体の管理運営による地方自然公園が設置されたことである。リヴィエールは、スウェーデンのスカンセン・オープンエアミュージアムをモデルに、それぞれの地域の民家を保存し、野外博物館にするという構想を打ち出し、これがエコミュージアムの原型となった。

エコミュージアム(Ecomuseum)という語彙はフランス語「エコミュゼ(Écomusée)」の英語訳である。1971年、第2代ICOM会長ユグ・ド・ヴァリーヌ・ボアンの提唱により、当時のフランス環境大臣ロベール・プージャッドが、第9回国際博物館会議場で宣言した。エコミュージアムとは「エコロジー」＋「ミュージアム」の合成語であるが、エコロジーは自然環境のみならず、人間生活の社会的営みも対象としている⁵²。

その後エコミュージアムは、フランス全土やベルギー・カナダなどフランス語圏にも広がっていった。アメリカやイギリスなど英語圏ではエコミュージアムという名称が用いられることは少ないものの、例えばイギリスの「アイアンブリッジ・ゴージ・ミュージアム」は、鉄の歴史の博物館として、エコミュージアムと共通する理念を持ち、運営されている⁵³。

2-5-2 エコミュージアムの定義・概念

エコミュージアムの発案者であるリヴィエールは、エコミュージアムの定義について、数回の改訂を行い、1980年に「発展的定義」⁵⁴を発表した。

エコミュゼは、行政当局と住民が共に構想し、作り上げ、活用する手段である。行政当局は、専門家と共に、便宜をはかり財源を提供する。住民は、各自の興味にしたがって、自分たちの知識や取り組み能力を提供する。

それはこうした住民が自らを認識するために見つめ合う鏡。そこで住民は、自分たちが繋ぎ止められている地域の説明を、また、世代の連続性や非連続性を通して、前世代の住民の説明に結びつく説明をしようと努める。それはこうした住民たちが、自分たちをよりよく知ってもらうために、自らの仕事やふるまい、内面性に誇りを持って来訪者に差し出す鏡である。

それは人と自然との表現。そこで人は自然的環境のうちに解釈される。そして自然は、伝統的社会と産業社会が自分たちの持つイメージに自然を適合させたようにその原初状態において解釈される。

それは時間の表現。説明は人が出現した時代の手前にまでさかのぼり、人が生きた先史時代・歴史的時代を通して広がり、人が生きている現代に至る。きたるべき時代に開かれ、それでいてエコミュゼは決定機関気取りをすることなく、現行のように情報伝達屋と批評的分析の役割を担う。

それは空間の解釈。そこは、歩みを止めたり、散策したくなるような特権的空間である。

それは研究所。エコミュゼが外部の研究機関とも協力して、住民とその環境の歴史的・同世代的研究に貢献し、この分野における専門家の養成を奨励する限りにおいて。

それは保存機関。エコミュゼがその住民の自然遺産・文化遺産の保存と活用を援助する限りにおいて。

⁵² 大原(1999)p26.

⁵³ 日本エコミュージアム研究会編(1997)p10.

⁵⁴ Georges Henri Rivière(1980).日本語訳は日本エコミュージアム研究会(1996)「エコミュージアム研究」NO.1,p15を参照した。フランス語全文は資料①を参照のこと。

それは学校。エコミュゼがその住民を研究・保存活動に参加させたり、住民に自らの未来の諸問題をよりよく把握するように促せる限りにおいて。

この研究所、この保存機関、この学校は、共通の原理から着想されている。それらの機関が引き合いに出す文化というものは、そのもっとも広い意味において理解されるべきで、それらの機関は、いかなる住民の層から発せられた言明であれ、芸術的表現や文化の尊厳を知らしめるように努めねばならない。多様性には限界がないが、それほどまでに資料はある標本から他の標本にかけて異なっている。それらの機関は自らのうちに閉じこもることなく、受け入れかつ与えていかねばならない。

リヴィエールの定義は、エコミュージアムの概念の指針とされ、これをもとにさまざまな研究者が独自の解釈を加えている。フランスのバス・セヌ・エコミュージアムのコンセルヴァートル(学芸員)・ジュベール(1996)は、エコミュージアムを以下の特色を持つものとして位置づけている⁵⁵。

- ① 行政と住民がともに構想し、作り、運営していく道具:知識・権力・利益の共有の理念
- ② 住民が自分自身を認識するために映し出す鏡:住民への正確な知識の還元理念
- ③ より良く理解してもらえるよう住民が来訪者に提供する鏡:対応と相互尊重の理念
- ④ 人間と自然の表現:強調されている基本理念。エコミュージアムは文化的構築物。
- ⑤ 時間の表現:もう一つの基本理念・未来の時間への開放の理念。自らを決定機関ではなく、客観的な分析者、情報提供者とする。
- ⑥ 明らかに恵まれた空間を伴う空間の解釈・理解:時間の解釈はエコミュージアムの中心となる場、そして空間の解釈・理解はサテライト(antenna)という形態で表現される。
- ⑦ 研究所:専門家の育成と、テリトリー、住民、環境に対する研究を目的とする。
- ⑧ 保存機関:自然環境と文化環境の保護と活用
- ⑨ 学校:住民が地域を自ら研究し、保護するようになるきっかけをつくる。
- ⑩ 共通理念:
 - ・最も広い意味での文化、特に遺産の中の文化
 - 考古・建築・記念碑・自然・民族・家具・物質などそれらに替わりうる遺産
 - ・テリトリーの関係する限りない多様性
 - ・外部への開放であり、内部への回帰ではない

また、フランス文化省は、「エコミュゼの組織原則」(通称:エコミュゼ憲章)において、以下のように定義付け、目的・機能等を詳しく規定している⁵⁶。

「エコミュゼは、ある一定の地域において、住民の参加によって、その地域で受け継がれてきた環境と生活様式を表す自然・文化財産を総体にして、恒久的な方法で、研究・保存・展示・活用する機能を保障する文化機関である。」

一方エコミュージアムの概念を日本に普及させた新井重三は、1973年に発表されたリヴィエールの論文から、エコミュージアムを以下のように解釈している⁵⁷。

「地域社会の人々の生活と、その自然環境、社会環境の発達過程を史的に探求し、自然遺産および文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することを通して、当該地域社会の発展に寄与することを目的とする博物館である」

1995年に発足した日本エコミュージアム研究会は、エコミュージアムの基本的な意義と役割を相互に確認するために、2001年に「エコミュージアム憲章2001」を提唱した⁵⁸。その中で定義を、「エコミュージアムは、環境と人間との関わりを探る博物館システムである。それは、ある一定の地域において、住民の参加により、研究・保存・展示を行う常設の組織であり、地域社会の持続的な発展に寄与するものである。」

⁵⁵ ジュベール(1996)p32.

⁵⁶ 大原(1999)p12.

⁵⁷ 新井(1995)p11.

⁵⁸ 大原(2002)pp.46-47.

としている。

大原はこれらの解釈をまとめ、エコミュージアムの概念を、「領域」＝「地域」を重要な対象とする博物館という前提概念のもと、「手法的特徴」として「住民の主体的参加」、「形態的特徴」として「遺産の現地保存」という両者をあわせもち、統合化した存在として、図 2-1のように整理した。

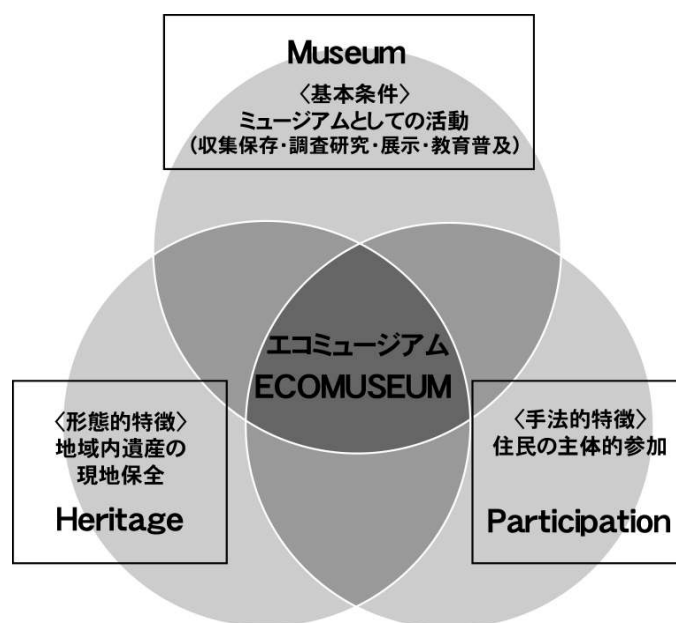


図 2-1 エコミュージアムの概念

出典：大原(1999)⁵⁹を筆者修正

これらのことから、エコミュージアムの概念は以下のようにまとめられる。

- 1 ある一定の地域において、自然・人間社会環境を時間的・空間的に捉える
- 2 博物館の「研究・保存・展示・活用」機能を持つ
- 3 行政と連携しながら、地域住民が主体となり、外部との交流を図る。

2-5-3 エコミュージアムの構造

エコミュージアムは、敷地内に展示物が点在する野外博物館に着想を得ていることから、形態面においては伝統的な博物館と大きな差異がある。以下でエコミュージアムの一般的構造について把握する。

テリトリー：運営拠点となる施設や、展示物である地域資源(遺産)などが散在している一定の地域。行政による区界区分ではなく、文化的定義に基づく⁶⁰。

コア：管理・運営の本部施設。中核施設として地域の歴史・資源・遺産を概観できる機能を持ち、

⁵⁹ 大原(1999)p15.

⁶⁰ 小松編(1999)p36.

地域の研究・調査・学習を行っていく拠点である⁶¹。

サテライト(アンテナ):地域に残る歴史的遺産や、地域で培ってきた文化や産業、および地域の自然等で構成され、それを地域の空間の中で示す⁶²。

ディスカバリートレイル(発見の小径):現地保存されている地域の自然や歴史・文化の観察用散策路⁶³

これらのほかにも、要素間を結ぶアクセス道路や、誘導のためのサインなどもエコミュージアムの構造として必要となってくる。

丹青研究所は、エコミュージアムの構造と機能を以下のように整理した。

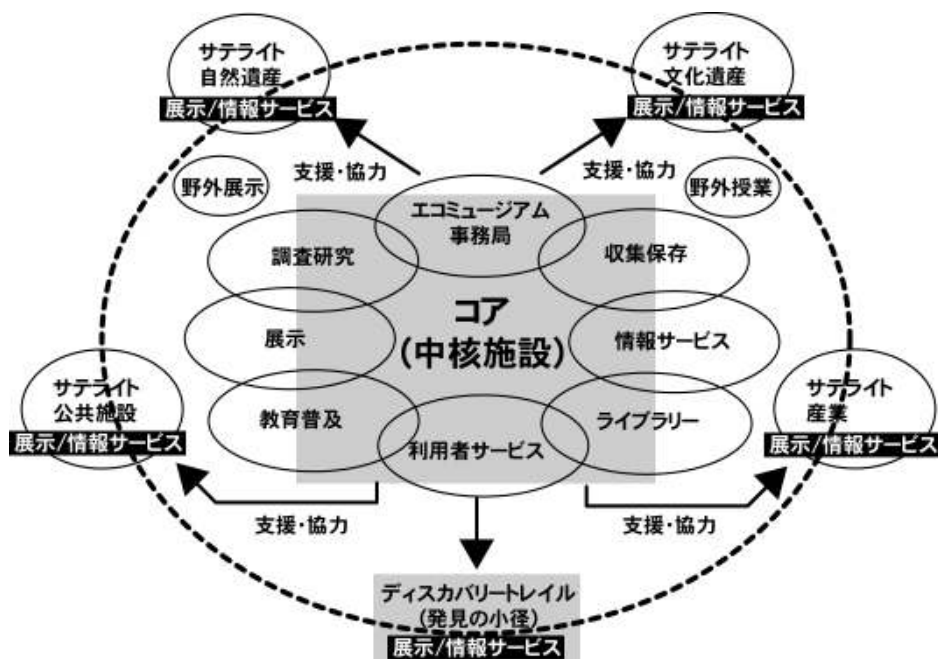


図2-2 エコミュージアムの構成概念図

出典:丹青研究所(2003)⁶⁴

2-5-3 エコミュージアムの運営

リヴィエールの発展的定義では、エコミュージアムは行政と住民がともに運営に携わるとしている。これを新井は「二重入力方式」とし、エコミュージアムの運営面での特徴と位置づけている⁶⁵。

フランス・エコミュージアム憲章では、エコミュージアムの運営にあたる組織は、学術的委員会・

⁶¹ 丹青研究所(2003)p30.

⁶² 丹青研究所(2003)p34.

⁶³ 丹青研究所(2003)p36.

⁶⁴ 丹青研究所(2003)p28.

⁶⁵ 新井(1995)p12.

利用者委員会・管理者委員会の3つの委員会の代表者による運営委員会が民主的に運営を進めることになっている。日本のエコミュージアム憲章においても、フランスの規定を参考にし、委員会による運営と位置づけている。

2-5-4 従来型の博物館との相違点

以上でエコミュージアムの特徴について述べたが、1960年代に発生した比較的新しいエコミュージアムの概念は、旧来の博物館とはどのような点に差異があるのかを比較する。

日本において「博物館」は、昭和26年制定の「博物館法」第2条において以下のように定義づけられている。

「この法律において「博物館」とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管(育成⁶⁶を含む。以下同じ。)し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関(社会教育法による公民館及び図書館法(昭和25年法律第118号)による図書館を除く。)のうち、地方公共団体、一般社団法人若しくは一般財団法人、宗教法人又は政令で定めるその他の法人(独立行政法人(独立行政法人通則法(平成11年法律第103号)第2条第1項に規定する独立行政法人をいう。第29条において同じ。)を除く。)が設置するもので次章の規定による登録を受けたものをいう。」(2006年改正)

この定義で規定される博物館を「登録博物館」といい、博物館資料があること、学芸員その他の職員を有すること、必要な建物および土地があること、1年を通じて150日以上開館することの4つの条件を満たす必要がある(第12条)。またこれに準じて一定の要件を満たす「博物館に相当する施設(第29条)」や、文部科学省の社会教育調査によって調査される、登録博物館と同種の事業、相当施設と同等以上の規模であるにもかかわらず博物館法の適用を受けない施設「博物館類似施設」と呼ばれるものもある⁶⁷。

ここで言う「博物館資料」は、「博物館が収集し、保管し、又は展示する資料をいう。」と博物館法第2条の3⁶⁸に定められている。

このことから、日本における法律上規定された博物館の特徴は、次のようにまとめられる。

- ・機能面での特徴 資料の収集、保管(育成)、展示・教育、調査研究
- ・形態面での特徴 博物館資料があること、学芸員その他の職員を有すること、必要な建物および土地があること、1年を通じて150日以上開館すること

これらを日本における一般的な従来型の博物館とし、新しい潮流であるエコミュージアムとの相違点を検証する。

まず機能面では、エコミュージアムは資料の収集、保管、調査研究、展示・教育という博物館の

⁶⁶ 育成の対象となるのは動植物である。

⁶⁷ 2005年10月1日現在の施設数は、登録博物館 865、博物館に相当する施設 331、博物館類似施設 4418である。文部科学省平成17年度社会教育調査より作成。(最終検索2009年1月29日)

⁶⁸ 2008年の改正で、「電磁的記録(電子的方式、磁気的方式その他人の知覚によっては認識することができない方式で作られた記録をいう。)を含む。」という条文が追加された。

機能を、忠実に体现しているといえる。ただし、資料の収集、保管方法については、次に述べる形態面での特徴により、従来型の博物館とは大きく異なる。

次に形態面での最大の差異は、「必要な建物および土地があること」である。エコミュージアムはテリトリーという概念はあるが、必ずしも資料を収蔵する建物や土地を必要とせず、旧来の博物館が一ヶ所に収蔵できる資料を対象とするのに対し、エコミュージアムは人々の記憶の中も含めて現地保存を基本とする点で大きく異なる。

博物館資料についても同様に、エコミュージアムは人々の記憶や未来との関連も含めて、有形・無形の地域の遺産を対象としているため、博物館が「収集することができる資料」、つまり有形のものを対象とするのとは大きく異なる。

なお、学芸員の有無や開館日数については、各エコミュージアムによって大きく異なるが、「住民皆が学芸員」という特徴的な考え方がある。

また新井⁶⁹は、エコミュージアムと従来型の博物館(伝統的博物館)の相違点を、以下のように述べている。

- 1 目的 国民の教育、学術及び文化の発展に寄与(伝統的博物館)、当該地域社会の発展に寄与(エコミュージアム)
- 2 資料 収集と展示は不可分(伝統的博物館)、現地保存し収集を否定(エコミュージアム)
- 3 管理・運営 設置者主体(伝統的博物館)、住民と行政の二重入力方式(エコミュージアム)

これらの相違点を、リヴァールは博物館活動の3つの要素、つまり①活動の行われる場・容器・構造(スケルトン)、②活動の対象・内容、③それにかかわる人間・博物館活動の主体と客体それぞれの比較について、以下のように表現している⁷⁰。

	[場]	[内容・対象]	[人]
従来型の博物館 ⁷¹	= [建物]	+ [収集品]	+ [専門家+公衆]
エコミュージアム	= [領域]	+ [遺産+記憶]	+ [住民]

以上のことからエコミュージアムは、従来型の博物館の機能を起源としつつも、形態をはじめとしてさまざまな要素に大きな相違点を持つ、博物館の新たな概念であるといえる。

なおICOMは、博物館情勢の変化に伴い定義を幾度か改訂している。次に掲げるのは、2007年

⁶⁹ 新井(1995)p12.

⁷⁰ 大原(1998)pp.16-17.

⁷¹ なお従来型の博物館の中には、エコミュージアムの起源となった「野外博物館」も含まれる。野外博物館は、収集・移築型が中心の、オープンエアにおける文化史博物館を指すが、町並みなど現地保存型も含んでいる。杉本(2000)は、エコミュージアムの長所を認めつつ、野外博物館の意義について以下のように述べている。

「現地保存型野外博物館(筆者注・エコミュージアムが含まれる)は、環境と共に生きてきた直接体験からくる具体的な生きている姿やその迫力、強い印象など利点も多い。

しかし一方、失われゆく伝統文化が急増している現状では、現地での保存が難しい場合、保存の手段として収集展示型、移築復元型野外博物館も重要なのである。」

杉本(2000) pp.13-15.

の最新版である⁷²。

A museum is a non-profit, permanent institution in the service of society and its development, open to the public, which acquires, conserves, researches, communicates and exhibits the tangible and intangible heritage of humanity and its environment for the purposes of education, study and enjoyment.

博物館とは、社会とその発展につとめ、広く一般に開かれた、有形無形の人類と人類を取り囲む環境の遺産を、研究、教育、楽しみのために、取得、保存、研究、展示、継承する非営利の常設施設である⁷³。

ICOMの定義は2007年の改訂によって、2001年の定義まで言及されていた「material evidence of people and their environment.」⁷⁴(人間とその環境に関する物的資料)が「tangible and intangible heritage of humanity and its environment」(人類とその環境に関する有形無形の遺産)に変更されているほか、伝達する、伝え合うという意も含む、「communicates」が加えられている。これはまさに、地域の記憶をも収集の対象とし、住民と来訪者の相互理解を目指すエコミュージアムの概念が反映されていると言え、エコミュージアムは、従来型の博物館の概念に逆に影響を与えるようになったことが看取できる。

近年、日本でも、地域の文化を対象にし、住民を積極的に巻き込んだ「地域博物館」⁷⁵などの形態をとる伝統的博物館も増加しているものの、博物館法の再定義にまでは至っていない。

2-5-5 日本におけるエコミュージアムの現状

日本におけるエコミュージアムは、1972年に鶴田総一郎が「環境博物館」として紹介したが、1987年に新井が再紹介するまで関心を持たれることがなかった⁷⁶。エコミュージアムと同様の理念によるまちづくり活動は、高度成長期末期の1970年代から始まっていたが、バブル期のリゾートブームの対極で地域活性化や村おこしなどが叫ばれていた時期に、自らの地域の文脈を活かしたまちづくりとエコミュージアムの理念が合致し、導入する地域が現れ始めた。

最初に取り組みを始めたのは、1991年に町の総合開発基本構想にエコミュージアムの理念を反映させた山形県朝日町である。行政と住民の協働により作り上げられ、現在はNPO法人朝日町エコミュージアム協会が運営に当たっている。その後千葉県富浦町「富浦エコミュージゼ」、岩手県東和町「イーハトーブ・エコミュージアム」、徳島県板野町・上板町・旧土成町「あさんライブミュージアム」などが次々と発足し、1995年には全国的な研究組織である「日本エコミュージアム研究会」が発足した⁷⁷。

⁷² ICOM ホームページから引用。(最終検索 2009 年 1 月 29 日)

⁷³ 八木(2008)p2.

⁷⁴ 「Development of the Museum Definition according to ICOM Statutes (1946-2001)」(最終検索 2009 年 1 月 29 日)

⁷⁵ 主に公立の博物館において、地域文化の向上、地域の歴史・文化の保存・伝承・活用、生涯学習への対応など多様な事業の展開を目的に開設している博物館である。主に地方自治体が設立し、運営は第三セクターや民間組織としての財団、地域の人々などが行う。鈴木他(2004)pp.98-119.

⁷⁶ 大原(1999)p8.

⁷⁷ 日本エコミュージアム研究会(1997)pp.43-46.

また、農林水産省の事業として、エコミュージアムの理念に着目した「田園空間整備事業」が平成10年より開始された。これは農村地域を対象に、「農業・農村の営みを通じてはぐくまれてきた「水」と「土」と「里」が織りなす地域資源を歴史的・文化的視点から見直し、伝統的な農業施設や美しい景観を空間全体として整備・再生し魅力ある田園空間を生み出す取り組み」を「田園空間博物館」とし、この取り組みの中で、地域住民が主体的に地域資源を活用して歴史教育、都市との交流、自然観察、体験活動などを展開している⁷⁸。この事業は、土木事業の補助であるという従来型の側面も持つが、生産性の向上だけではなく、ワークショップや環境学習などソフト面の事業も重視している点が特徴的とされ⁷⁹、現在56件が田園空間整備事業の適用を受けている。

日本では、エコミュージアムに法律上の定めがなく、「地域まるごと博物館」や「フィールドミュージアム」など、エコミュージアムという名称を使用しない例も多いため、これらを全て把握することは困難である。余(2003・2004)は、日本のエコミュージアムと考えられる56ヶ所の地域を文献やインターネットなどから選定し、その目的と特徴を調査した⁸⁰。その結果、エコミュージアムの目的は、重視されている順に「学習中心型」「環境保存中心型」「地域社会改善中心型」「経済活性化中心型」「地域整備中心型」の5つに分類された。最も多い目的である「学習中心型」のエコミュージアムでは、学芸員の養成講座や地域の歴史などの学習を主な活動としており、「環境保存中心型」では、国立公園や天然記念物を活用し、自然の観察やふれあいなどの自然体験を行っている。

しかし、学習中心といえども、フランスのように学芸員が専門職員として必ず在籍しているわけではなく、生涯学習の側面が強い。これらのことから日本のエコミュージアムは、学術性を追求した博物館の一形態としてより、生涯学習や地域資源を活用した活動への取り組みを重視する、地域振興・まちづくりの手法として捉えられていると言える。

2-5-6 エコミュージアムと観光との関わり

エコミュージアムと観光との関わりにおいて、吉田は、「エコミュージアムは、固有性の強い、全国的にも名前を知られた文化・歴史遺産に依拠するヘリテイジ・ツーリズムに比べ、むしろほかの地域にも似たものがあるとしても、その資源が地域にあることの意義を見出し、価値付けていく運動だと見ることができる。」⁸¹としている。地域住民が自らの地域を時間的・空間的に捉え直し、その地域における価値を来訪者に提示していくことは、新しい観光の概念に通じると言え、2-4-4で述べた点からも、エコミュージアムは観光まちづくりの概念を包括していると言える。

しかし、日本において観光学からエコミュージアムを論じた研究は多くない⁸²。したがって観光の

⁷⁸ 農林水産省ホームページ「田園空間博物館について」(最終検索 2009年1月29日)

⁷⁹ 山田(2006)pp.6-12.

⁸⁰ 余(2003) pp.265-268.および(2004) pp.343-344.

⁸¹ 吉田(2003)p102.

⁸² 日本観光研究学会機関誌『観光研究』ならびに『全国大会研究学術論文集』において、1987年から2008年までの21年間でエコミュージアムをタイトルに含む論文(ポスターセッションは除く)は4件のみであった。

視点をういたエコミュージアム研究としても、本論文は意義深いと考える。

以下、第3章においては、エコミュージアム構想の計画与件となる夕張市の背景を明らかにし、第4章・第5章では、資源の吟味など、エコミュージアム構想に資する知見の収集を行う。第6章ではこれらを踏まえて夕張市の実情に合わせた独自のエコミュージアム構想を行う。

第3章 夕張市の歴史的経緯と求められる観光

3-1 成立から炭鉱閉山までの歴史的経緯

3-1-1 石炭の発見による夕張市の成立

夕張市は石炭の発見により発生した都市である。1874(明治7)年、アメリカ人鉱山地質学者ベンジャミン・スミス・ライマンが、夕張山地に石炭が埋蔵されている可能性を指摘し、その後1888(明治21)年、道庁技師・坂市太郎が志幌加別川上流で石炭の大露頭を発見、翌1889(明治22年)に設立した北炭により1890(明治23)年に夕張採炭所が開鉱され、夕張市の前身となる登川村が設置された。

1892(明治25)年には、北炭により追分－紅葉山－夕張間の鉄道が開通した。1906(明治39)年に鉄道が国有化されると、北炭が独占していた鉄道輸送の障壁が取り除かれ、財閥系資本が炭鉱開発に参入した。北炭は1913(大正2)年に三井財閥の傘下に入り、1916(大正5)年には三菱が大夕張炭鉱を買収して以降、夕張市では、北炭と三菱の大手二社が主体となって炭鉱の開発が進んだ。なお1930(昭和5)年には北炭の出資により夕張鉄道が開業し、野幌経由で小樽へ石炭を輸送するルートが確保された。

1931(昭和6)年の満州事変以降、国策として石炭の増産が図られるようになると¹、夕張市の石炭産業はさらなる拡大をみせ、終戦時の1945(昭和20)年には北海道全体に対する夕張の出炭量比率は25.2%となった。炭鉱が短期間のうちに発展したことによって、夕張市は、1943(昭和18)年に北海道9番目の市として市制施行(人口73,953人)した。

3-1-2 戦後期における石炭産業の消長と夕張市の歩み

戦後の夕張市は、日本最大級の炭鉱都市に成長した。戦後の夕張市が活況を呈する契機となったのは、政府が1947(昭和22)年より行った「傾斜生産方式」の実施である。石炭・鉄鋼・肥料の増産を重点的に志向し、資材や労務者用の生活物資を優先的に配分、炭鉱住宅建設の促進、復興金融公庫の優先融資などが行われた。この時期に夕張市では、北炭清水沢鉱や平和第二鉱をはじめ中小の炭鉱が相次いで開発された²。

最盛期の1958～1961(昭和33～36)年には17炭鉱が操業、最高出炭量は4,264,227トン(昭和41年)を記録し、中でも北炭夕張鉱は、1960年代に年産100万トンを突破、日本を代表する大炭鉱となった。人口も、1960(昭和35)年に107,972人に達した。

¹ 戦時体制により減少した労働力を充足するため、中国人・朝鮮人労働者が強制連行により過酷な労働に従事させられた。劣悪な待遇、人種差別、虐待などに抵抗すべく、夕張市内でも17回の抵抗闘争が行われた。

夕張市(1981)下巻 p531.

² 夕張市教育研究所(1988)p79.

一方で、石炭産業を取り巻く環境は急激に変化し、夕張市に深刻な影響を与えた。1950年代後半の「エネルギー革命」により、石油への転換が飛躍的に進み、石炭産業は厳しい合理化を迫られるようになった。1955(昭和30)年に制定された「石炭鉱業合理化臨時措置法」³(合理化法)は、石炭保護政策と同時に合理化を進める内容であり、能率が低い小炭鉱を整理し、高能率の大炭鉱へ生産を集約する「スクラップ・アンド・ビルド方式」の端緒となった。さらに、石炭特別調査団の答申により1963(昭和38)年から実施された「第1次石炭政策」では、限定的保護政策に転換された。1967(昭和42)年の第3次政策からは計画的撤退の方針が打ち出され、1969(昭和44)年の第4次策では、「再建交付金」や「特別交付金」制度が採用されたため、集中閉山が起こった。

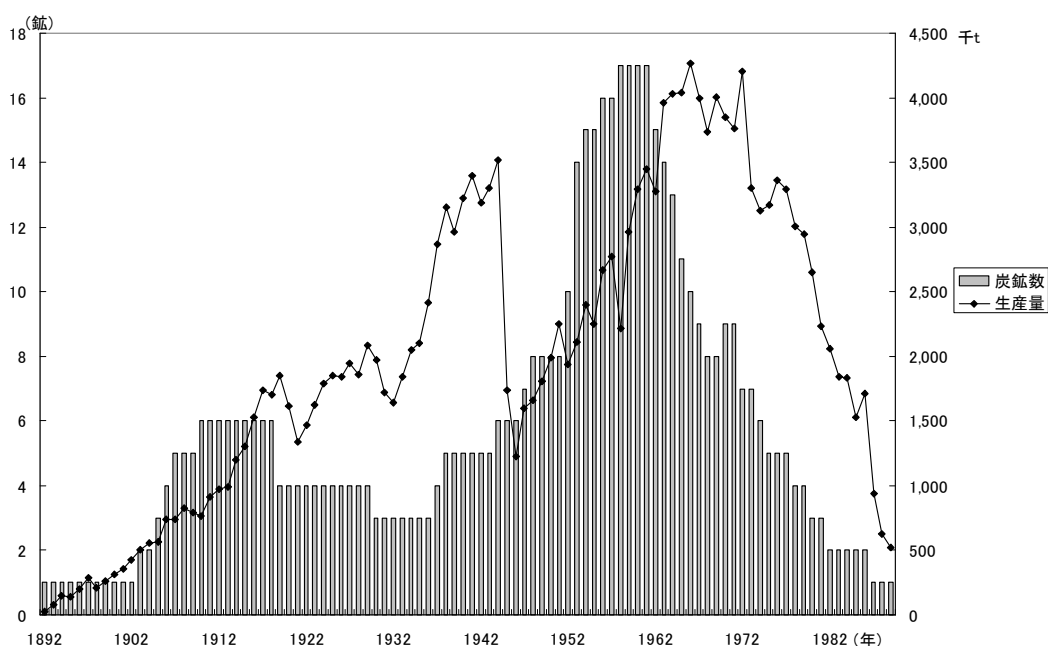


図3-1 夕張市における炭鉱数および生産量の推移

夕張市統計書から作成

³ 石炭鉱業合理化臨時措置法の概要は、1合理化基本政策の策定、2政府による合理化資金の確保、3石炭鉱業整備事業団の設立(非効率炭鉱の買い上げ整備)、4坑口開設の制限(非効率炭鉱の発生防止)、5標準炭価の制定(炭価引下げ指導)、6生産数量制限の勧告、7石炭鉱業審議会の設置である。

吉岡(1992)p8、夕張市(1981)下巻p111.



図3-2 夕張市の主要炭鉱の分布

夕張市史を元に筆者作成

表 3-1 石炭政策の推移と夕張市の関係

出所:資源エネルギー庁(2005)エネルギー白書に筆者が加筆して作成

政策名	基本方針	生産目標	出来事	夕張市主要炭鉱の開閉山
第1次策 —1963～1965	<ul style="list-style-type: none"> 石炭鉱業崩壊をもたらす経済・社会への影響を防止 エネルギー革命の遂行に対応して生産構造を再編 	5,500万トン確保	<ul style="list-style-type: none"> ◇炭鉱ストライキ頻発 ◇原油輸入自由化(1962) 	<ul style="list-style-type: none"> ●北炭夕張3鉱 ○新夕張鉱
第2次策 —1965～1967	<ul style="list-style-type: none"> エネルギーの高い輸入依存度は、国際収支上も供給の安定性という見地からも望ましくなく、重要なエネルギー資源たる石炭を確保 	5,500万トン維持		
第3次策 —1967～1969	<ul style="list-style-type: none"> 経営基盤回復対策とある程度の需要確保策を講ずれば、今後とも5,000万トン程度の出炭維持は可能 	5,000万トン確保	◇石炭対策特別会計創設(1967)	
第4次策 —1969～1973	<ul style="list-style-type: none"> 安定した出炭、供給体制構築 石炭企業は再編に努力する反面、維持・再建困難となる場合には進退を決すべき 	規模明示せず	<ul style="list-style-type: none"> ◇公害対策強化 ◇集中閉山 	<ul style="list-style-type: none"> ●北炭夕張1鉱・2鉱、新夕張鉱、三菱大夕張鉱 ○北炭夕張新2鉱、三菱南大夕張鉱
第5次策 —1973～1976	<ul style="list-style-type: none"> 石炭鉱業の急激な縮小は多大な社会的混乱を惹起するおそれがあることに鑑み、需要の引き上げ及び対策の拡充を行う 	2,000万トンを下らない規模	<ul style="list-style-type: none"> ◇第1次石油ショック(1973) ◇一般炭輸入開始(1974) 	<ul style="list-style-type: none"> ●北炭平和鉱 ○北炭夕張新鉱
第6次策 —1976～1982	<ul style="list-style-type: none"> エネルギーの安定供給の一環として石炭を可能な限り活用 国内炭の生産を維持し、海外炭の輸入を円滑に行う 	2,000万トン以上の生産規模維持	<ul style="list-style-type: none"> ◇第2次石油ショック(1978) ◇価格差縮小 	●北炭清水沢鉱、北炭夕張新鉱
第7次策 —1982～1986	<ul style="list-style-type: none"> 安全性と安全保障面の両面から貴重な国内炭を積極的に活用 国内炭生産量を維持し、石炭鉱業の自立達成を支援 	2,000万トン以上の生産水準達成	<ul style="list-style-type: none"> ◇プラザ合意(1985) ◇価格差拡大 	
第8次策 —1986～1991	<ul style="list-style-type: none"> 海外炭との競争条件改善は見込めず、国内炭の役割は変化、段階的縮小やむなし 集中閉山回避、経済・雇用への影響を緩和 	最終的に1,000万トン程度が適当	◇鉄鋼業界による引取協力終了(1990)	●北炭真谷地鉱、三菱南大夕張鉱
ポスト8次策 —1992～2001	<ul style="list-style-type: none"> 90年代を構造調整の最終段階と位置づけ、国民経済的な役割と負担の均衡点まで国内炭生産の段階的縮小を図る 	具体的水準を明記せず	◇三井三池閉山(1997)	

(注) ○開山 ●閉山

三菱・北炭両社は、希望退職募集など徹底的な人員整理や能率の低下した炭鉱のスクラップを行う一方、最新技術の導入による既存炭鉱のビルドアップなど、徹底的な合理化を図った。しかし北部の炭鉱での合理化が限界に達すると、技術革新により深部での採炭が可能になったことから、市中南部に新鉱を開発した。三菱は1973(昭和48)年に大夕張鉱を閉山、1970(昭和45)年に操業開始した南大夕張鉱に資源を集中させ、北炭も開基以来生産の主力であった夕張1鉱を閉山し、1975(昭和50)年に夕張新鉱を開鉱するなど、生産の主力は市中南部に移動した。

オイルショックにより、一時は国内炭の復権も期待されたが、石炭産業を取り巻く環境は好転せず、特に北炭では、1975(昭和50)年の北炭幌内鉱のガス爆発事故(死者24名)を契機に経営危機

に陥った。夕張では、平和鉱(1975年)・新二鉱(1977年)を閉山し、清水沢鉱と夕張新鉱が北炭夕張炭鉱株式会社として、真谷地鉱は北炭真谷地炭鉱株式会社として、それぞれ分離された。しかし、1981(昭和56)年に発生した夕張新鉱ガス爆発事故(死者93名、1982年閉山)により北炭夕張炭鉱(株)は破綻、真谷地鉱も1987(昭和62)年に閉山した。1985(昭和60)年に死者62名を出すガス爆発事故を起こした三菱南大夕張鉱も1990年に閉山し、1890年の開鉱からちょうど100年で夕張市の炭鉱は全て閉山した。

3-1-3 炭鉱閉山による地域への影響

炭鉱の閉山は、炭鉱以外の地域経済基盤が極度に脆弱な地域社会に、人口流出や地域活力の低下などの深刻な打撃を与え、「集落崩壊」と言える状況が随所で起こった。代表的な例として大夕張鉱があった鹿島地区は、昭和20年代には人口2万人を有していたが、閉山前後の1年間で約6割も人口が減少した⁴。

このような産炭地域の保護政策として、「産炭地域振興臨時措置法」(産炭法、1961年)により、企業誘致など産炭地振興策への財政上の特例措置が取られたが、根本的な解決には至らず、都市の衰退は加速度的に進んでいった。

また炭鉱閉山に伴う地元自治体への影響は、法人市民税や所得税、鉱山税など税収の減少だけに留まらなかった。炭鉱会社は無人地帯に炭鉱を開発したという経緯上、電気・上下水道をはじめとするインフラや炭鉱住宅・浴場など従業員の生活に欠かせない設備、映画館や体育館・病院など福利厚生に関わるものまで、全てを自社で整備していた。従って炭鉱が閉山すると、炭鉱会社が整備したインフラを取得・維持する必要が生じ、莫大な負担を強いられた。夕張市では、北炭から土地、水道施設、炭鉱病院などを市が買い取り、これらの取得費と維持管理費は、以後の市の財政を圧迫することになった⁵。

三菱は、南大夕張鉱の閉山時に、夕張市に「地域振興資金」として10億円の寄付をしたものの、その後の地域振興に一切の関与はなかった。

⁴ 鹿島地区の昭和47年12月の人口11041人、昭和48年12月の人口4504人。その後シューパロダムの建設に伴い住民が1998年までに完全に移転し、現在は無人である。

⁵ 夕張市が示した「閉山後処理対策」によると、1979年度から1994年度までに投じた583億5千万円のうち、150億円弱を住宅や水道設備などに投じた。
読売新聞北海道支社夕張支局編(2008)p130。

3-2 閉山後から現在に至る観光を中心とした経緯

3-2-1 観光主体のまちへの転換

1977(昭和52)年、日本有数の炭鉱都市として発展した夕張市の主力炭鉱であった夕張鉱など、⁶ 隧北地区の炭鉱が全て閉山した。この前後から、当時夕張市助役の中田鉄治氏を中心として、炭鉱跡地を転用した大型の観光開発が進められた。中田氏は1979(昭和54)年、無投票で市長に当選すると、2003年までの6期24年(同年死去)の間「炭鉱から観光へ」というキャッチフレーズの下、観光施設への大規模な投資を推進した。中田氏は早い段階から石炭を有限産業ととらえ、ポスト石炭の産業を創出する必要性を訴えていたが、廃屋となった炭住が至る所にあるような状況は、企業誘致に不利に働くとして、石炭や炭鉱のまちという「暗いイメージを一掃」し、観光への転換を強力に推し進めた⁷。

「石炭の歴史村」は、中田氏が構想した大規模観光施設である。北炭新二鉱跡(11.7ha)にある石炭の大露頭や模擬坑を活かし、「石炭博物館」や「SL館」など石炭関係の展示施設や家族向けの遊園地を、当初予算55億円かけて設置するものであった。中田氏が市長に就任した翌年の1980(昭和55)年に「石炭博物館」がオープンし、以降「炭鉱の生活館」「知られざる世界の動物館」などの展示施設や大規模遊園地が開発された。1983(昭和58)年の全面オープン以降も、「ロボット大科学館」など施設の拡充は進み、最終的な投資額120億円に上った⁸。

また、石炭の歴史村以外でも、廃校を改築した宿泊施設や夕張の特産品として成長したメロンを利用した加工施設の「めろん城」などが次々にオープンした。

バブル期に入ると、リゾート開発の波に乗って民間企業も参入した。1988(昭和63)年には松下興産株式会社が「マウントレースイスキー場」を買収、リゾートホテルを建設し、1992年には市の第3セクター・株式会社石炭の歴史村観光所有の「ホテルシューパロ」を買収した。

1990年からは「ふるさと創生資金」により、「ゆうばり国際ファンタスティック映画祭」を開始した。これは夕張市が「幸せの黄色いハンカチ」などの映画ロケ地であったことや、映画が炭鉱の娯楽として親しまれたことだけでなく、中田氏自身が無類の映画好きであったことが関係している⁹。

この時期の観光客の入込数を見てみると、石炭の歴史村がオープンした1980(昭和55)年は55万人であったが、5年後の1989年には3倍以上の184万人まで急激に伸びている。最高は1991年と1993年の230万人で、レースイリゾートのホテルオープンや映画祭の開催などと時期が重なっている。

⁶ 市中部の平和と清水沢間にある JR 石勝線のトンネルにより、市内の集落が隔絶されていることから、トンネル以北を「隧北」、以南を「隧南」と呼んでおり、両者には微妙な意識の差異が存在する。

⁷ 青野(1987)pp72-73.

⁸ 橋本(2007)p79.

⁹ 財団法人北海道開発協会(2005)p22.

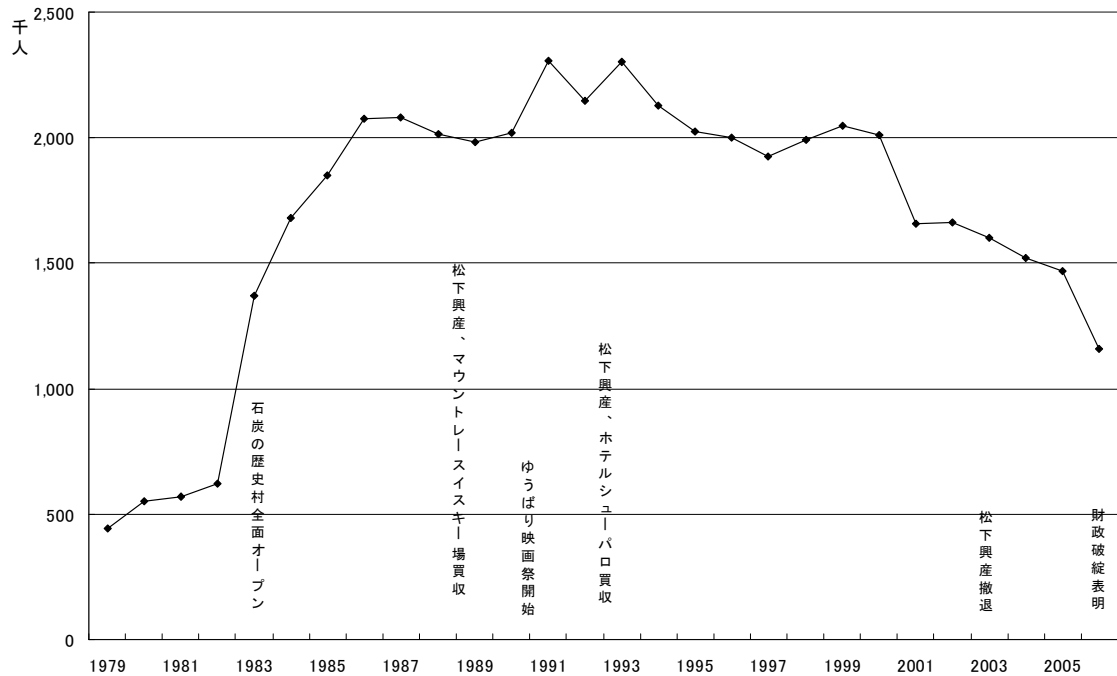


図 3-3 夕張市における観光入込客数の推移

夕張市統計書から作成

このように観光開発に巨額の資金を投入した夕張市の政策は、自治省の「活力あるまちづくり優良地方公共団体」表彰(1990年)など、疲弊した産炭地の再生モデルとされていた。

しかし、これらはほぼすべてが隧北地区の炭鉱跡地を利用して行われ、最後まで炭鉱が残っていた南部や清水沢、またメロンを中心とした農業地帯である沼ノ沢や紅葉山での観光開発は行われなかった。このことにより、夕張市民の中でも隧南地区の住民は「観光は隧北のもの」という一線を画した態度で加熱する観光開発を見つめることになり、地域間での温度差を生み出した。

3-2-2 財政破綻に至った経緯¹⁰

積極的投資を続けた夕張市の財政状況は、地方債の発行残高が1992年度末に219億63百万円に達するなど、深刻な状況にあった。2001年からは観光入込客数が常に200万人を下回るようになり、松下興産は2002年に夕張市から撤退した。しかし夕張市は危機的な財政状況にも関わらず、1992年に松下興産に売却したホテルシュューパロを1996年に再取得、2002年にはレースリゾートを取得するなど、さらなる財政負担を続けた。

また、夕張市の観光事業の運営形態にも問題があった。夕張市は、市の観光事業を委託してい

¹⁰ この項の内容は橋本(2007)ならびに読売新聞北海道支社夕張支局編(2008)を参考にした。

た第3セクター¹¹・株式会社石炭の歴史村観光ならびに夕張観光開発株式会社の詳細な財務状況を、民間会社であることを理由に公表しなかったが、実際は市の会計で赤字を補填していた¹²。3セクの経営と市の観光事業は事実上一体化していたにもかかわらず、チェック体制を働かせることができなかった。

夕張市が大規模な観光事業に投資することができたのは、産炭法による交付金など特殊な財源を頼りにしていたことによるところが大きい。40年の時限立法であった産炭法が2001年に失効し、政府からの交付金援助が5年間の激変緩和措置による公共事業への交付金のみとなった。さらに三位一体改革による地方交付金の減少により、歳入の減少が深刻になり、さらなる地方債の発行に頼らざるを得なくなった。

そこで夕張市をはじめとする空知産炭地域の市町村は、「ヤミ起債」により資金の調達を行った。これは空知産炭地域における炭鉱閉山後の地域振興を目的とする「空知産炭地域総合発展基金」の取り崩し不可な「基盤整備事業(旧基金)」¹³から、知事の許可を得ずに長期借り入れするというもので、この不正について基金を運用していた(社)北海道産炭地域振興センターだけではなく北海道も黙認していた。

また資金不足が決算数字に表れないような「不適切な財務処理」を長年続けていた。これは、決算期の異なる第三セクターとの間で、年度内に返済する義務のある一時借入金を、財政年度当初の出納整理期間を利用し「赤字隠し」を行うもので、その額は2005年度決算で約276億円にも上っていた。

このように財政状況を不正に隠蔽する状況が続いていたが、議会の追求や市民からの指摘も十分ではなく、債務膨張による金利負担や施設運営費の負担、産炭法の激変緩和措置終了に伴う資金繰りの限界などにより、2006年6月に後藤健二市長が財政破綻を表明した。2005年度決算ベースによる夕張市の債務は632億円に上っていた。2007年3月に財政再建団体となり、解消すべき赤字額を353億円、再建期間を18年とする財政再建計画が施行された。

3-2-3 財政破綻が及ぼした影響

夕張市はこの財政再建計画では、職員数の削減、組織の合理化、給与水準等の引き下げなど行政の徹底的なスリム化を図るだけでなく、市民生活に直接影響を及ぼす、以下のような事務事業の見直しも盛り込まれた。

- 市税、使用料の値上げ・新設(保育料、下水道、市営住宅等)
- 病院事業の見直しに伴い、夕張市立病院を診療所化(指定管理者夕張希望の杜による運

¹¹ 夕張市の財政破綻に伴い、(株)石炭の歴史村観光は2006年11月、夕張観光開発(株)は2007年4月に自己破産した。

¹² 読売新聞北海道支社夕張支局編(2008)p151.

¹³ 現在は旧基金の取り崩しが認められている。

営)

- 小学校、中学校を各1校に統合
- 公共施設の閉鎖

市職員の大幅な人員整理や、自己破産した第3セクターからの離職者発生、また負担を強いられる市民にも将来への不安が広がったことにより、人口の転出が加速した¹⁴。

破綻の主たる要因となった観光施設については、廃止もしくは指定管理者に運営委託され、その多くは加森観光株式会社が受託し、同社100%出資の夕張リゾート株式会社により運営されることになった。石炭の歴史村アドベンチャーワールド(遊園地)は存続が困難と判断され、廃止・解体された。また、破綻に伴う補助金打ち切りにより、2007年の映画祭は中止されたが、映画関係者ら有志により「ゆうばり応援映画祭」という形で開催され、2008年からはNPO法人ゆうばりファンタの運営により復活した。

夕張市の財政破綻問題は、国民に広く衝撃的に受け止められ、夕張市への注目は急激に上昇した。道内大手家具メーカーの株式会社ニトリを中心とした桜の植樹プロジェクトのみならず、夕張を「支援」しようとする動きは現在も続き、「好意は嬉しいが、ここは地震の被災地ではない。みんな普通に暮らし、普通に食べている」という市民の複雑な感情も見受けられる¹⁵。

¹⁴ 1-4 を参照のこと。

¹⁵ 読売新聞北海道支社夕張支局編(2008)p107.なお、筆者の聞き取りでも同様の意見が得られた。

3-3 今後の夕張市に求められる方向性

3-3-1 「炭鉱から観光へ」という発想の検証

夕張市は、基幹産業である石炭産業以外に強固な産業基盤を持っておらず、地域としての生き残りをかけて観光に取り組んだ。大量の失業者問題や、バブル期直前という時代背景などを考慮すると、産業の空白を埋めるために夕張市がマス・ツーリズムに依拠した観光開発を推し進めたことは、当時の情勢であれば評価されてもやむなしであった¹⁶。また中田氏が発案した石炭の大露頭や模擬坑の活用、国内最大規模の石炭博物館の設置、さらに地場産業おこしの一種である「めろん城」などの事業は、現在の産業観光の先駆けとも言え、その点においては先見の明があったとも言える。これまで述べてきた観光の持つ効果や、夕張市が国内最大規模の炭鉱都市として発展してきた経緯などを考慮すると、夕張市が生き残る道を観光に見出したことは、しかるべき選択であったと言ってよい。

しかし、これまでの考察から、夕張市における観光の問題点を次のように指摘することができる。

一点目は、行政主体で観光事業運営に取り組んだことである。夕張市の観光事業には夕張市自体が直接関与していたため、事業破綻の負債は市や市民が直接被ることになった。民間企業による経営と異なる、行政が事業の主体となる危うさが露呈した形となった。

二点目は、事業運営の手法である。夕張市の観光開発は、石炭産業に代わるものと位置づけられていたため、莫大な予算が投じられた。既存の施設の充実を省みず次々と新しい施設を作り続け、財政危機状態であってもホテルを買収するなど、破綻に至るまで無謀な運営は方針転換することなく続けられた。

三点目は、ガバナンスの欠如である。中田氏は4期24年にわたって市長を務め、そのワンマン経営ぶりは北炭社長であった萩原吉太郎氏と共通するものであった¹⁷。さらに3セクの詳細な財務状況を公表しなかったことや、議会のチェック機能が働かなかったこと、炭鉱会社が生活の全てを保障していた頃から変わらない市民の「お上任せ」の気質などが、その要因として挙げられる。

四点目は、「石炭の歴史」を活用しなかったことである。炭鉱跡地を転用し、地域の出自と無縁で常に大人数の集客が必要となる大型レジャー施設の拡充に傾倒したため、産業観光の要素が充実することはなかった。新たな地域の基幹産業となった観光が、地域の多くの人々にとって生きがいを見出せるものではなかったことは、人口流出・地位活力低下の一因となったと言っても過言ではない。

これらのことから、「炭鉱から観光へ」という発想は、観光を指向した点は誤りではなかったものの、

¹⁶ 夕張市が「炭鉱から観光へ」を旗印に取り組んだまちづくりは、前述した自治省「活力あるまちづくり優良地方公共団体」だけでなく、経済同友会「美しい都市づくり賞」・(財)神戸都市問題研究所「宮崎賞」・国際都市活性化技術会議「特別栄誉賞」などを受賞し、深刻な財政状況が表面化するまでは、産業構造の転換に成功したモデルケースとして認知されていた。

¹⁷ 吉岡(2007)p5.

その運用方法が適切ではなかったと結論付けることができる。

3-3-2 財政破綻後における観光の現状

現状における夕張市の観光事業の主体は、夕張リゾート(株)のほか、市民が立ち上げた「NPO法人ゆうばり観光協会」、映画祭を運営する「NPO法人ゆうばりファンタ」などである。観光客入込数は財政破綻し観光施設が減少した2006年度にはピーク時の約半分、116万人となっている。

表 3-2 夕張市のホームページに掲載されている観光施設一覧

出典：夕張市ホームページ¹⁸

めろん城	夕張メロンドーム
ゆうばり文化スポーツセンター	虹ヶ丘パークゴルフ場
ゆうばりテニスコート	紅葉山パークゴルフ場
北海道東海大学バイオ試験農園	北海道物産センター
夕張市平和運動公園・野球場	夕張市農協銘産センター
夕張市平和運動公園野球場	四国88ヶ所地蔵
シューパロ湖(大夕張ダム)	滝の上発電所
夕張岳	滝の上自然公園
水芭蕉の群生地(鹿島)	

注：加森観光(株)委託施設を除く

¹⁸ 夕張市ホームページ「観光施設のご案内」(最終検索 2009 年 1 月 29 日)

表 3-3 加森観光(株)が受託した観光施設の一覧

筆者作成

施設名	備考
石炭博物館	
SL館	2008年管理返上
炭鉱生活館	
化石のいろいろ展示館	
知られざる世界の動物館(世界のはくせい館)	2008年管理返上
ロボット大科学館	解体
水上レストラン「望郷」	
園内飲食及び売店(味のハイロード)	
郷愁の丘ミュージアム「生活歴史館」	
郷愁の丘ミュージアム「シネマのバラード」	
「北の零年」希望の杜	2008年NPOゆうばり観光協会へ
旧北炭鹿の谷倶楽部(夕張鹿鳴館)	2008年管理返上
幸福の黄色いハンカチ広場	
マウントレースイスキー場	
ホテルマウントレースイ	
ホテルシューパロ	
サイクリングターミナル「黄色いリボン」	2008年管理返上
郷愁の丘ミュージアム「センターハウス」	
丁未風致公園レストハウス「風美丁」	2008年管理返上
夕張市美術館	
宿泊施設ひまわり	
オートキャンプ場	

加森観光(株)は、夕張市が運営委託案を募集した29の観光施設のうち、19施設を一括受託運営した。石炭博物館や化石科学館、旧北炭鹿ノ谷倶楽部(夕張鹿鳴館)、幸せの黄色いハンカチ思い出広場など歴史村以外の観光施設との周遊バスを設置、一括入場券「ぐるっとパス」により入場料を徴収するなど収益率の向上を狙った¹⁹。また、ホテルシューパロ・レースイなど宿泊施設には、修学旅行や台湾・韓国など外国人観光客の誘致を積極的に行っている。観光商品としては夕張市が破綻にいたった経緯を、実際の施設などを見学しながら解説する「夕張ドキュメンタリーツアー(負の遺産ツアー)」が国内外の自治体関係者や研究者から高い注目を浴びた。このような民間企業ならではの新たなアイデアによる集客や徹底した経費削減により、収支改善などの効果が表れ、一年目は黒字を出す結果となった。

このように夕張市の観光は、行政による運営から民間企業や市民団体による運営に転換された。しかし、施設型のマス・ツーリズムに依拠した観光が中心であること、隧北地区での観光が中心であること、外部資本からの支援に頼っている状況であることなど、財政破綻前の観光と本質的に変

¹⁹ しかし観光客からは不評で、2007年7月より石炭の歴史村から離れた「幸せの黄色いハンカチ思い出広場」など石炭の歴史村から離れた施設には単館料金を設定した。

化がないことが懸念される。

特に、外部資本に頼ることへの弊害が既に出現し始めている。夕張リゾート(株)は2008年10月までに「旧北炭鹿ノ谷倶楽部(夕張鹿鳴館)」をはじめとする数施設の管理を、施設の老朽化などを理由に返上した²⁰。そのほか「ユーパロの湯」を運営していた株式会社シルバーリボン(本社・札幌)、JR夕張駅待合室を管理していたNPO法人ゆうぱり観光協会なども返上を行っている。この管理返上問題では、民間、特に外部資本による事業運営の危うさが浮き彫りとなった。

3-3-3 新しい観光への転換

以上のことを踏まえると、今後の夕張市は、住民自らが主体となり取り組むことができる持続可能性を念頭に置くべきであると考ええる。

鷺田(2007)は、石炭博物館の価値には一定の評価をしつつも、石炭や炭鉱の歴史そのものを資源とする観光に対し、「大量の客を常時呼び込むことができる資源ではない。何度も再訪したいと思える資源ではない」²¹として否定した上で、夕張市の基本産業をメロン生産業にすることを提唱している。日本を代表するブランドである夕張メロンを中心とした農業が、今後の夕張市において重視されなければならない点については衆目の一致するところであるが、鷺田の主張は、マス・ツーリズムから新しい観光への転換など観光学からの議論を一切経ていないことに留意せねばならない。

また、新たな産業の誘致に地域活性化の起爆剤としての効果を期待する主張もみられるが、企業進出などの動きは鈍く、早期の実現性に乏しい。

従って、現在の中心産業である観光を見直し、継続することが最善の策と考える。しかし、これまでの観光の反省点を踏まえた上で、新たな方策を見出す必要がある。それは、地域資源を活用した新しい観光であり、本論文においてこれまでに得られた知見から、以下の点に配慮して取り組むべきである。

一点目は規模の問題である。これまでの反省を踏まえ、大規模なマス・ツーリズムを指向せず、財政規模、人口規模、将来の見通しに合った適正な規模の観光を行うべきである。

二点目は地域資源の活用である。それは炭鉱遺産や自然、農業²²などに可能性が見出される。

三点目は住民主体の観光へ転換である。外部の観光事業者や大型の開発に依拠せず、自らが主体となった観光をおこなうべきである。

新しい観光で活用される最も有望な地域資源は、夕張市の出自に由来する炭鉱遺産であると考

²⁰ 通常、指定管理の協定書には、委託料や修繕費を行政が負担することや、契約不履行の際の賠償責任が明記されるが、多くの施設の一括管理を申し出た夕張リゾート(株)と夕張市の協定では市の負担が一切ない代わりに、事実上自由に施設を返還できることになっているためである。

『夕張リゾート』管理を返上」読売新聞 2008年11月3日付朝刊

²¹ 鷺田(2007)p128.

²² 夕張市の農業においてグリーンツーリズムなどが導入されている例は、現在のところ見られない。

える。これまで炭鉱遺産は、負の遺産としてむしろ積極的に除去されてきたが、財政破綻により、行政主体では除去を進めることも、保存することもままならなくなった。これを住民主体で炭鉱遺産の活用に取り組む機会の到来と捉えるべきである。

したがって次節では、それをめぐる背景や動向を検証する。

3-4 炭鉱遺産に対する評価

3-4-1 産業遺産を活用する機運の高まり

2-4-2で取り上げた「産業観光」では、過去の産業遺産も対象となると述べた。今日多くの地域で産業遺産を活かした観光が取り組まれている理由は、望月(2002)によれば、「産業遺産には重要な意味や歴史が刻印されており、地域の遺伝子として機能は終焉しても大切な役割に終わりはしない」²³であると考えられる。この観光を享受する観光者の側からは、学習を通じて知的好奇心を満たすSITの一形態として極めて高い関心が注がれており、産業遺産に含まれる炭鉱遺産を取り巻く状況は、かつて「ゴミ」「負の遺産」と呼ばれた時代からは格段に好転している。

西欧諸国では、産業遺産を保存・活用する事例が多数ある。産業革命の発祥地とされるイギリスのアイアンブリッジ峡谷では、行政と民間の協働により、地域に点在する産業遺産の保存や教育を行っている²⁴。また石炭や鉄鋼などの重化学工業で栄えたドイツのルール地方では、地域再生のための「IBAエムシャーパーク計画」により、操業を停止した製鉄所の施設をそのまま利用した景観公園などが整備され、市民が自由に活用している²⁵。

一方、日本における炭鉱遺産を含む産業遺産を保護する法的環境の整備は、1990年代から進められた。1993年には「近代化遺産」が重要文化財の種別として新設され、例えば鉄道施設など、産業遺産の特徴である面的な広がりを持つ生産システム全体の保護が可能になった。新井(2006)は、文化庁の定義や文献などをまとめ、近代化遺産を以下のように定義している。

「幕末、明治時代から戦前に至る日本資本主義の黎明期において、わが国の近代化、経済発展に貢献した各種の建造物や工作物を意味し、土木、交通、産業遺産の三種類がある。これには、施設に関する設備・機械・備品類などもふくまれ、従来の指定物件と違って単体としてではなく、システムとして保存するのが特徴になっている。」²⁶

また1996年には文化財保護法が改正され、「文化財登録制度」が導入された。この制度は、建設後50年以上を経過した建築物、土木構造物及びその他の工作物に対し、近代等の文化財建造物を後世に幅広く継承していくため、届出制と指導・助言等を基本とする緩やかな保護措置を講じるもので、従来の指定制度を補完するという位置づけである²⁷。指定文化財に比べると登録の基準は低いが、税制面の優遇や保存修理の際の補助金交付などは少ないという特徴を持ち²⁸、

²³ 観光まちづくり研究会編(2002)p54.

²⁴ 石川宏之・高見沢実・小林重敬(2007)pp.883-888.

²⁵ 「IBA エムシャーパーク計画」はルール地方が重工業産業の下で被ってきた環境や景観に対する障害を除去し、工業的な景観の中で生活する市民の「生態系的・都市的・社会的」な条件を改善することを目的とし、1989年から10年期限の有限会社を作り実施された。計画により整備された「産業文化の道」は、計画終了後も産業遺産の観光的活用を継続するために設置された事務局により運営され、EU圏にも「European Route of Industrial Heritage」として拡大しつつある。吉岡(2005)pp.70-78、羽田・丁野編(2007)pp.112-115.

²⁶ 新井直樹(2006)pp.201-218.

²⁷ 文化庁登録有形文化財(建造物)ホームページ(最終検索 2009年1月29日)

なお、2004年に建造物以外も対象となり、民俗文化財や美術工芸品なども対象となった。

²⁸ 伊東(2000)p22.

2008年12月現在7,250件が登録されている。

このように、産業遺産を取り巻く環境は整いつつある。2007年には、経済産業省が近代化産業遺産による地域活性化を目的に、日本の近代産業化に貢献した遺産群にストーリー性を持たせ、「近代化産業遺産群33」として取りまとめるなど、産業遺産を活用した取り組みが各地で展開されている。

産業遺産を活用したまちづくりや観光の例としては、幕末から明治にかけて薩摩藩に導入された近代式産業を題材にした、鹿児島県鹿児島市の「尚古集成館」、旧別子銅山のテーマパークと産業遺産を活かし、市民ボランティアガイドの手により市民の学習機会が創出されている愛媛県新居浜市、2007年に産業遺産として日本初の世界遺産登録された島根県大田市の石見银山などが代表的な例であり、産業遺産は地域の出自を活かした個性的なまちづくりを展開する手がかりとなりえると言える。

夕張市においても、旧北炭夕張炭鉱関連の7件が登録有形文化財²⁹となったほか、「近代化産業遺産群33」でも、「我が国の近代化を支えた北海道産炭地域の歩みを物語る近代化産業遺産群」として夕張炭田関連の遺産が4件選定されており³⁰、外部からの高い評価を得ていると言える。

表 3-4 夕張市の登録有形文化財ならびに近代化産業遺産

出所：文化庁国指定文化財データベース・経済産業省「地域活性化のための「近代化産業遺産群33」

登録有形文化財(7件)	旧北炭夕張炭鉱高松ズリ捨線スキップ隧道 旧北炭夕張炭鉱高松ズリ捨線ベルト隧道西坑門 旧北炭夕張炭鉱高松ズリ捨線拱橋 旧北炭夕張炭鉱専用鉄道高松跨線橋 旧北炭夕張炭鉱天龍坑資材斜坑坑口 旧北炭夕張炭鉱天龍坑人車斜坑坑口 旧北炭夕張炭鉱模擬坑道
近代化産業遺産(4件)	夕張炭田関連遺産 「三菱大夕張鉄道南大夕張駅跡」 「三菱大夕張鉄道南大夕張駅跡の保存車両(三菱大夕張鉄道車両(客車スハニ6・オハ1・ナハフ1・セキ1.2・キ1 他))」 「夕張鹿鳴館(旧北炭鹿の谷倶楽部)」 「北炭楓鉱発電所」

これらのことから夕張市において、炭鉱遺産を地域資源として活かした観光を推進していくこと

²⁹ 文化庁国指定文化財データベース(最終検索 2009年1月29日)

³⁰ 経済産業省「地域活性化のための「近代化産業遺産群33」の公表について」ホームページ(最終検索 2009年1月29日)

は、社会の要請という外的要素においては十分な意義があると言える。

3-4-2 空知支庁の産炭地域活性化施策

空知支庁では1998年、産炭地域の新しいまちづくりに向けた独自の地域政策推進事業として、「そらち・炭鉱の記憶発掘事業」をスタートして以降、産炭地域の活性化に関する事業を既に10年にわたって継続展開してきた。

表 3-5 空知支庁の産炭地域活性化事業

そらち・炭鉱の記憶推進委員会(2000)ならびに北海道空知支庁(2008)より作成

年度	事業名	概要
1998年度	そらち・炭鉱の記憶発掘事業	調査委員会による炭鉱の記憶の掘り起こし、データベース・ビジュアルマップ化
1999～2000年度	そらち・炭鉱の記憶推進事業	「そらち・炭鉱の記憶再生塾」など住民参加の地域づくり、「そらち・炭鉱の記憶コミュニティ・ミュージアム基本構想」の取りまとめ
2001～2003年度	そらち・炭鉱のまちからの挑戦事業	地域づくり団体の主体的・広域的な活動展開への支援、ファンクラブ設立による支援基盤の拡大
2004～2005年度	空知産業遺産活用自立化促進事業	「炭鉱遺産」を含めた産業遺産の活用による地域づくりを自律的・継続的な住民活動とするため、「自立化促進検討会」「産業遺産活用地域連携実践事業」などの取り組み
2006年度 夕張市財政破綻		
2007～2008年度	元気そらち！産炭地域活性化促進事業	民間主導による地域の自立化の促進に向け、炭鉱遺産の多角的な活用方策や地域資源を活かした広域景観づくりなどの検討

このように空知支庁の事業は、「炭鉱の記憶」を地域の遺産として評価し、これを手がかりとして地域住民が主体となった活動を促進する点に、重点が置かれていると言える。

この10年間の取り組みの間に、2001年に「空知の炭鉱関連施設と生活文化」が北海道遺産に認定された。また、札幌の旅行会社が炭鉱遺産を対象としたバスツアーを商品化したり、2003年に赤平市において「国際鉱山歴史会議」が開催されるなど、空知地域全体に対する炭鉱遺産への着目度は確実に上昇してきた。また2005年には旧空知産炭地域各地の市民団体と札幌圏の学識・有識者で構成される市民団体の連合組織による「炭鉱遺産サミット」³¹が夕張市で開催され

³¹ 旧空知産炭地域の首長8名と、国内外の専門家が参加し、約250名の地域内外の市民が傍聴した会議では、

るなど、市民が主体となり炭鉱遺産を活用した活動に取り組む機運が醸成されつつある。

現行の活性化事業である「元気そらち！産炭地域活性化促進事業」(以降「そらち事業」)においては、空知産炭地域再生の戦略を構想している。内容としては、①まち力・市民力、②創造都市、③地域マネジメントの3つを基底にして、地域内外の循環を生み出すことを、基本的な視点としている。

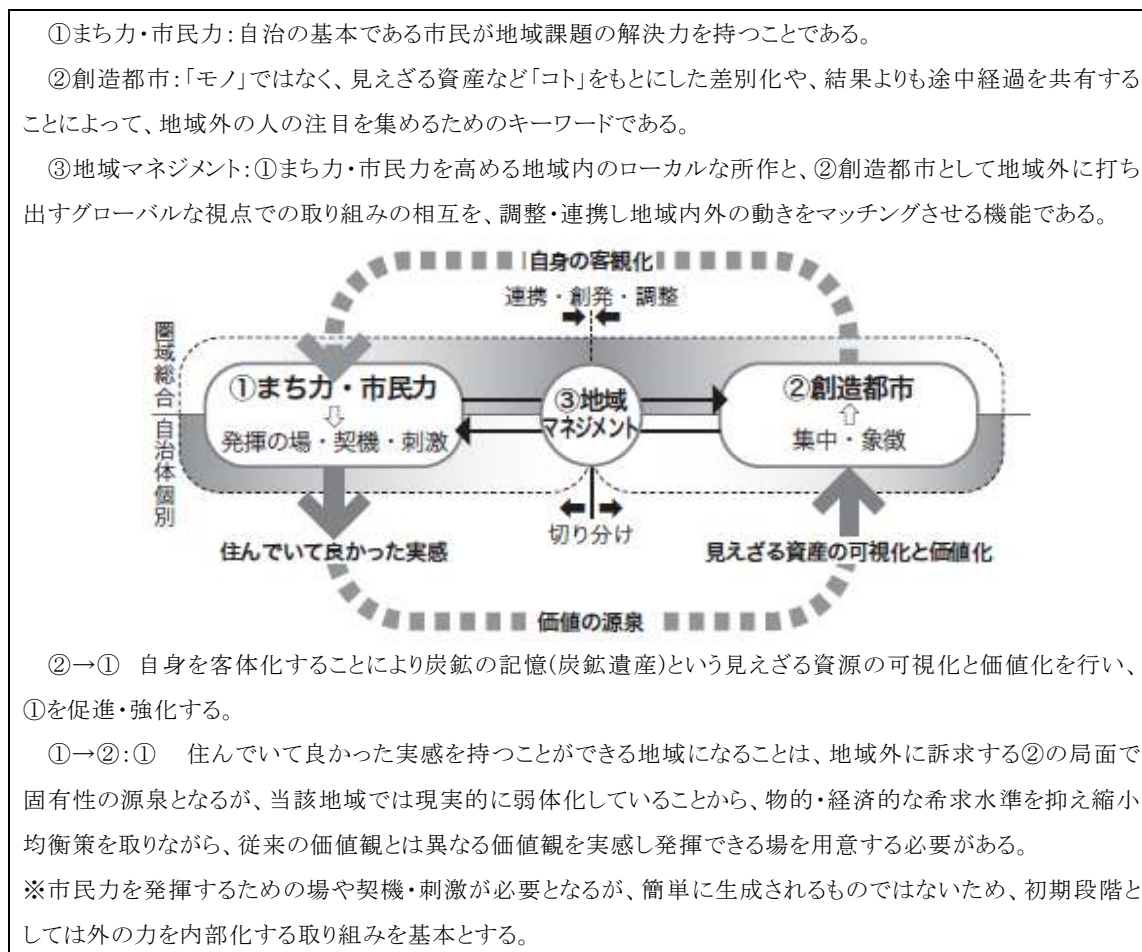


図 3-4 そらち事業戦略構想の概要

出所:吉岡(2008)³²

特徴的であるのは、現実的に地域基盤が弱体化しているという地域の状況を鑑み、外部からの作用を戦略内に組み込んでいることである。外部の人が空知産炭地域に関心を持つ動機のキー

各主体相互での認識の食い違いや足並みが揃わないという課題を解決するため、炭鉱遺産を手がかりにした地域再生に対して「ネットワーク」「選択と集中」によって「ともに事に当たる」ことを合意した。

北海道空知支庁(2008)ならびに吉岡(2008)p6 による。

³² 吉岡(2008)p7.

ワードを「知的好奇心」とし、訪問する人の量より質を獲得するための「場」と「仕組み」をいかに設定するかについて、アクションリサーチを重ねながら討議されている。当構想において夕張市(志幌加別川上流部、清水沢・南部)は、地域外に対し訴求力を持ち、かつ地域内では象徴や場となるための拠点として位置づけられている。

このように炭鉱遺産は、遺産そのものの文化的価値の評価だけでなく、地域資源としての利用価値についても認識されるようになった。空知産炭地域全体においても、地域活性化の核とする取り組みが進行中であり、そのなかでも夕張市は中心拠点の一つとして捉えられている。

3-5 炭鉱遺産を活用した住民主体による観光の実現可能性

3-5-1 炭鉱遺産の残存状況

本節においては、夕張市における炭鉱遺産を活用した観光の実現可能性に対する、現状の把握を行う。

まず本項では、夕張市に残存する炭鉱遺産の現況を把握する。空知支庁では、1998年に「そらち・炭鉱の記憶発掘事業」の一環として、炭鉱遺産の現状調査を行い、報告書「そらち・炭鉱の記憶一覧」(2000.3)にまとめている³³。これをもとに、2008年時点の現況を調査し³⁴、比較したのが表3-6である。

夕張市内の炭鉱遺産は、2000年の報告書では49の遺産が報告されているが、このうち既に撤去されているものを除くと43件が現存していた。2008年になると、現存する遺産は32件であり、8年間で約25%減少した。

地域を象徴する遺産であっても、解体作業を行うことを条件に、1998年から民間企業に貸与されている北炭清水沢発電所や、指定管理者が市に管理を返上した北炭鹿の谷倶楽部など、今後の存続が極めて厳しい状況のものが複数ある。夕張市内では、炭鉱の象徴的存在である立坑が既に完全撤去されていることに表れるように、地域の出自を反映した遺産を保存しようとする事に対して、市民の意識が極めて低いと言える。

³³ 報告書では、既に撤去されていても、写真・設計図などにより記録として内容が確認できるものも遺産として扱っている。なおこれらの遺産は、学識経験者らが選定したものであるが、良好な保存状態と言える炭鉱住宅街が選定されていなかったり、林業遺産2件が含まれている(本論文では削除)など、その基準を吟味する必要がある。しかし、空知の炭鉱遺産に関して公的に整備されている唯一のリストであり、このリスト中の残存状況を把握することにより、一定の傾向が把握できるとした。

³⁴ 筆者が関係者への聞き取りや現地調査などで把握した。

表 3-6 夕張市における炭鉱遺産の残存状況

『そらち・炭鉱の記憶一覧』ならびに筆者調査により作成

	炭鉱遺産名	地区	2000	2008
1	北炭夕張炭鉱千歳坑口	錦	○	○
2	北炭夕張炭鉱北上坑口	小松	○	○
3	高松地区炭鉱浴場	高松	×	×
4	高松地区炭鉱浴場太陽灯浴室	高松	○	×
5	高松北炭夕張炭鉱専用鉄道跨線橋	社光	○	○
6	高松地区夕張炭鉱ズリ山・ズリ捨線	高松	○	○
7	夕張炭鉱住宅街(高松地区)	高松	△	×
8	夕張市石炭博物館	高松	○	○
9	採炭救国坑夫像(進発の像)	高松	○	○
10	石炭大露頭「夕張二十四尺層」	高松	○	○
11	史跡夕張炭	高松	○	○
12	夕張工業学校校舎(復元)	高松	×	×
13	北炭夕張炭鉱天龍坑口	高松	○	○
14	夕張炭鉱住宅街(福住地区)	福住	○	×
15	福住人車跡	福住	○	○
16	夕張炭鉱住宅街(社光地区)	社光	△	×
17	社光地区夕張炭鉱ズリ山	社光	○	○
18	北炭夕張炭鉱病院	社光	○	○
19	夕張炭鉱総合ボイラー煙突	社光	○	○
20	住初地区夕張炭鉱社員(職員)住宅	住初	○	×
21	本町地区商店街	本町	○	○
22	銭湯「桜湯」	本町	○	×
23	新夕張炭鉱松島坑口	末広	○	○
24	新夕張炭鉱橋立坑口	末広	○	○
25	末広地区墓地石碑群	末広	○	○
26	北炭鹿の谷倶楽部(現・夕張鹿鳴館)	鹿の谷	○	○
27	北炭北海道支店石炭分析室	鹿の谷山手町	○	○
28	日本聖公会夕張教会堂	鹿の谷	○	○
29	北炭化成工業所コークス炉煙突	日吉	○	○
30	北炭未選びん	平和	×	×
31	北炭平和炭坑口	平和	○	○
32	北炭平和炭総合繰込所	平和	×	×
33	北炭清水沢炭鉱ズリ山	清水沢	○	○
34	北炭清水沢火力発電所	清水沢清栄町	△	△
35	北炭清水沢炭鉱繰込所	清水沢清栄町	○	○
36	三菱大夕張炭鉱地区(鹿島地区)	鹿島	×	×
37	三菱大夕張炭鉱ズリ山	鹿島	○	○
38	三菱大夕張炭鉱事務所	鹿島	△	×
39	三菱大夕張鉄道明石駅舎	鹿島	△	×
40	三菱大夕張鉄道大夕張炭山駅舎	鹿島	×	×
41	三菱大夕張鉄道・車輛	南部	○	○
42	三菱大夕張鉄道橋梁旭沢橋梁(5号鉄道)	鹿島	△	△
43	北炭真谷地炭鉱事務所	真谷地	○	×
44	北炭真谷地炭鉱資材倉庫	真谷地	○	×
45	北炭真谷地炭鉱貨車積ポケット	真谷地	○	×
46	北炭真谷地炭鉱専用繰込鉄道路	真谷地	○	○
47	北炭楓炭ズリ山	楓	○	○
48	北炭楓炭発電所	楓	○	○
49	北炭滝之上水力発電所	滝ノ上	○	○
	合計	現存	43	32
		(うち撤去・水没予定)	6	2
		撤去済み	6	17
		合計	49	49

現存 ○
 撤去・水没予定 △
 撤去済み □

3-5-2 市民団体の活動状況

2008年現在、夕張市を拠点として活動するNPO法人は3法人ある。いずれも財政破綻が表明された後の2007年に設立したもので、財政破綻に伴い原則廃止となった観光事業の存続に危機感を募らせた市民らが、自分たちの手で事業を継続することを目的として設立したという共通の背景がある。

表 3-7 夕張市内の NPO 法人

出所:内閣府 NPO ホームページ「NPO ポータルサイト」³⁵

団体名称	ゆうばりファンタ	ゆうばり観光協会	炭鉱の記憶推進事業団
法人認証年月日	2007年2月22日	2007年3月02日	2007年5月28日
主たる事務所	夕張市本町4丁目	夕張市本町4丁目	夕張市本町2丁目
目的	一般市民に対して、国内外の映画・映像に関する文化・芸術の取り組みについて映画祭を通じて広く内外に紹介するとともに、地域固有の資源を活用した映像制作支援等を行い、さらにこれをもとにしたまちづくりへの市民自らの参加を促進し、もって文化・芸術の振興・普及及び地域の活性化等を図ることにより、公益の増進に寄与。	夕張市内にある映画ロケセットや炭鉱遺産等を保存し、それらを活用したイベントの開催や観光客等を対象にした現地ガイド派遣等の事業を行うとともに、文化、スポーツイベントの開催支援事業、高齢者及び障がいをもつ観光客を対象とした移送介護とガイドヘルパー派遣等の福祉事業、新たな地場産業の発掘及び育成、市民の知識、技術を活かした雇用の場の確保などを行うことにより、地域経済の活性化及びまちづくりの推進に寄与。	空知旧産炭地域の人々や当該地域を訪れる人々に対して、有形・無形の炭鉱遺産を将来にわたって継承し公開することによって、歴史的文脈の意義および価値の認識に基づいた地域の活性化に寄与。
活動分野	3 まちづくりの推進を図る活動 4 学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動 9 国際協力の活動 17 前各号の掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助の活動	1 保健、医療又は福祉の増進を図る活動 3 まちづくりの推進を図る活動 4 学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動 5 環境の保全を図る活動 17 前各号の掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助の活動	3 まちづくりの推進を図る活動 4 学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動 17 前各号の掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助の活動

注・活動分野一覧:

1 保健、医療又は福祉の増進を図る活動、2 社会教育の推進を図る活動、3 まちづくりの推進を図る活動、4 学術、文化、芸術又はスポーツの振興を図る活動、5 環境の保全を図る活動、6 災害救助活動、7 地域安全活動、8 人権の擁護又は平和の推進を図る活動、9 国際協力の活動、10 男女共同参画社会の形成の促進を図る活動、11 子どもの健全育成を図る活動、12 情報化社会の発展を図る活動、13 科学技術の振興を図る活動、14 経済活動の活性化を図る活動、15 職業能力の開発又は雇用機会の拡充を支援する活動、16 消費者の保護を図る活動、17 前各号の掲げる活動を行う団体の運営又は活動に関する連絡、助言又は援助の活動

これらNPO以外の市民団体でも、財政破綻を機に発生し活動が活発化しているものもある。炭鉱時代からの依存体質から脱却し、市民が主体となってまちの活性化に取り組もうとする動きは、

緒についたばかりと言える。

炭鉱遺産関連の市民団体については、空知支庁の調査事業を機に発足し、鹿島・南部地区で活動してきた「シューパロ塾」があるが、現在目立った活動は行っていない。また、映像による炭鉱の記憶の継承を目的とした「ゆうばり三番方倶楽部」という組織もあるが、活動は1年に1回程度、上映会を行うのみで、活動の広がりは見られない。

南部地区では、南大夕張駅跡に残された、旧大夕張鉄道の客車など6両の車両を保存する活動を主とする「三菱大夕張鉄道保存会」があり、現在も車両の補修作業を中心に活動を行っている。そのほかの市民団体には炭鉱遺産関連の目立った活動が見られず、炭鉱遺産を観光やまちづくりに活用しようとする活動を行っているのは、NPO法人格を取得した炭鉱の記憶推進事業団以外には乏しい。

炭鉱の記憶推進事業団は、石炭博物館の指定管理者への応募を目的として、緊急に設立した団体を元に発展させたNPO法人である³⁶。空知産炭地域での市民団体の横断的な連携を基盤にしており、炭鉱遺産の活用による、歴史的な文脈の意義および価値の認識に基づく地域の活性化を目的としている。

しかし、炭鉱の記憶推進事業団は夕張市に本部を置いているとはいえ、空知全域の市民団体の統括を中心に活動しており、次章以降の催事を実施するまで夕張市内での活動は起こっておらず、またコアメンバーに専門家以外の夕張市民はいない。従って夕張市内において、市民主体による地域の炭鉱遺産を活用する目的での活動は、現状では未成熟であると言える。

3-5-3 エコミュージアムの導入に際する課題の検討

本章では、夕張市におけるエコミュージアムによる観光まちづくりの導入妥当性の検討を背景に、歴史的経緯と求められる観光についての考察を行ってきた。

その結果、従来の反省と今後のあるべき姿は図3-5のようにまとめられる。

³⁵ 内閣府 NPO ホームページ「NPO ポータルサイト」(最終検索 2009 年 1 月 29 日)

³⁶ 石炭博物館の指定管理者には加森観光(株)が決定したため、活動内容を市民活動の連携を強く意識したものへと再構築し、NPO 法人格を取得した。NPO の母体となったのは、2005 年に開催された「炭鉱遺産サミット」の主体となった、旧空知産炭地域各地の市民団体と札幌圏の学識・有識者で構成される市民団体の連合組織、「産業遺産を活かす地域活性化実行委員会」であり、これを構成するそれぞれの市民団体は、1998 年からの空知支庁の事業を起源としている団体が多い。

NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団ホームページ(最終検索 2009 年 1 月 29 日)

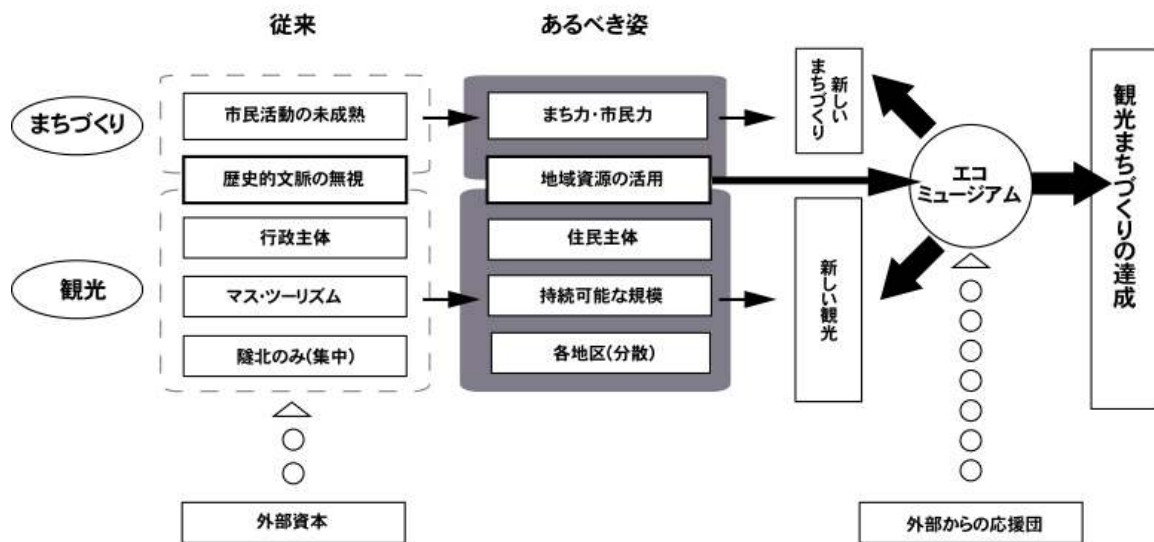


図3-5 今後の夕張市のまちづくりに求められる方向性

筆者作成

夕張市のまちづくりと観光は、従来はその両面において歴史的な文脈を無視してきた。この反省に立ち、今後は地域資源を活用したまちづくり・観光を行うべきである。それには、エコミュージアムの概念を導入することが最も有用である。それにより、まちづくりと観光に適切な展開をみることができ、観光まちづくりという目標を達成することができると思う。

しかし炭鉱遺産は、外部から高い評価を受けているにもかかわらず、地域住民の間に炭鉱遺産の保存や維持に対する意識が浸透しておらず、活動は未成熟な状態であるという課題が認識された。このような状況においては、今後のエコミュージアム構想に必要な住民主体の姿勢の醸成はおろか、地域資源すら地域住民の意識の中に埋没したままとなり、活用が不能になる。

以上のことから筆者は、地域住民が炭鉱遺産を地域資源と認識するための可能性を、小単位の地域で検証することが必要と考えた。その方法は、高齢化や資源の老朽化が進み、炭鉱遺産を活用した観光の実現のために一刻の猶予も残されていない現状においては、そらち事業の構想にもあるように、炭鉱遺産という地域資源に着目している外部の人々の力を導入することで、地域住民に気づきの契機を作るという方法が適当なのではないかと考えた。

そこで本論文では、夕張市中部の清水沢地区をエコミュージアムによる観光まちづくりのモデル地域として設定し、地域住民が炭鉱遺産を地域資源と認識するために必要な検討と、エコミュージアム構想に資する知見の収集にあたった。

清水沢地区²は、夕張川と志幌加別川の合流点となる夕張市の中部に位置している。清水沢という地名は、夕張川と志幌加別川の合流地点付近一帯であり、「附近に清水の湧き出ずる沢ありたる」ことが由来である³。

1897(明治30)年の清水沢駅開設以降、農地の開発が進み、1906(明治39)年の大夕張鉱の開鉱にともなう1911(明治44)年の大夕張鉄道開通などにより商業を中心に急速に発達、夕張本町方面と大夕張方面との鉄道・道路の分岐点にあたることから、物資や人の集散地となった。

北炭は各地の系列炭鉱へ供給する電力確保のために、1926(大正15)年に清水沢電力所(火力発電所)、1940(昭和15)年には水力発電を行う清水沢ダムを設置した。1924(大正13)年竣工の滝の上水力発電所とともに、夕張市内の炭鉱はもとより、幌内鉱や空知鉱まで送電を行う、北炭の重要拠点となった。

1944(昭和 19)年に北炭遠幌鉱が開鉱し、また、戦後の傾斜生産方式による石炭の増産に対応して、1947(昭和 22)年に北炭清水沢鉱⁴が開鉱したことにより、炭鉱関連機能が集積した。

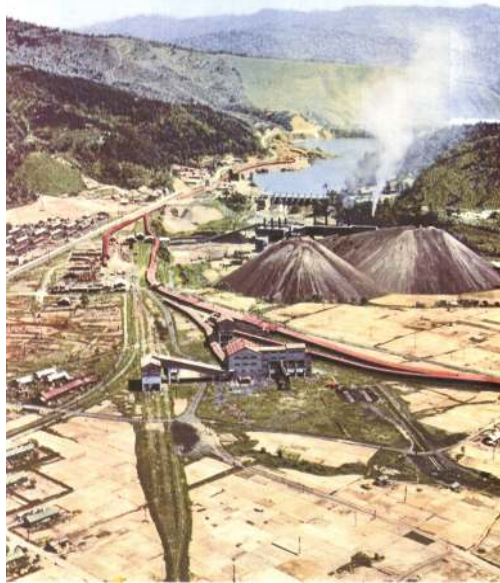


図4-2 1950年代の清水沢鉱

出所:北海道炭礦汽船(1958)⁵

¹ 国土地理院「電子国土」ポータル(最終検索 2009年1月29日)

² 行政区分上では清水沢(清水沢1～3丁目、清水沢清栄町、清水沢宮前町、清水沢清陵町、清水沢清湖町)と南清水沢(南清水沢1～4丁目)を総称して清水沢地区とする場合もあるが、南清水沢地区は炭鉱との縁が薄い地区であり、本論文では清水沢のみを指して「清水沢地区」とする。以降町名に冠する「清水沢」を省略する。

³ 夕張市(1981)上巻 p260.

⁴ 清水沢鉱と遠幌鉱は、1952年に統合した。

⁵ 北海道炭礦汽船株式会社(1958).

その後、1970年代に入ると、三菱南大夕張鉱が南部地区に開鉱し、清陵町には北炭夕張新鉱の開発が始まったことで、市街地はますます繁栄したが、1990年までにいずれも閉山し、大夕張鉄道も廃止された。さらに1991年には清水沢電力所も、北炭真谷地鉱閉山により廃止され、炭鉱関連機能は消滅した。

表 4-1 清水沢地区年表

『改訂増補夕張市史』などから筆者作成

年	和暦年	主要事項
1897	明治30年	清水沢駅が開設
1902	明治35年	清水沢簡易教育所開設(後の旧清水沢小学校)
1904年頃	明治37年頃	御料林の伐採搬出
1906	明治39年	南部地区に大夕張鉱の開鉱(後に北部に移転)
1911	明治44年	大夕張鉄道開通
1926	大正15年	北炭清水沢発電所完成
1940	昭和15年	北炭清水沢ダム完成
1944	昭和19年	北炭遠幌鉱開鉱
1947	昭和22年	北炭清水沢鉱開鉱
1948	昭和23年	清水沢小、遠幌小を分離・独立
1950	昭和25年	清水沢大火
1950	昭和25年	清水沢小、新清水沢分校を開設(後の旧清陵小)
1952	昭和27年	北炭清水沢鉱・遠幌鉱を合併
1969	昭和44年	北炭遠幌鉱分割閉山
1970	昭和45年	三菱南大夕張鉱開鉱
1973	昭和48年	三菱大夕張鉱閉山
1975	昭和50年	北炭夕張新鉱開鉱
1980	昭和55年	北炭清水沢鉱閉山
1981	昭和56年	北炭夕張新鉱爆発事故、翌年閉山
1987	昭和62年	大夕張鉄道線廃止
1989	平成元年	清水沢小・清陵小が合併、現校地へ移転
1990	平成2年	三菱南大夕張鉱閉山
1991	平成3年	清水沢発電所廃止(平成6年水力発電を北海道企業局へ譲渡)
2003	平成16年	清水沢駅交換設備廃止
2007	平成19年	夕張市財政破綻
2009	平成21年	清水沢小学校・清水沢中学校に市内の小中学校全校統合予定

地区の概要を示す。商業中心である繁華街は2・3丁目で、往時は映画館もあった一大歓楽街であった。1丁目は道道沿いに住宅地が広がっている。

北炭清水沢鉱の生産施設は主として清栄町に立地していた。初期の炭鉱住宅街は清栄町と清水沢ダムの先にある清湖町、また遠幌地区に立地していたが、現在は清栄町の国道 452 号沿いに数棟の木造住宅が残る程度であり、清湖町は集落自体が消滅し、現在はごく数名が居住するのみとなっている。木造の炭鉱住宅や電力所住宅は、その後清栄町南部や宮前町、清陵町にも建設された。

1970(昭和 45)には北炭夕張新鉱開発に伴い、清陵町にあった清水沢鉱の炭鉱住宅は宮前町・清栄町に移転・集約され、ブロック造りの改良住宅が建設された。清陵町には、新たに夕張新鉱向けの炭鉱住宅が建設された。



図4-3 1977年の空中写真(清水沢1～3丁目、清栄町、宮前町)

出所: 国土情報ウェブマッピングシステム⁶で検索した画像に筆者加筆

⁶ 国土交通省 GIS ホームページ「国土情報ウェブマッピングシステム・国土画像情報閲覧機能」(最終検索 2009 年 1 月 29 日)

人口の減少が著しい夕張市内にあって清水沢地区も例外ではないが、2008年8月末現在、人口は夕張市全体の約23%にあたる2,668人であり、最多の人口を有する地区である。高齢化率は42.5%(2005年国勢調査)に達し、深刻な高齢化が進んでいる。

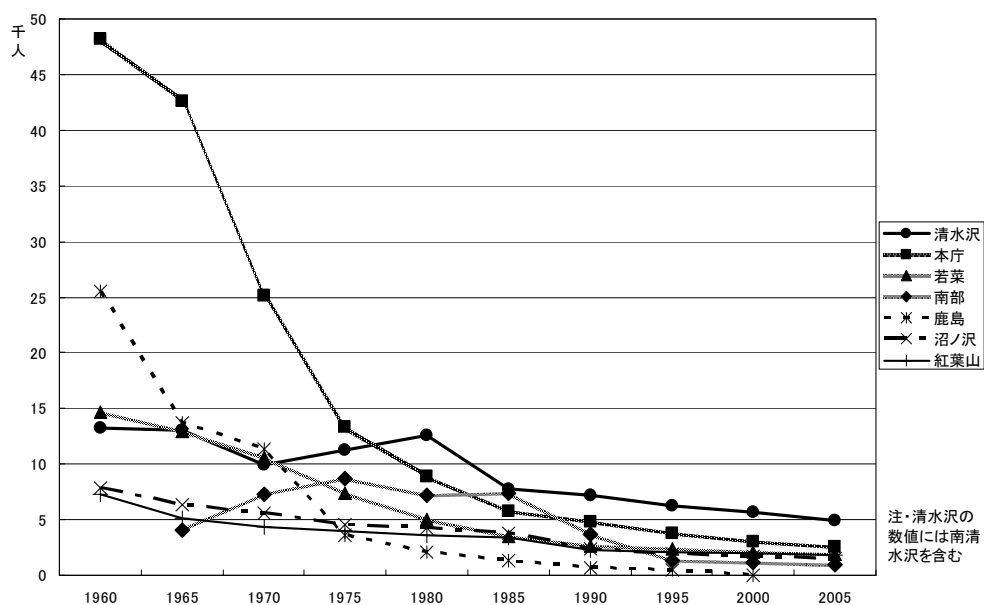


図 4-4 行政区別人口登録数の推移

「夕張市行政区・年度別住民登録人口」から筆者作成

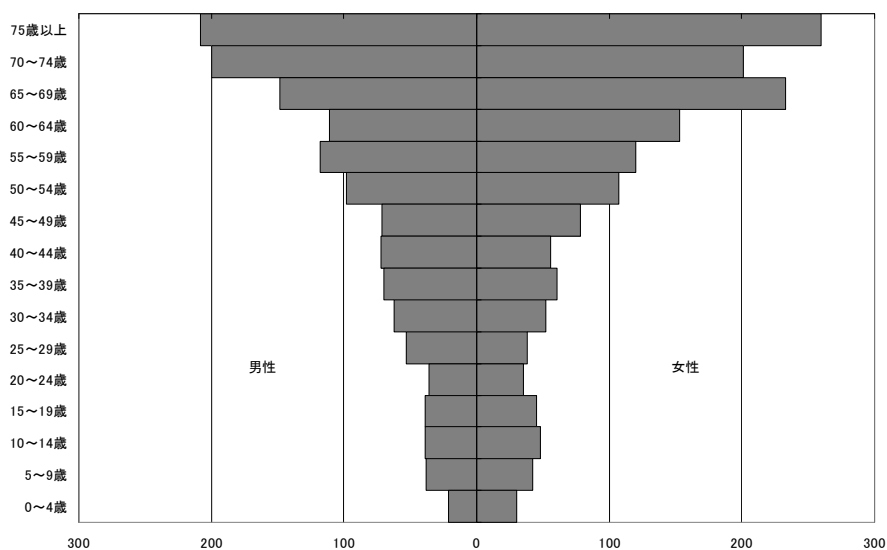


図 4-5 清水沢地区の人口構成

2005年国勢調査から筆者作成

4-1-2 清水沢地区の特徴

夕張市の炭鉱開発は、志幌加別川沿いの北炭に対し、夕張川上流部は三菱という棲み分けにより行われた。炭鉱都市では会社の違いが地域の気風に影響すると言われ、夕張においても明確な意識の違いが存在していた。ところが清水沢地区においては、大夕張鉄道により三菱大夕張・南大夕張鉱への玄関口でもあった地理的特性から、北炭と三菱の境界となり、それぞれの地区から物資や人が集積していた。

さらに清水沢地区は、隧北地区に比べ炭鉱閉山が遅いという特徴が挙げられる。隧北地区で炭鉱跡地を転用した大型観光開発が展開された1980(昭和55)年前後、清水沢地区を始めとする隧南地区では炭鉱が操業中であり、大規模な観光開発に利用されることがなかったため、隧南地区の住民は「観光は北のもの」という一線を画した態度をとった。また炭鉱閉山後、多くの炭鉱関連施設は撤去されたが、旧北炭清水沢発電所・清水沢ダム・ズリ山など大型施設のほか、炭鉱住宅街や繁華街など当時の街並みは、ほぼそのまま残存している。

以上のことから筆者は、清水沢地区は夕張市が今後行うべき地域の文脈を活かした市民主体の観光まちづくりにふさわしい地区であり、炭鉱遺産を活用したエコミュージアムの適地であると判断した。しかし、地域に残存する炭鉱遺産に対する地域住民の価値認識は皆無に等しく、保存や活用に取り組む住民活動などは行われてこなかった。それは歴史的にも地域のシンボルといえる清水沢発電所の解体に対して、特に反対運動などが起こらなかったことから明らかである。また「炭鉱は暗い・負のイメージである」という固定的なパラダイムや、夕張市が観光に傾倒して破綻したことも、消極的な姿勢に影響していると考えられる。

4-2 「清水沢まち歩きタウンウォッチング」の実施

4-2-1 そらち事業における清水沢地区の位置づけ

空知支庁における現行の産炭地域活性化事業である「そらち事業」において、清水沢地区は隣接する南部地区とともに、地域外に対する訴求力と地域内での象徴や場となるための重要拠点として位置づけられている。2008年度は、アクションリサーチを通じ、訪問する人の量より質を獲得するための「場」と「仕組み」をいかに設定するかについて、議論が重ねられた。

清水沢地区は幌内地区・赤平地区とともに、このアクションリサーチの実施地区となり、2008年7月6日(日)、NPO法人炭鉱の記憶推進事業団ならびに北海道空知支庁の共催により、地域内外の参加者による地域資源探しとその評価を目的とした「清水沢まち歩きタウンウォッチング」⁷が開催された。

筆者はこのタウンウォッチングを、地域住民が改めてわがまちを見つめなおす機会と捉え、これにより地域住民が地域資源の価値を再認識することにつながると考えた。またこれに参加する外部の人々の視点に着目することで、地域住民が外部との意識のズレを認識し、具体的行動に結びつく契機となるのではないかと考えた。そこで筆者は当タウンウォッチングの効果計測を目的とし、参与観察ならびにデータ収集を行い、分析を行った⁸。

⁷ 概要は以下の通り。

■実施日:2008年7月6日(日)13:30~16:00(まとめ作業 16:00~17:00)

天候:快晴、気温:29.4(夕張・15:00)

■参加人数:31名(市内12名、市外14名、専門家5名)

男性22名・女性9名、平均年齢47歳

■対象範囲:清水沢1~3丁目、清水沢清栄町、清水沢宮前町

※今回は入門編であるため、清水沢ダム・ズリ山は訪問するよう指示。

※移動時間短縮・負担軽減のため、国道452号線「清水沢清栄町」交差点(健康会館前)~清水沢ダム入口間において、車によるシャトル輸送を行った。

■終了後、宮前浴場(炭鉱時代に設置された公衆浴場)脱衣場にてまとめ作業(グループごとにルート・気づいたことの記入、誇れるものベスト3の選択、個別にアンケートの記入)また個人の感想や意見を把握するため、全員にアンケート用紙を配布し、31名中29票の回答を得た。アンケート用紙全文は資料②を参照のこと。

■全催事終了後、宮前浴場を無料開放。

⁸ 筆者の指導教員である吉岡宏高准教授が、そらち事業「空知産炭地域活性化戦略会議」委員長を務めている関係で、清水沢地区に関連する空知支庁事業に参与観察する機会を与えられた。その背景には、他の拠点である赤平・三笠では、活動主体となる市民団体があるため、当初から景観ワークショップを行う計画であったが、夕張においては、「正直に言って、やる人がいないので手が回らない状態」(吉岡)があった。そこに筆者が修士論文で清水沢地区を題材として希望したことで、NPO法人炭鉱の記憶推進事業団を形式上の主催者とし、筆者が「効果測定調査」の役割を担うという分掌においてアクションリサーチの取り組みが可能になった。



図4-6 「清水沢まち歩きタウンウォッチング」の様子
(上:JR 清水沢駅待合室での開催前の様子 下:ズリ山のふもとで写真を撮る参加者)
筆者撮影

4-2-2 タウンウォッチングならびに調査の概要

タウンウォッチングとは「歩きながらまちの魅力や課題を発見する手法」⁹であり、マーケティングの分野で活用されている手法である。まちづくりの分野では、景観調査以外にも、防災・防犯やバリアフリーなどの調査を目的として、地域住民が自らの居住地区を歩くことで、発見や再確認などを

促す手法としてよく取り入れられている。

今回のタウンウォッチングでは、地域内外の人々がそれぞれ持つ意識の差異を明確にするため、参加者を夕張市内在住者・在勤者(以下、《市内》)と、夕張市外からの参加者(以下、《外部》)にグループ分けした。さらに《外部》においては、一般の参加者(以下、《市外》)と、そらち事業の空知産炭地域広域景観調査会議に関係している参加者¹⁰(以下、《専門家》)をグループ分けした。これらを「属性グループ」と呼ぶ¹¹。その結果、市内4グループ、市外5グループ、専門家2グループ、計11グループに区分した。

そして、それぞれのグループごとにデジタルカメラ・地図を持ち、「誇れる(いいと思うもの)」を撮影しながら歩く、「写真投影法」¹²を採用した。

「写真投影法」は、精神科医の野田正彰により1985年ごろ考案された、子供たちの視野から環境を見る手法である。奥・深町(2003)によると、「カメラをある空間の利用者に貸与し、一定のテーマで撮影した後に回収して、撮影された写真を分析することにより、人々に認識された環境の特性を明らかにする調査方法」¹³である。この特徴は、調査する側・される側双方の言語表現・理解能力に制約されず、現実に体験した風景のよさや楽しさを、「すぐさま、その場で」映像の形に記録でき、また行動をあまり制約せず多くの記録を取得できる点である。

今回この方法を取った理由は、写真を撮影するという行動により、地域資源を発見するという参加者の目的が明確化することが期待できる点、また一枚の写真には撮影対象、場所など分析に資する膨大な情報が含まれるため、参加者の負担を最小限に抑えながら、地域資源をどのように認識しているかを明らかにすることができる点からである。また「誇れる(いいと思うもの)」を撮影しながらまちを歩くという方法は、地元学の手法に通じる部分があるとも言える。

一方で写真投影法は、非可視の体験(気持ち、音環境など)の記録には適していないため、質問紙を補助的に用いる場合が多い¹⁴。また写真を読解する分析者の技量に負うところが大きいため、短いコメントを添える方法¹⁵、被調査者へのインタビューを行う方法¹⁶、写真発表会を行う方法¹⁷などにより克服を試みている。

⁹ 北海道開発局まちづくり支援ネットワークホームページ「まちづくりアイデア集」(最終検索 2009年1月29日)

¹⁰ そらち事業の空知産炭地域広域景観調査会議に関係するメンバーで、景観や空間デザインが専門家の大学教授やコンサルタントである。

¹¹ 《外部》について、《市外》と《専門家》の差異を比較する必要性を感じられない場面では、《市内》対《外部》として分析している箇所もある。

¹² 参加者には・意図が明確に伝わるよう、被写体をなるべく大きく写す・失敗しても削除せず、何枚でも撮影する・「誇れない(恥ずかしい、なくしてほしいもの)」についてはカメラを反転して撮影、の3点を注意事項として依頼した。

¹³ 奥敬一・深町加津枝(2003) pp.63-69.

¹⁴ 奥敬一・深町加津枝・大住克博(2000)「森林レクリエーション利用者が認識する風景」森林総合研究所報 No.142(最終検索 2009年1月29日)

¹⁵ 古賀蒼章、高明彦、宗方淳、小島隆矢、平手小太郎、安岡正人(1999)などがある。

¹⁶ 上山輝(1995)などがある。

¹⁷ 曾英敏、延藤安弘、森永良丙(2001)などがある。

本タウンウォッチングでは参加者の負担を軽減するため、一枚一枚の写真について撮影者の意図を確認することはしなかった。代替措置として、タウンウォッチング後のまとめ作業において、参加者が地域資源を明確に認識することを目的に、グループごとに撮影した写真の中から「清水沢が誇れるものベスト3」として、1位から3位の地域資源とその写真を選定し、理由の記入を行った。

さらに後日、タウンウォッチングの結果を踏まえ、改めてそれぞれの地域資源に対する個人の評価を質問し、地域資源の評価の要因は何かを考察するための追加調査¹⁸を行った。これらにより、参加者がより重点を置きたい地域資源を正確に把握することに努めた。

以上を踏まえて実施したタウンウォッチングにより、合計932枚の写真が撮影され、899枚¹⁹を有効撮影枚数とした。

¹⁸ 追加調査の概要は以下の通り。質問紙全文は資料③を参照のこと。

■調査対象：タウンウォッチング参加者全員

■調査期間：2008年9月5日～9月20日

■調査方法：郵送法

■調査票配布枚数：31票 回収枚数：19票(61%)内訳：市内7通(58%)市外8通(57%)専門家4通(80%)

■調査内容：前項で選定された地域資源から撮影枚数が多いものを中心に14資源について、評価(5段階)とコメント。

※タウンウォッチングから2ヶ月経過していること、ならびに追加調査用紙に掲載されている写真そのものの印象を捉えた回答もあったことなどから、写真投影法の分析結果とすべてが一致する結果とはならなかった。しかしそれぞれの資源に対する参加者の評価をある程度把握すること及び、コメントの記述により、それぞれの資源に対し具体的にどのような感想を持っているか、一定の傾向を把握することは十分可能と考える。

¹⁹ 「誇れないもの」4枚、明らかにミスショット、参加者を撮影したもの、手ブレなどで被写体が不鮮明なものを除く。「誇れないもの」として撮影されたのは、932枚のうち4枚のみであったため、本編での分析から外した。この4枚は、資源として撮影したグループも多数あった「木造炭鉱住宅」が《市内》から、「廃屋」が《市外》から、それぞれ1枚ずつ撮影されていた。木造炭住は「貴重だが住みたくない」という感想もあり、これらは個人の感想の分かれるところであると思われる。そのほかは民家と落書きが各1枚であった。



図 4-7 タウンウォッチング後のまとめ作業(宮前浴場脱衣場にて)

筆者撮影

4-3 参加者に関する分析

4-3-1 参加者のプロフィール

各グループのメンバーが出来る限り同じような属性となるようグループ編成を行った。人数は2～4名である。各グループの参加者の概要は表 4-2の通りである。

表 4-2 各グループの参加者の概要

アンケートの回答や主催者からの聞き取りにより筆者作成

属性グループ	グループ名	プロフィール	男女構成	平均年齢(歳)
《市内》 A	A1	様々なボランティア活動に参加している人や学芸員の資格を持ち、地域で商業を営む人などを含む「地元住民」グループである。全員が清水沢居住経験を持ち、うち2名は現在にいたるまで30年以上居住している。	男女混成	53.7
	A2	ボランティア活動をしているリーダーを中心とした「元気なおばさま」グループ。全員が60歳代後半以上で、夕張市内の居住暦は生まれたときからという人と途中で移ってきた人もいる。	女性のみ	71.3
	A3	「市役所職員(居住歴短)」就職で夕張に来た人や昨年北海道から職員派遣された人で居住暦はいずれも短い。	男性のみ	40.5
	A4	「市役所職員(居住歴長)」市役所勤務暦が長い人々だが、夕張出身かどうかは不明。現在市外居住者もいる。	男女混成	41.5
《市外》 B	B1	他の産炭地で住民活動に携わっている人を中心とした「産炭地住民」グループ。	男女混成	57.5
	B2	NPOからの告知以外で催事を知り、申し込んだ2名を含む「炭鉱遺産趣味(NPO非会員)」グループ。産炭地に興味があり訪問経験も有する。	男女混成	39.0
	B3	仕事で産炭地域に関わったことから趣味的な興味を持つようになった「炭鉱遺産趣味(空知在住)」グループ。	男性のみ	35.5
	B4	仕事で産炭地域に関わったことから興味を持つようになった「炭鉱遺産趣味(仕事関連興味)」グループ。	男性のみ	52.3
	B5	夕張市を対象とした講義を受講中の、社会情報学を専攻する「大学生」グループ。	男性のみ	21.3
《専門家》 C	C1	そらち事業戦略会議の委員である「大学教員」グループ。専門は景観とデザイン。	男性のみ	53.0
	C2	そらち事業広域景観調査会議の調査を担当する「コンサルタント」グループ。景観分野を得意とする。	男女混成	37.7

4-3-2 参加者の行動と感想

ルート

今回のタウンウォッチングは、時間的制約上、ある程度歩行ルートをパターン化して提示した。しかしその中でも各グループの独自性に委ねられた部分も多く、グループごとの特徴が反映されていた。

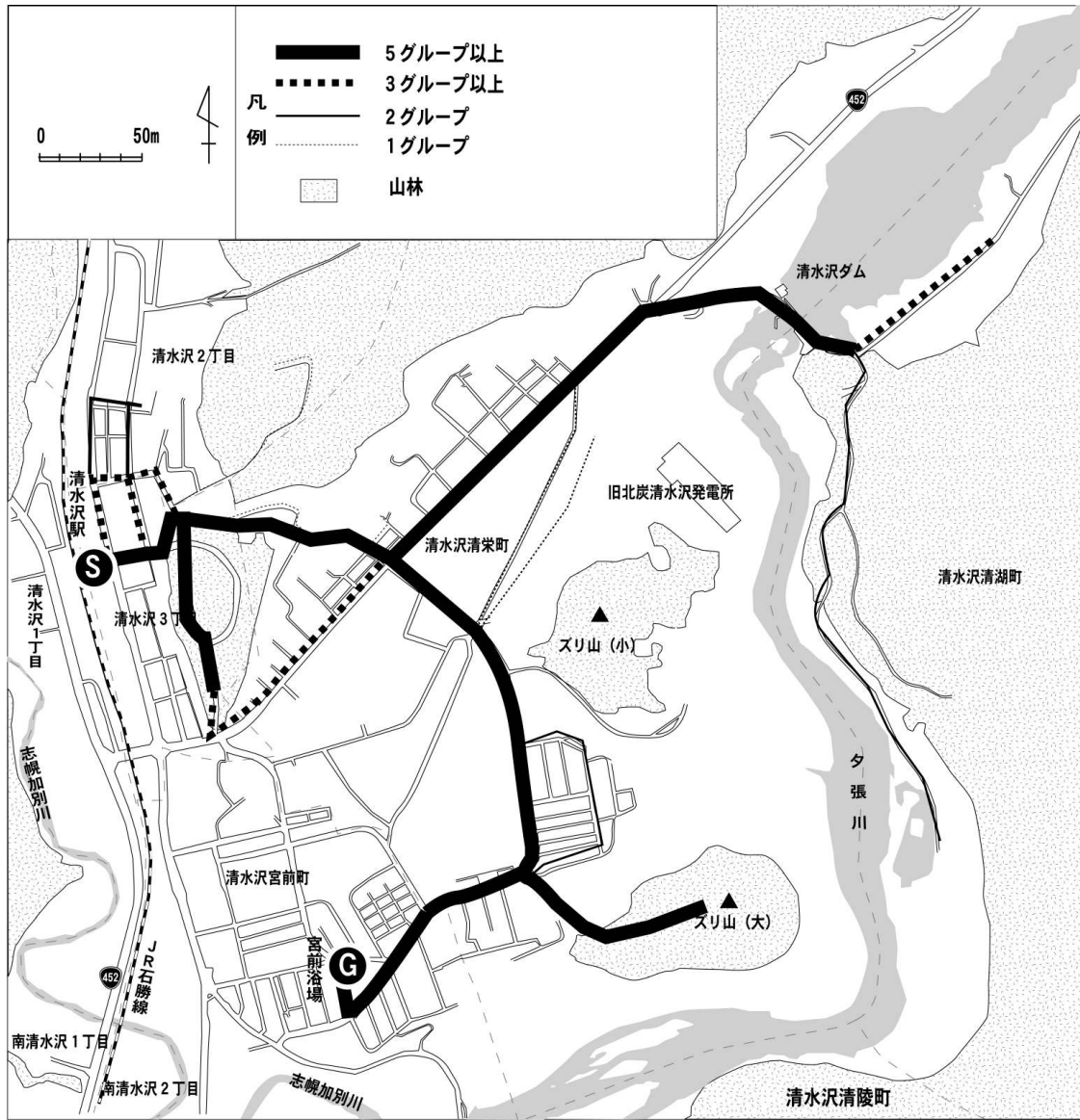


図4-8 対象地域ならびに主なルート

まとめ作業で参加者が記入したルート図から筆者作成

表 4-3 特徴的な訪問地点

まとめ作業で参加者が記入したルート図から筆者作成

属性グループ	グループ名	清湖町	清水沢ダム	ズリ山登山
《市内》 A	A1	●	●	●
	A2		●	●
	A3	●	●	●
	A4	●	●	●
《市外》 B	B1	●	●	●
	B2		●	
	B3	●	●	●
	B4		●	●
	B5		●	●
《専門家》 C	C1		●	●
	C2		●	●

今回は時間の都合上清湖町を対象外としていたが、足を伸ばしたグループがA1、A3、A4、B1、B3の5グループあった。清湖町へのアクセスはダム上の道路の一本のみで、かつ、うっそうと茂った森の中に足を踏み入れる感覚である。以前は北海道立の結核療養所や4階建ての炭鉱住宅があり、1600人ほどの人口もあったが、現在はほぼ無人に近い状態である。《市内》では、「親から行くなと言われていた」と発言した人もあった。このようなことから、《市内》グループにとって清湖町は足を伸ばしてみたいくなる「知る人ぞ知る秘境」であり、3グループが訪問した理由であると考えられる。《市外》の2チームは、B1については発電所内部にも訪問した産炭地住民であり、これらの場所への一定の知識と興味を、あらかじめ持っていた可能性がある。またB3は事前の面識がなかったにもかかわらず、A1と途中から同一行動をしていた。

全グループが訪問したのは、指示をしていたズリ山・清水沢ダムである。当日の暑さから、ダム～ズリ山間を送迎車でショートカットしたグループがほとんどだったが、「体力の限界により断念」と記述したB2以外すべてのグループがズリ山登山を行った。

独自ルートの歩行が目立ったのはB1、B2、B5の3グループだが、B2・B5が歩いた独自ルートはいずれも人家から遠い場所ではなかった。

この考察から以下のことが言える。

- ・ズリ山に登る機会はいずれの参加者にとっても魅力的に映り、多くの参加者が挑戦した。
- ・《市内》グループは普段足を踏み入れない場所に「冒険」していた。
- ・土地勘のない《市外》グループはあまり奥地に足を踏み入れようとはしない。コンビニエンスストアや農産物直売所のような「便利」「安心感」のある商店は、外部の人にとって身近に感じる可能性がある。

まとめ作業で出た意見

まとめ作業では、地図に歩行ルートを記入しながら、付箋紙を使用し、自由に感想を記入した。この記述から、参加者が歩きながらどのようなことを感じていたかを明らかにすることができる。

《市内》は、歩くことでよみがえってきた記憶(「昔はボートがうかんでいました」など)や、新たな発見(「長年夕張に住んでいるが新たな発見が出来た」など)のほか、地元ならではの情報(「春は桜がきれいです。みどころ」など)や外部の視点を気にする記述(「橋のらんかんの高さが低いのでちょっと危険、観光客向きでない？」など)が目立った。

《市外》の記述からは自然・繁華街・炭住・ズリ山などの着目度が高いことが伺え、新たな発見と捉えたり(「たまにアールデコ調のオシャレな建物が散見されます」「炭住の青と赤がGood」など)、外からの視線が特徴的な記述(「清水沢発電所取り壊し反対!」「やっぱり夕張はメロンだと思います。」「清水沢駅の構大な引き込み線跡は圧巻です。SLとか展示したりなど有効利用していただきたい。」など)が目立った。

《専門家》は景観分野からの視点において、資源の見え方に着目した記述(「この眺望において神社、小学校が見ることが出来ないのが残念。(緑にかくれてしまっている)」「緑のシェルター内に小学校」「屋根～ファサード～植栽等が作り出す歓楽街の雰囲気」など)が目立った。

タウンウォッチングの感想

アンケートに記述された感想の特徴をみる。

《市内》の特徴は、「改めて・なつかしく」という再確認する意味の表現を用いた人と「新たに・初めて・新鮮」など発見する意味の表現を用いた人に大別できた。実際に歩くことで普段何気なく見ていたものが地域資源であると認識したり、近くに住んでいても未知であったものを発見したりする契機となったことが伺える。また、「市外の方への観光案内をしようと思いました」、「炭鉱遺産をもっと活用すべきだと思います」という前向きで建設的な意見もみられた。

《市外》の特徴はグループによって分かれた。B1からは「どこも同じ」と、産炭地である自分の街と同じように感じる意見が見られた。B2は新たな発見はあったものの、「寂しい印象はぬぐえない」など消極的な印象を記述した。B3、B4、B5は市内の人と話す機会があり、素直に感動した感想を記述していた。

《専門家》は、「すばらしい」と絶賛、特に繁栄の時代を偲ぶものに対し「レトロ感」や「名残」という表現を用いていた。

4-4 清水沢地区の地域資源の特徴

4-4-1 地域資源の分布状況

撮影された写真により、地域資源をどのように認識しているかを考察する²⁰。地域資源の選定・分類方法は斎藤・藍澤・北島(2001)²¹を参照し、表 4-4の手順で行なった。その結果、有効撮影枚数899枚から、7分野36カテゴリの地域資源を選定・分類できた。

表 4-4 地域資源の分類方法

	手順	事例1	事例2
			
1	中心に写っているものを判読し、名前をつける	「マンサード木造炭鉱住宅の内部」	「屋根の付け根がカーブした民家」
2	場所・固有名・説明部分などを省く、または言い換える(カテゴリ)	【54木造炭住】	【46特徴的な民家等】
3	類似性の高いものに集約(分野)	[5炭鉱関連]に分類	[4生活関連]に分類

※以下[分野番号 分野名]、【カテゴリ番号 資源名】のように表記する。

上述の方法により分類した、地域資源の分類表を表 4-5に、分布図を図 4-9に示す。

²⁰ 今回のタウンウォッチングでは、各自持参もしくは主催者が貸与したデジカメを使用し、グループごとに代表者に撮影してもらうという手法を取っている。そのため、カメラの性質・性能(連写しやすいか否か)やカメラの操作への習熟度(個人所有か否か)、個人の性格などの影響が、撮影された写真の枚数などに認められる。また B2 グループのように貸与されたカメラ以外に個人所有のカメラでも同時に撮影していたグループは、どちらかといえば個人所有のカメラでの撮影に熱心であった。ところがそれらをすべて提出したグループもあり、データの収集方法に一貫性がなかったことは否めない。参加人数も 31 名と少数であり、撮影者が不明確であることなどから、撮影された分析上精緻なデータとは言い難いが、今回のタウンウォッチングの趣旨は現実的に地域においてアクションを起こしていくことが主で、質問紙の記述なども併せて行っていることから、一定の傾向の把握には十分寄与すると考えている。

²¹ 斎藤・藍澤・北島(2001) pp.1-6.

表 4-5 地域資源の分類表

タウンウォッチングで撮影された写真を分類して作成

資源名	代表例	A 《市内》	B 《市外》	C 《専門家》	撮影枚数 合計	撮影枚数 順位	撮影グループ数 の合計(T=11)
1 自然		15	65	17	97		
11 山林	森林・森林浴、山	1	8	2	11	24	5
12 植物	花、木	2	19	5	26	13	6
13 地形	岩、がけ	2	12	2	16	18	6
14 鳥	鳥、カラスの巢	3		2	5	32	4
15 水面	夕張川・ダム湖面	7	26	6	39	8	9
2 人物			3	3	6		
21 人物	地域住民		3	3	6	29	2
3 文化		7	21	24	52		
31 地蔵		1	3		4	34	3
32 清水沢神社	清水沢神社本堂、鳥居、狛犬、境内	3	13	24	40	7	7
33 寺		1	5		6	29	3
34 墓地		2			2	36	1
4 生活関連		15	132	79	226		
41 公共施設	宮前清栄生活館、宮前公園	2		1	3	35	2
42 現清水沢小学校		3	4	1	8	27	5
43 JR清水沢駅	清水沢駅・駅舎、ホーム・連絡通路、カーキヤッチャー	1	13	10	24	14	6
44 電気・水道	消火栓、送電設備・テレビ、給水施設		25	8	33	10	5
45 道路・橋・階段	ふれあい橋(跨道橋)、階段、清水沢駅前通り(東西)		22	10	32	11	6
46 特徴的な民家等	屋根の付け根がカープした家、清水湯、民家の煙突	2	32	28	62	2	7
47 技巧を活かした生活設備	ドラム缶ゴミ置き、カラフルタイヤの花壇、やぐら	5	11	4	20	16	6
48 繁華街	清水沢振興会館、飲み屋街、ハイヤー会社、電器店	1	23	14	38	9	6
49 商店・企業	理容店、被服工場、新聞社支局	1	2	3	6	29	5
5 炭鉱関連		36	213	91	340		
51 清水沢ダム	ダム全体、通路・手すり、水力発電施設	5	36	13	54	6	9
52 清水沢発電所	発電所全体、変電施設、鉄塔、碑子	9	79	20	108	1	11
53 スリ山	スリ山(大)、(小)、清湖町スリ山	11	18	3	32	11	8
54 木造炭住	マンサード型長屋炭鉱住宅	3	18	34	55	5	9
55 改良住宅群	清陵町炭住、清栄町炭住、厚生年金融資住宅	7	41	13	61	3	9
56 宮前町浴場		1	2	7	10	26	5
57 旧清水沢炭鉱関連その他	清水沢炭鉱線込所、事務所、選炭機跡、輸車路跡		19	1	20	16	4
6 遺構・廃施設		15	82	33	130		
61 観光施設遺構	ホテル跡	6	16	2	24	14	6
62 廃屋			12	1	13	23	3
63 廃止公共施設	スウィミングセンター、健康会館	2	7	6	15	21	8
64 廃校	旧清水沢小学校、旧清陵小学校	4	31	21	56	4	9
65 鉄道廃止設備	線路跡、腕木式信号機ワイヤーやぐら、ホーム跡	2	12		14	22	2
66 遺構・廃施設その他	木の電柱、店舗移転のお知らせ張り紙	1	4	3	8	28	
7 眺望		1	26	21	48		
71 清水沢繁華街眺望			2	3	5	32	3
72 清栄町・宮前町眺望		1	7	8	16	18	5
73 清陵町・南清水沢眺望			11	5	16	18	5
74 ランドマーク	発電所とダム、発電所とスリ山		6	5	11	24	6
撮影枚数の合計		89	542	268	899		
資源数の合計(T=36)		28	33	32			

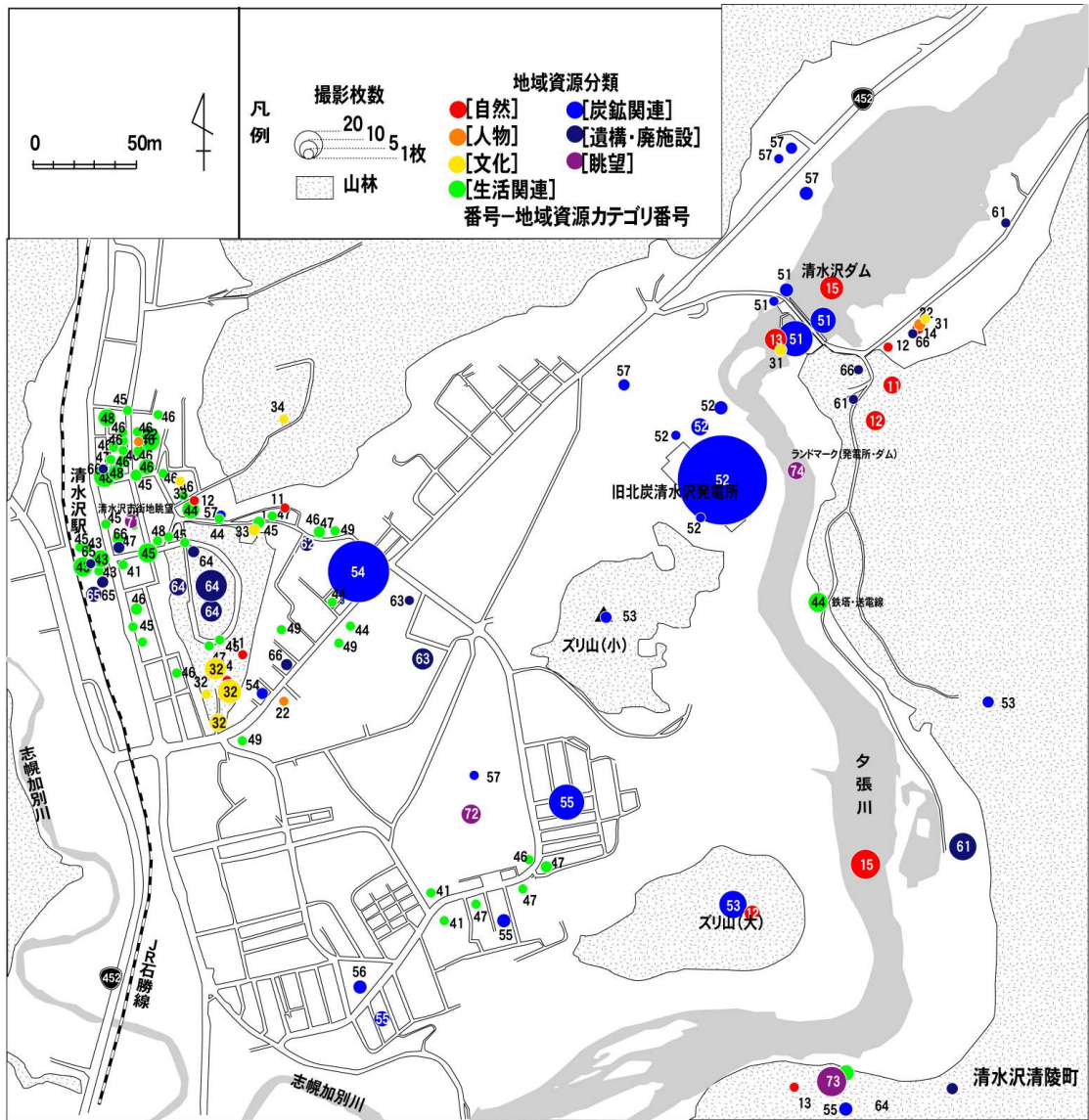


図 4-9 地域資源の分布図

タウンウォッチングで撮影された写真を分類して作成

また追加調査では、タウンウォッチングで選定した地域資源の中から、撮影枚数が多いものを中心に14資源²²を抜粋し、5段階評価を求めた。対象とした資源と評価平均点を表 4-6に示す。

表 4-6 追加調査で対象とした14資源と評価平均点

追加調査結果から作成

資源名	追加調査で使った資源名称	A《市内》	B《市外》	C《専門家》	全体
11 山林	A ダムの先の林	4.14	3.67	5.00	4.00
15 水面	B ダム湖の水面	4.43	4.00	4.25	4.21
32 清水沢神社	C 清水沢神社	3.50	4.17	4.75	4.06
44 電気・水道	D 鉄塔	2.33	3.17	1.00	2.62
46 特徴的な民家等	E 清水沢市街地の特徴的な建物	3.00	3.57	3.75	3.41
48 繁華街	F 清水沢市街地の繁華街	3.33	4.00	4.25	3.83
52 清水沢発電所	G 清水沢発電所	4.43	4.88	5.00	4.74
51 清水沢ダム	H 清水沢ダム	4.57	4.75	4.50	4.63
53 ズリ山	I ズリ山	4.29	4.38	4.00	4.26
54 木造炭住	J 木造炭住	3.43	4.14	4.75	4.00
55 改良住宅群	K 改良住宅群	3.29	3.86	3.50	3.56
64 廃校	L 旧清水沢小学校	3.14	4.50	5.00	4.11
65 鉄道廃止設備	M 撤去された鉄道の跡	3.00	3.71	3.00	3.31
73 清陵町・南清水沢眺望	N 清陵町の眺望	4.43	4.63	4.50	4.53
	全資源平均	3.70	4.14	4.24	

分布図によると、[5炭鉱関連]の地域資源は【51 清水沢ダム】・【52 清水沢発電所】と【57 旧清水沢炭鉱関連その他】が炭鉱操業区域であった北東部から中央部にかけて分布し、その辺縁部に炭鉱住宅（【54 木造炭住】【55 改良住宅群】）が取り巻くように分布している。一方、「4 生活関連」は、民家・通りなど多様な地域資源が繁華街である清水沢駅前に多く位置しており、住宅街である清栄町・宮前町でも参加者の歩行ルート沿いに見られる。

繁華街を見下ろすように位置する山林部分には【64廃校】や【32清水沢神社】などがあり、[生活関連]が多い周囲と乖離した、異空間的な存在となっている。

また現在ほぼ無人となっている清湖町では[2自然]・[6遺構・廃施設]が多く見られた。

なお、時間的制約上、地域内をくまなく訪問することはできなかったため、今回のルート以外に存在する地域資源²³についても、存在を確認し選定を行う必要がある。

²² なお追加調査の質問紙には、分析用の名称をそのまま使用するのではなく、被調査者にとってわかりやすいように名称を改めた。資料編の質問紙を参照のこと。

²³ 例えば清水沢炭鉱事務所、選炭機跡（現在は草が生い茂る荒地となっている）や、木造の役員住宅などは、今回ルートから外れていたため、着目されることが少なかった。

4-4-2 地域資源の特徴

すべてのグループが撮影した地域資源は【52 清水沢発電所】のみであり、次いで 9 グループに撮影されたのが【15 水面】【51 清水沢ダム】【54 木造炭住】【55 改良住宅群】【64 廃校】であった。

撮影枚数をみると、最も多く撮影された分野は[5 炭鉱関連]の 340 枚で、全体の 3 分の 1 以上を占める。その中でも【52 清水沢発電所】、【55 改良住宅群】、【54 木造炭住】、【51 清水沢ダム】は撮影枚数が上位であった。

続いて[4 生活関連]分野が挙げられた。これは繁栄時の面影を感じることができる【46 特徴的な民家等】、【48 繁華街】など、建物や街並が撮影枚数の上位に挙げられた。また旧清水沢小学校を中心とした【64 廃校】が大部分を占める[6 遺構・廃施設]も多く撮影された。



【52 清水沢発電所】



【15 水面】



【51 清水沢ダム】



【54 木造炭住】



【55 改良住宅群】



【64 廃校】

図 4-10 撮影グループ数が多かった地域資源

タウンウォッチングで撮影された写真より抜粋

追加調査においても、[5炭鉱関連]は高く評価され、最も評価が高かったのは「G 清水沢発電所」(4.74)である。市内外問わずその威容や歴史性、産業遺産としての価値への賛嘆が多数見られた。なお、現在解体中であるので、「残したい」という記述も多数見られた。「H 清水沢ダム」も同様であり、2つの資源をセットで見る価値について多数言及されていた。

「J 木造炭住」は、昔の様子を想像できる炭鉱遺産として評価し、植栽や家庭菜園、住民との交流などにも関心を寄せた記述も見られた。なお「K 改良住宅」も同様の傾向が見られたが、撮影枚数は多かったにもかかわらず、「特徴に乏しいことから評価できない」というような記述もあり、追加調査では「J 木造炭住」より低く評価されていた。

以上のことから、評価の高かった資源は、そのほとんどが炭鉱に関連するもの、もしくは炭鉱の存在が由来となっているものと言える。特に【52 清水沢発電所】は、全てのグループから関心を集め、撮影枚数も最も多かったことから、今回の調査において参加者に最も支持された資源ということができる。

4-4-3 地域資源の捉え方に存在する市内外の差

撮影資源数

属性グループの別により、どのような地域資源を撮影しているかについて分析し、各属性グループの着目点の所在を明らかにする。

《市内》と《外部》(《市外》・《専門家》)の差異という枠組みでみると、《市内》のみが撮影した資源は【34 墓地】のみである一方、《外部》のみが撮影し、《市内》が撮影しなかった資源は、【21 人物】、【44 電気・水道】、【45 道路・橋・階段】、【57 旧清水沢炭鉱関連その他】、【62 廃屋】、【71 清水沢繁華街眺望】、【73 清陵町・南清水沢眺望】、【74 ランドマーク】の8資源である²⁴。これら《外部》のみが撮影した資源の撮影枚数の合計は、136枚であった。

【21 人物】は、タウンウォッチング中に出会った地元住民である。このような「地元住民とのふれあい」を外部の人は資源と感じ、撮影したと考えられる。

【44電気・水道】、【45道路・橋・階段】は、撮影枚数が全体の10、11位に挙がっていたが、《市内》グループには全く撮影されていない。しかし、追加調査で「D 鉄塔」として評価を訪ねたが、《市内》《外部》ともに最も低かった(2.62)。「自然の中の人工物だから」という見解が多数であったが、「北炭のものなら」という前提で「電気の道の遺構は、石炭を運んだ鉄道と同じくらいの物語性がある」という記述もあり、清水沢発電所を起点として、各地の炭鉱に電力を供給した歴史性に注目すべきという意見もみられた。

【57旧清水沢炭鉱関連その他】や【62廃屋】など、現在使用されていないものや風化・劣化、撤去済みなどで、注意しないと見落としてしまうようなものも《外部》には撮影されていた。前者に含まれる選炭場跡などは往時巨大な施設であったが、現在は荒地であり、ズリ山から見下ろさない限り全体を認識することはできない。追加調査では《外部》から、撤去済みの資源に対し、「痕跡と思わせ

²⁴ 《市内》は眺望分野の資源をほとんど撮影していなかったが、後述する「評価ベスト3」においては高い評価をしていたため、ここでは着目度の有無について考察しなかった。

る仕掛けが欲しい」²⁵と今後の活用可能性を指摘した意見があった。このことから地元の住民には忘れ去られたものでも、外部の目には新鮮に映っていることが伺える。

撮影枚数

さらに、属性カテゴリ別に地域資源の分野別撮影枚数を分析し、着目度の深さを考察する。

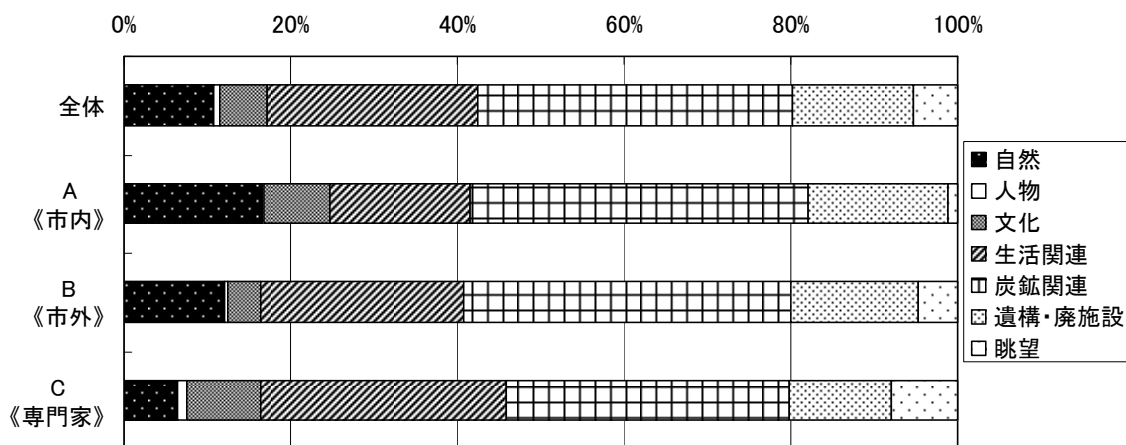


図 4-11 属性グループ別の地域資源撮影枚数

タウンウォッチングで撮影された写真を集計して作成

図 4-11は属性グループにより、撮影枚数を比較したものである。

撮影枚数は《市内》と《外部》で圧倒的な差がついた。これは《外部》が一種類の資源を何枚も写している傾向にあったことが影響していると見られる。追加調査でも、評価の平均値は《市内》3.70、《市外》4.17、《専門家》4.14であり、《外部》の方が良い評価をする傾向にあった。

いずれのグループも炭鉱関連資源を最も多く撮影しているが、2位は《市内》では「自然」、「生活関連」、[遺構・廃施設]がいずれも16.9%である一方、《外部》はどちらも[生活関連]で、構成比は

²⁵ 使用されていないものとして「M 撤去された鉄道の跡」の評価を尋ねた。

《市外》39%、《専門家》34%である。このように、市内外の差異は、2位以下との構成比に明確に表れている。

属性グループ間で全体構成比と比較して差が大きい(5%以上)のは、自然(《市内》+)生活関連(《市内》-)であった²⁶。

追加調査の結果を加えて考察する。[自然]分野(「A ダムの先の林」「B ダム湖の水面」)は、《市内》の評価平均値が《市外》・《専門家》の平均値を上回っていた。《市内》からは、「夕張の象徴は“自然”」「山に囲まれた当市では、人造湖の水面や景色に心安らぐ」のような記述があり、記述量も多かった。

[生活関連](「E 清水沢市街地の特徴的な建物」「F 清水沢市街地の繁華街」)については、《市内》からは「衰退」「汚らしい」という否定的な記述など、思い入れを感じさせる記述がほとんど見られなかった。《市外》・《専門家》は個人差があるものの、「夕張らしい廃墟の町」や「昔の喧騒が目には浮かぶ」など繁栄の痕跡を評価する記述が見られた。

なお[遺構・廃施設]という大分類では表出しなかったが、全体の撮影枚数が4位であった【64廃校】(「L 旧清水沢小学校」)は、追加調査において市内外の差が最大となった資源である。《市内》は「自分の母校」とした人が2名いたが、評価はともに低く、母校が荒廃していることへの悲嘆の記述が見られた。一方《外部》からは、木々に囲まれ、「森と一体になっている」様子に高い評価をした人が多数おり、特に《専門家》は全員が5点満点の評価をした。

これらをまとめると、[炭鉱関連]はすべてのグループに資源として認識されている。しかしそれ以外では、《市内》と《外部》間の意識は大きく異なっており、《外部》が評価しているのは、学校跡や神社、街並みなど、炭鉱の歴史性や物語性などがあつたからこそ成り立った、人々の生活に関わる資源であると言える。またその基準は、繁栄の面影を資源として評価するかどうかであると示唆される。また相対的に、《市内》グループは他グループより[自然]の着目度が高い。

4-4-4 視点場に着目した分析

これらの地域資源を撮影した場所(視点場)を分析し、地域資源の価値をより高めるための活用のあり方を検討する。表 4-7は視点場別撮影枚数の比率を示したものである。

²⁶ 枚数が極端に少ない人物と、撮影枚数にあまり反映されていない眺望を除く。

表 4-7 視点場別撮影枚数の比率

タウンウォッチングで撮影された写真を集計して作成

視点場	撮影枚数	対全体比	至近距離以外での比率
至近距離	576	64%	—
至近距離以外	323	36%	—
(内訳)			
ズリ山(大)	172		53%
ダム	99		31%
その他	52		16%
合計	899	100%	100%

清水沢地区はほぼ平地で構成されているため、視対象を見下ろして撮影できる高台は限られる。従って至近距離が64%を占め、それ以外はズリ山・清水沢ダムにほぼ集約される。

ズリ山と市街地は70mほどの高低差があり、炭鉱住宅が広がる街並みや選炭機場跡の荒地を見下ろすことができるほか、ダム・発電所、夕張川、清陵町の街並みも一望することができる(図4-12)。ズリ山からの視対象は炭鉱住宅が最も多く、ダム・発電所の遠景も多かった。



清栄町の炭鉱住宅



発電所とダム



夕張川と清湖町の山林



清陵町の眺望

図 4-12 ズリ山から見える眺望

タウンウォッチングで撮影された写真より抜粋

追加調査では、ズリ山から見える資源として「N 清陵町の眺望」の評価を尋ねたが、市内外ともに評価が高かった。ズリ山から望める近代的な住宅配置に対し、「美しい」、「心地よい」という記述がみられ、中でも《市内》からは、新鉱開発の記憶と絡めた記述や、「見せたい」、「異様に見えると思う」のように、外部からの視点を意識した記述がみられた。

「I ズリ山」には、《市内》回答者全員が4点以上の高評価を行ったが、「存在感あり」「ズリ山はどこでも遺産だと思う。」などズリ山の存在価値そのものに言及する記述がみられた。これは《市内》にとってズリ山は眺めるもので、今回初めて登ったという人が多かったためと考えられる。《外部》からの評価も、景色の評価を中心に高かったが、現状は放置されたままであり、「何らかの仕掛けがほしい」という意見も見られた。

これらのことから、視点場としてのズリ山の活用可能性は極めて高い可能性がある。しかし現状では自然に任せて放置されているため、登山道などは一切整備されていない。活用を検討する上では、最低限の危険を回避する目的において、ルートの整備を行うのが望ましい。

2番目に多かった清水沢ダムは、清水沢発電所を一望できる唯一の場所である。そのため撮影対象は清水沢発電所が最も多く、続いてダム上流の水面や下流の夕張川、ダムから至近距離にある奇岩が多かった。

しかし発電所は解体中²⁷であることから、将来、ダム湖や夕張川など自然との組み合わせを考慮した活用を検討する必要がある。追加調査では、清水沢ダムから撮影した「B ダム湖の水面」の評価を尋ねたところ、《市内》の平均点は4.43と、《外部》より高かった。《外部》の記述からは、「夕張らしいと言われればそうでもないかもしれない」のように、ダム湖自体は一般的で珍しいものではないことが、高評価にならなかった理由として看取できたが、人造湖としての物語性を推し出したらどうかという意見もあった。

以上のことから、“ズリ山”と“清水沢ダム”という恵まれた視点場の活用を検討すべきであると言える。地域資源単体の価値だけではなく、複数の要素を組み合わせることにより生まれる相乗効果などを検討する余地がある。

なお、清水沢地区唯一の高台である清水沢神社のある山林部分は、区内を三方向に渡って見渡すことができる地理的条件にあるが、そこを視点場としたのは、神社と旧清水沢小学校を合わせても3枚のみであった。《専門家》からの感想として「緑のシェルター内に小学校」という記述があったが、夏場はうっそうとした森林に囲まれ、ズリ山や市街地の景色が眺望できない状況である。眺望を活かすのであれば、下枝の伐採などの措置が必要となる。

4-4-5 「清水沢が誇れるものベスト3」による評価

まとめ作業において選定された「清水沢が誇れるものベスト3」では、参加者がどのような点を評

²⁷ 1998年から解体を行うことを条件に民間企業が借り受けているが、巨大な建造物ということもあり、作業は長期にわたって行われている。

価していたかを見る。

最も多くのグループに評価されたのは、“ズリ山からの眺望”(9グループ)であった。《市内》・《専門家》の全グループで評価され、1位としてもそれぞれ3グループに挙げられた。選定された写真には、炭鉱住宅や発電所、清陵町などの眺望が撮影されていた。なお評価理由は、「絶景」「空気がきれい」という高所の利点を評価する意見のほか、「石炭が積もって山になった」ことへの賛嘆もみられた。

続いて“清水沢ダム”(7グループ)は、最多の4グループから1位評価を受けた。視対象・視点場の両方として評価されており、「ダムと発電所をセットで見ることでより歴史性のある景観と感じる」という趣旨の意見があった。

また廃校である“旧清水沢小学校”は、5グループが評価していた。なお《専門家》は2グループとも、清水沢神社と合わせて1位で評価していた。そのほかにも、ユニークな外観を持つ“清水湯”や、商店街の雰囲気人评价された“繁華街”(4グループ)、2グループで1位評価であった“清水沢発電所”(3グループ)、森林浴や雰囲気が人评价された“清湖町”(3グループ)などが挙げられた。

なお“繁華街”を评价したのは《外部》のみであり、《市内》では取り上げられなかった。また“清湖町”については、1位评价したグループが《市内》グループにあった。

これらは、写真の分析で明らかになった視点場としてのズリ山・ダムを高评价する傾向や、繁栄の面影を資源として评价する《外部》の傾向などを、如実に反映した結果であると言える。

4-5 まとめ

以上のことから、今回のタウンウォッチングにおいて清水沢地区の地域資源は、これまで消極的とされていた《市内》も含め、炭鉱遺産を中心に認識されていることが明らかとなった。さらに《外部》は、炭鉱という地域の歴史的な文脈の中に位置づけられる、繁栄した時代の面影を残す文化・生活関連資源、地元住民とのふれあいなどにおいても、地域資源として認識していると言える。

また今回のタウンウォッチングのように、地域内外の人々が共に参加する場を用意することで、《市内》には地域資源の発見や再認識の契機となっただけでなく、自分たちだけでは気づかない地域資源の指摘という効果が得られた。すなわち、外部の視点を導入するという手法が、炭鉱遺産に関心を持つ地域内外の人々に訴求し、まちづくり活動に好ましい影響を与える可能性が指摘できた²⁸。

一方、今回のタウンウォッチングでは、自らの資源に誇りを持つという心境の変化までには至らず、また写真投影法という手法の性格上、撮影可能である表面的な資源のみが対象であることで、人々の記憶や暮らしの様子など内面的な資源を考慮できないという点が課題として浮かび上がった。

本章で得られた知見²⁹により、清水沢地区での観光まちづくり振興においては、炭鉱という地域の文脈に位置づけられる地域資源を活用し、地域内外の協働による活動の場を増やすことで、双

²⁸ 現実に今回のタウンウォッチングを参考にした催事が、他地区で既に2件開催された。2008年10月18日(土)に空知支庁の主催により三笠市幾春別地区において開催されたタウンウォッチングならびに、翌19日(日)にゆうばり再生市民会議の主催で開催された夕張市南部地区における「夕張いいとこ発見うおーきんぐ」である。

²⁹ さらに後日、タウンウォッチングに参加した《専門家》メンバーを含む、そらち事業戦略会議の委員やまちづくり関係のコンサルタントなどを交え、清水沢地区の活性化について意見交換する場が持たれた。そこでは以下のような視点が挙げられた。

- 1 「繁華街への着目」歓楽街特有の雰囲気と、大夕張の人々の記憶の入り口としての役割
 - 2 「山林部分への着目」特徴的な地形で、森林の中に神社と小学校がある
 - 3 「発電所・ダム、炭鉱住宅、自然への着目」今回確認された地域資源の活用可能性の検討
 - 4 「空白地帯の扱い方」公共施設に転用された歴史的な文脈から切り離されている地区の有機的な活用
- これらの指摘は、第6章でのエコミュージアム構想の際に参照した。

方向的な交流を深化させていくという方針を継承しつつ進めていくことが望ましい。上述の課題の解決を図りつつも、エコミュージアムのコンテンツとしても有効な、外部の人々にとって魅力的な観光プログラムの検討が不可欠となる。

第5章 地域内外の双方向的な交流を目的とした「炭鉱住宅オープンハウス」イベント

5-1 清水沢地区における地域資源としての炭鉱住宅

5-1-1 炭鉱住宅コミュニティへの着目

前章のタウンウォッチングにおいて、二種類の炭鉱住宅(木造炭鉱住宅・改良住宅群)¹は、高い評価を受けた。外観面での希少性を理由に木造炭鉱住宅の評価の方が高かったが²、現在も多く居住者がある改良住宅群を中心に、炭鉱を由来とする清水沢地区固有のコミュニティが営み続けられている。このようなコミュニティは、まさに前章で明らかになった「炭鉱という地域の歴史的文脈の中に位置づけられる、繁栄した時代の面影を残す文化・生活関連資源、地元住民とのふれあい」の地域資源であると言え、外部の人々にとって魅力的な地域資源となる可能性が高い。

そこで、前章で確認した地域内外の双方向的な交流を深化させていくという方針を継承しつつ、本章では炭鉱住宅コミュニティに着目し、清水沢地区での観光まちづくりにおける地域資源性を検討する。

5-1-2 清水沢地区の炭鉱住宅の変遷

清水沢地区には、北炭遠幌鉱・清水沢鉱の社宅(以降炭鉱住宅)が清栄町、清湖町、遠幌地区に立地したほか、清水沢電力所住宅が宮前町などにも立地していた。木造の炭鉱住宅街は炭鉱の生産施設周辺部に漸次的に拡大し、清陵町にも立地していた。

木造住宅の老朽化及び夕張新鉱開発に伴う人口増加への対応の為、1970年代初頭から宮前町や清栄町の住宅の多くがコンクリートブロック造りの2階建て住宅に更新され、周辺の炭鉱住宅が集約された。その後清陵町には、北海道大学太田實研究室(建築学)の住区計画により、近代の様相を呈するコンクリートブロック造り中層アパート群が建設された。

¹ 木造炭鉱住宅は、清水沢清栄町の国道452号線沿いに数棟残存する、夕張市内でも残存数が少ないマンサード屋根の住宅である。改良住宅群は、宮前町・清栄町・清陵町に多数立地する、ブロック造りの2階建て以上の住宅を指す。

² タウンウォッチングと追加調査における2資源の評価(再掲)

	木造炭住	改良住宅群
撮影枚数順位	5位	3位
撮影グループ数の合計	9グループ	9グループ
撮影枚数合計	55枚	61枚
追加調査評価平均点	4	3.56



図 5-1 清陵町の中層住宅

筆者撮影

夕張市の炭鉱住宅は、炭鉱閉山後に夕張市が買い取り市営住宅となった。しかし現在では、無人化・老朽化に伴い多くが解体され、炭鉱住宅街と言えるような地区は、ほとんど消失している。

そのような中、清水沢地区は、1970年代に建築されたコンクリートブロック造りの炭鉱住宅が大半を占めているため、炭鉱閉山後も多くの人々が継続して居住した。2005年国勢調査によると清水沢地区全世帯数の72%に当たる1,107世帯が公営住宅に居住しており、これらのほとんどは、旧炭鉱住宅の市営住宅である³。

また、住区レイアウトもほぼ当時のままであり、共同浴場や集会所などの施設が現在も機能している。従って清水沢地区は、現在も炭鉱時代からの生活文化やコミュニティが維持されている数少ない地区の一つとなっている。以上のことから清水沢地区の炭鉱住宅コミュニティが、外部の関心を引き付ける可能性は高いと言える。

5-1-3 清水沢地区における地域資源としての炭鉱住宅の利用

清水沢地区の炭鉱住宅は現在も居住者が多く、その居住者と交流することは、前章で外部の参加者が評価していた、「地域生活や地元住民とのふれあい」などへの欲求を充足しうると言える。

³ 清水沢地区の公営住宅の内訳は、管理戸数 1,710 のうち、道営住宅 48、夕張市が管理する市営住宅のうち公営住宅法により供給された市営住宅 0、住宅地区改良法により供給された改良住宅 799、炭鉱企業から移管された旧炭鉱住宅 863 であり、そのうちの 38%にあたる 645 戸が空家となっている。
瀬戸口(2008) pp.64-68

このようなことから、前章で示された清水沢地区の有力な地域資源の一つである炭鉱住宅と、そこに住む元炭鉱マンの生活を手がかりとした、「炭鉱住宅オープンハウス」という催事が実施された。この催事の最大の目的は、対話を通じて地域内外の双方向的な交流を深化させることであり、それが居住中の炭鉱住宅で行われることで、外から眺めたり空き家を覗いたりすることでは得られないリアリティに迫ることができる。これはエコミュージアムの遺産の現地保存という原則にも合致し、「家」という場の力を最大限に利用できる。

当然のことながら、生活の場である住宅地を資源とする以上、住民が静かに生活している場に来訪者が訪れることの弊害について、慎重に検討する必要がある。それは来訪者の一方的な興味に応えるためではなく、来訪者と地域住民による、双方向的な交流の深化に資するものでなければならない。

そこで本章では、炭鉱住宅での対話を通じて地域内外の双方向的な交流を深化させていくという手法が、清水沢地区での新たな観光展開にどのように貢献するかについて、催事の参加者と自宅公開に応じた居住者の意識変化の分析を中心に考察する。またエコミュージアムのコンテンツとしても可能性を検討する。

5-2 「炭鉱住宅オープンハウス」の実施

5-2-1 催事の概要

本催事は「元気そらち！産炭地域チャレンジ実践事業」の一環として、空知支庁ならびにNPO法人炭鉱の記憶推進事業団の共催で実施された⁴。炭鉱住宅においてその居住者と対話するという企画の性質上、地域の協力が必要不可欠であった。そこで宮前浴場の管理人であり民生委員のS氏ならびに、夕張市地域再生グループに協力を仰ぎ、宮前町町内会長A氏を中心に協力者が選定された。その結果、宮前町・清栄町のタイプが異なる住宅に居住中である、元炭鉱マン5名(以下「居住者」とする)の協力を得ることができ、2008年10月19日(日)、6軒の旧炭鉱住宅(うち1軒は空き家)の公開催事を実施した⁵。なお将来的に、エコミュージアムのサテライトやコミュニティビジネスとして地域に経済効果を生み出せるよう、参加料を徴収し、居住者に謝金を支払う方法を取った。

⁴ 本章のオープンハウスは、前章のタウンウォッチングで筆者が行った調査成果を発展させる意味で企画されたものであり、タウンウォッチング同様、筆者は「効果測定調査」という立場であるが、企画の調整に一部参加したり、実際の催事でも学生スタッフとして携わった。

⁵ 催事の概要は以下の通り。

■実施日

平成20年10月19日(日) 11:00～15:00

天候:晴、気温:18.0(夕張・14:00)

■参加人数

80名

市内 7(9%)名、市外 73名(91%)(うち道外 2名(東京都・愛知県))

男性 46名(58%)・女性 27名(34%)・性別不明 7名(9%)

■見学場所

(1) 清水沢宮前町・清栄町の炭鉱住宅タイプ別6件

(2) 清水沢地区の共同浴場、連絡員詰所、集会所などの住区レイアウト

■見学時間

11:00～15:00

■実施内容

各自で住宅を訪問、住宅の見学や、生活のようすや炭鉱時代の生活状況などを居住者と対話する。

※公開住宅は概ね半径1km以内に点在

■参加費

500円

■往復無料バス

札幌駅北口→岩見沢(空知支庁)→現地

(札幌都心部から清水沢駅まで公共交通機関を利用した場合、JR(新夕張駅まで特急利用)は約1時間10分・3800円、バスは1時間50分1,700円。)

■関連行事(参加無料)

夕張いいとこ発見ウォーキング、宮前集会所での写真展示、映画上映、ズリ山登山、清水沢発電所見学、宮前浴場臨時営業

■広報

NPO炭鉱の記憶推進事業団ならびに空知支庁HP、新聞二紙(朝日新聞・北海道新聞)、清水沢駅・宮前浴場ポスター掲示。なお当日の様子は、後日民放ローカル情報番組内で5分程度の特集として放映された。

居住者には、参加者が訪問した際には、居宅内や庭先など、いつも通りの生活の場を見せるように依頼した。接待の負担を軽減するため、参加者全員にペットボトルのお茶を支給した。居宅内の見学以外にも、昔の写真や個人所有の炭鉱関連資料などを用い、参加者と交流することを促した。なお、参加者が居間以外の場所などを見学したい、写真撮影を行いたいなど要望した際の判断は居住者に任せ、不可の場合は遠慮なく断ってもよいことを説明した。



図 5-2 催事中の E 宅の様子

筆者撮影

5-2-2 居住者の概要

住宅公開に協力した居住者は5名である⁶。さらに夕張市内でもほとんど残存していない、ペチカ(ロシア式暖炉)付きの空き家についても、夕張市の協力により公開された。

⁶ 当初選定された5名のうち、1名が急用により辞退したため、改めて別の協力者を選定した。

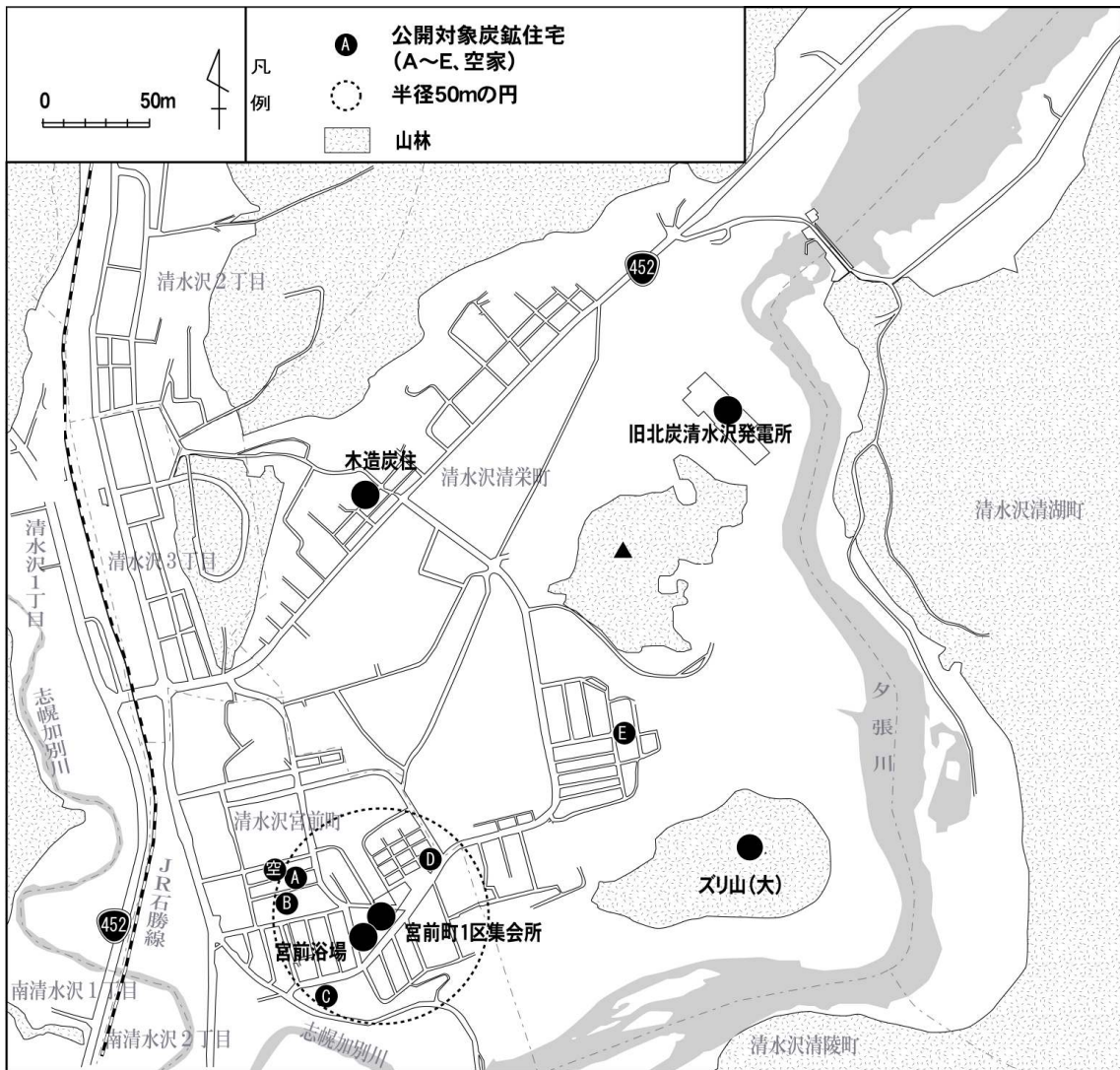



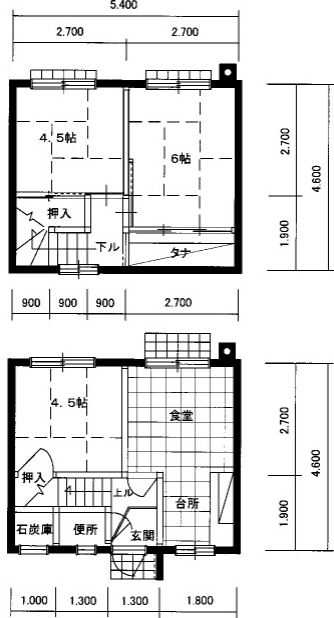

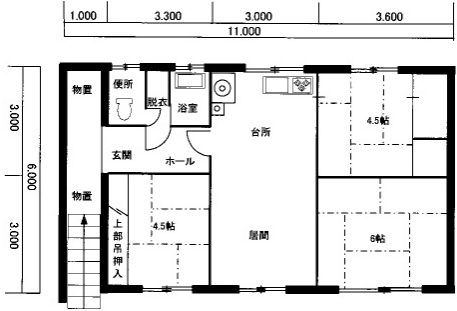

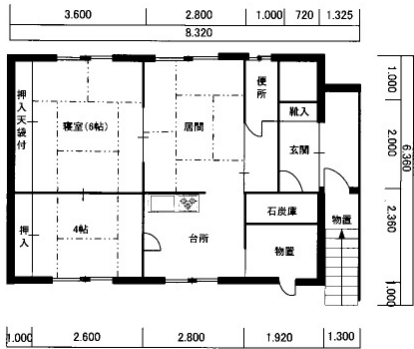
図 5-3 公開対象住宅の位置

筆者作成

表 5-1 公開住宅の概要

夕張市提供資料より作成

居住者	建築年次	用途	建築タイプ・建材・面積 写真	間取り
A	1970年	雇宅	<p>1棟2戸平屋建・W造・64.8㎡</p> 	
B	1969年	役宅	<p>1棟2戸平屋建・W造・77.8㎡</p> 	
C	1970年	鉦員住宅	<p>1棟4戸2階建重ね住宅・CB造・49.5㎡</p>  <p>※同タイプの別住宅を撮影</p>	 <p>※同タイプの別住宅の間取りを掲載</p>

D	1973年	鉦員住宅	<p>1棟4戸2階建縦割住宅・CB造・49.7㎡ (1階=24.8㎡)</p> 	
E	1975年	雇宅	<p>1棟4戸2階建重ね住宅・CB造・63.9㎡</p> 	
空家	1962年	雇宅	<p>1棟4戸2階建重ね住宅・CB造・44.6㎡</p> 	

※敬称略

表 5-1が示すように、すべて間取りの異なる住宅である⁷。A・B宅は木造平屋建てで、そのほかはコンクリートブロック造りの2階建てである。B宅は幹部クラスが入居していた「役宅」、A・Eは職員クラスの雇宅である。なおD宅のみ「縦割住宅」という、2階部分のある家に居住している。なおA～D宅は宮前町、E宅のみ清栄町である。

聞き取りをした結果得られた、居住者のプロフィールは表 5-2の通りである。

表 5-2 居住者のプロフィール

居住者インタビューの内容から作成

居住者	年齢	従事した主な職場	従事した主な職種
A	78	夕張1鉱、清水沢鉱、夕張新鉱	保安、採炭
B	75	清水沢電力所	保守
C	69	清水沢鉱、夕張新鉱、真谷地鉱	支柱、電車、掘進
D	76	北菱鹿島鉱、清水沢鉱、夕張新鉱、北菱産業	採炭、保安、(救護隊)
E	80	遠幌鉱、清水沢鉱	運搬、労組役員

※北菱鹿島、北菱産業以外は全て北炭である。

現在の住居への平均居住年数は、24.8年である。55歳での定年後や市営住宅への移管後に入居するなどしているため、炭鉱勤務時の階級と現在の住宅の種類とは関係がない。

居住者はいずれも北炭での勤務経験があるが、Bは電力所(清水沢発電所)の職員であり、B以外の全員は、閉山を理由に他の炭鉱に異動した経歴を持つ。特にDは閉山に伴う三菱系列炭鉱からの移籍者である。

全員が町内会・老人クラブの役員であり、町内会活動のほか、パークゴルフやカラオケ・旅行など、地域内の趣味グループでの活動に参加している。

買い物は町内で済ませたり、清水沢市街地・本町方面も利用している。しかし自家用車を持っている居住者は町外のスーパーに買い物に行くこともある。

通院は夕張診療所のほか、送迎を行う町外の病院に通っている人が多い。

⁷ 炭鉱住宅は職員の階級別に住宅が区分されており、北炭では幹部職員住宅は「役宅」、一般の職員住宅は「雇宅」、職員以外の鉱員等は「鉱員住宅」と呼ばれていた。役宅には風呂があるなど、間取りや面積は階級により異なり、住棟名にも明記されているため、外部からも容易に判断できるようになっていた。

5-3 催事当日における参与観察の結果分析

5-3-1 催事中的の様子

参加者は夕張市内7名、市外は道外の2名を含む73名、合計80名であった。開催地区である清水沢地区の住民の参加はなかった。参加者の40%の32人が無料送迎バスを利用したほか、自家用車での来場も10組ほどであった。

午前中に開催された、夕張市主催の「夕張いいとこ発見ウォーキング」の参加者と、送迎バスが到着した11時以降に訪問が本格化し、12時半頃には昼食と休憩を兼ねて、集会所で映画を見ている参加者が多かった。

居住者の対応は、それぞれの個性が反映された特徴的なものであった。

表 5-3 居住者の対応

当日の観察を元に筆者作成

A宅	都合により14時までの公開。A夫妻がそろって対応し、A妻の手作りによる生活用具などに参加者が興味を示していた。
B宅	自宅屋根の塗り替えのため、札幌近郊から訪れた孫と、屋外で作業をしながらの対応であった。ほぼ自由見学。
C宅	壊れたラジオのアンテナを指し棒として活用し、自宅外まで丁寧に解説を行っていた。隣の棟に住む母も訪れていた。
D宅	夫婦で対応し、炭鉱勤務時に購読していた保安協会報や、Dが使用していた救護服などを提示して説明していた。
E宅	友人の元炭鉱マンを呼び、写真を見せながら二人で対応していた。清水沢発電所とズリ山の間地点に位置するため、来訪者の集中が激しく、Eの判断で入場制限をかけるほどであった。

来訪者は1～6名程度のグループが主であり、数グループが集中すると、E宅以外でも家に上がることができなくなる一方で、無人の時間が生じることもあった。居住者は状況に応じ話を早めに切り上げたり、来訪者が少ないときは詳しく説明するなど臨機応変に対応していた。

80名もの来訪者が地域内を移動していた様子には、地域住民も驚いた様子であった。浴場にポスターを掲示していたため、ある程度認知度があったと推測されるが、「何をやっているのか」といった質問や、日曜日が休業の浴場を臨時営業したため、「今日はお風呂に入れるのか」といった質問が寄せられた。しかし住民とトラブルになるようなことはなく、小学生の子供たちが集会所に遊びに来るなど、おおむね友好的な雰囲気の中で行われた。

5-3-2 D宅の状況

居住者と参加者がどのような交流をしているかを把握するため、D宅にてビデオカメラを設置し、撮影を行った。その内容をテキスト化し、滞在時間や発話の頻度、内容などについて分析を行っ

た。

撮影時間は開始から2時間で、訪れたのは、9グループ19名(男性10名・女性9名)である。グループの構成人数の最少は1名、最多は6名であった。撮影開始から19分後に最初のグループが訪れてからは、来訪者が途絶えることはなかったため、最も集中していた時間帯と考えられる。一度に最も多くの人数が滞在していたのは、5グループ10名であった。

各来訪者をグループごとにア～ケまでの名称をつけ、発話があった者が複数いた場合、識別のために数字を付加し、発話頻度を示したものを表 5-4に示す。

表 5-4 D 宅での発話頻度

ビデオカメラの撮影内容から筆者作成

参加者	男女別	発話総数(回)	滞在時間(分)	発話頻度
D 本人	男	191		1.61
D 妻	女	67		0.56
(ア①)	女	7	4	1.75
(ア②)	男	1	4	0.25
(ア③)	女	0	4	0
(イ①)	男	74	60	1.23
(イ②)	女	44	60	0.73
(ウ①)	男	2	28	0.07
(ウ②)	女	0	28	0
(エ①)	男	21	24	0.88
(エ②)	男	10	24	0.42
(エ③)	女	1	24	0.04
(エ④)	女	0	24	0
(エ⑤)	男	0	24	0
(エ⑥)	女	0	24	0
(オ)	男	8	33	0.24
(カ)	女	19	24	0.79
(キ)	男	0	16	0
(ク①)	男	2	9	0.22
(ク②)	女	2	9	0.22
(ケ)	男	43	26～	1.65

■ D妻より発話頻度が高い参加者

滞在時間⁸は最長で(イ)グループの60分、最短は(ア)の4分であり、平均滞在時間は24.9分。(ア)は(イ)の訪問と同時に退出した。次のグループの来訪をきっかけに退出した同様の例がそのほかに1回あった。

発言者は子供2名を除く17名中13名(男性8名・女性5名)である。1分間あたりの発話頻度(発話

⁸ 撮影の都合上、途中までしか様子が収録されていなかったため、最後に滞在していたケの最終的な滞在時間や正確な発話頻度は不明だが、極めて主体的に参加していたため、考察に含めた。

総数/滞在時間)を見ると、居住者であるDは1.60回、D妻は0.56回であった。妻も会話に加わっていたが、来訪者に接待をするため席を外すこともあり、平均すると発言頻度はそれほど多くない。従って、D夫妻と発言頻度が同程度(D妻より頻度が高い)であれば、主体的に会話に参加していたと判断できる。この条件に当てはまるのは17名中6名であり、約3分の2の参加者は、他の人の発言に耳を傾けることが中心であったと言える。

積極的に会話に参加したのは(ア①)・(イ①)・(イ②)、(エ①)・(カ)、(ケ)で、男性3名・女性3名である。内容は、Dの経歴についてが最も多く、D宅の間取り・建築年についてや、入居率など市営住宅の話、Dが経験した事故の話についてなどが多かった。新しいグループが訪れると、経歴についてほぼ一通りの質問をされるので、Dの説明も洗練されていった。D宅は今回の公開宅で唯一の2階建て縦割り住宅(2階は非公開)であるが、それについての質問は少なく、会話が深まるのは、炭鉱についての内容が中心であった。



図 5-4 D 宅の様子

ビデオカメラの映像を画像化して抜粋

60分滞在した(イ)グループの会話展開を見てみると、冒頭は住宅の話やDの経歴から導入し、その後資料を見ながら清水沢、夕張の炭鉱についての質疑になり、当時の生活や炭鉱事故の話に展開していくような流れであった。(イ)グループ自身が持ち合わせている事前知識と、Dとの会話により深まった知識などを用い、会話の終盤では入坑風景や保安の仕事など、かなり具体的な会話になっていった。また、写真や資料によって会話の内容が深まる効果がみられた。退出の際には「ずっとここにしようかな」と発言するなど、非常に満足した様子を示していた。

そのほかの発言者では、江別市の王子製紙発電所社員の子でであったという(カ)が、社宅で育った自身の記憶と北炭社宅を比較して、話題提起を行ったり、Dが所属していた三菱鉱業関連会社に、現在勤務している若い参加者の(エ②)がおり、「〇〇さんは知ってる？」と共通の知人の話をしていた。なお事後のDへのインタビューでは、江別の火力発電所については知らなかったと述べ、

「一生懸命石炭を掘って出す仕事だったけど、井の中の蛙。どういう風に使用されてるとかは(知らなかった)。」と、自らにとっても新たな知識を得る場となったと述べ、この場から双方向的な対話が発生した様子がみられた。

一方で、発言が少ない人は、住宅についての質問が多かった。発言が少ないのでDから「炭鉱はわからないでしょ?」「ここへんは初めてですか?」などと話しかけた人もいた。しかし炭鉱についての知識がないので質問しづらいという理由のほかにも、前の訪問宅ですでに基本的なレクチャーを受けてきているため、特に質問がないということも考えられる。他の参加者が中心となっている会話に耳を傾け、最後の退出間際にD宅の特徴を聞いて帰った人もいた。

以上をまとめると、居住者と積極的に会話をしていたのは3分の1程度の参加者のみで、炭鉱に興味を持っていたり、同種の産業に縁が深いなどの背景を持ち、ある程度炭鉱に関する知識を有している人々であった。これらの人々にとって居住者と対話を行うという今回の形態は、非常に満足いくものであったと言える。

一方、残りの3分の2の参加者は、滞在時間が長くても発言がほとんどなかった。これらの人々が満足している様子は判断できなかった。

5-4 参加者の意識変化

5-4-1 基本属性の把握

前節では、会話を積極的に行っている参加者とそうではない参加者の違いが確認できた。そこで参加者を対象にしたアンケート⁹により、このような対話を通じた交流に対し、どのような意識を抱いているかについて考察する。なお総回答数は51通で、回収率は64%であった。

まずアンケートに回答した参加者像を概括すると、夫婦やカップル、大学の授業で訪れた学生などが目立った。男女比はほぼ同数で、幅広い年齢層が参加していた。8割の人が札幌圏からの参加者であるが、道外からの参加も2名あった。

空知で石炭が採掘されていたことを知らないまま参加した人が4名おり、うち2名は授業の一環で参加した大学生だった。

催事を知った媒体は、男性はインターネットが多く、女性は口コミが多かった。50歳代以上は新聞を見たという人も多かった。

オープンハウスに参加した目的への回答で最も多かったのは、「炭鉱の記憶(炭鉱遺産)に興味があった」が33件(65%)であるが、3分の2以上は複合的な要因を挙げている。「炭鉱の記憶(炭鉱遺産)に興味があった」と回答した男女比は、ほぼ同じであった¹⁰。

5-4-2 感想の分析・考察

参加した感想の分析より、このような対話を通じた交流への意識や満足度、リピーターの可能性などを考察する。

参加した感想として、「お金を払っても参加したい」と回答したのは22名(45%)であり、半数近くの人がリピーターとなる可能性を示唆している。「無料であればまた見学したい」8名(16%)と「別の場

⁹ アンケート票は空知支庁が作成した。参加者に受付でアンケートを配布し、終了時に回収箱にて回収された。そのデータ提供を受け、独自の分析を行った。

本論文中で使用了のは以下の部分である。全文は資料④を参照のこと。

1 空知で石炭が採掘されていた(一部露天掘による採炭は稼働中)ことをご存知でしたか。

3 オープンハウスを何で知りましたか。

4 オープンハウスに参加した目的は何ですか。

5 参加した感想を教えてください。

7 夕張市清水沢地区の印象について自由にお書きください。(見学前・見学後)

回答者の基本属性は以下の通り。

■性別: 男性 24 名(55%)女性 20 名(45%)

■年齢比: 10 歳代 1 名(2%)、20 歳代 15 名(34%)、30 歳代 8 名(18%)、40 歳代 6 名(14%)、50 歳代 10 名(23%)、60 歳代以上 4 名(9%)

■居住地: 夕張市 3 名(7%)、札幌圏(札幌、小樽、江別)35名(81%)、空知支庁管内3名(7%)、道外2名(5%)

¹⁰ なお参加者全体では女性の総数は少ないものの、アンケート回答者においてはほとんど男女間や世代間の意識差は見られなかった。これまで炭鉱遺産観光のターゲットとして考えられてきたのは、中高年の男性や一部のマニア層であったが、炭鉱遺産に興味をもつ女性の存在をクローズアップすることで、新たな展開の可能性が示唆される。

所であればまた参加したい」17名(35%)は、当地域で同様の形式をとった場合、参加する可能性が低いと考えられるが、「1回見学すればよいと思った」と回答したのは2名(4%)のみである。よって、多くの参加者が、このような対話を通じた交流に意義を感じていると言える。

参加費の希望額を平均すると1,205円である。最高金額は5,000円で、今回と同じ500円を希望した人は7名(32%)であった。このことから、参加費以上の価値を感じている人が多いといえる。

さらに感想に関する自由記述内容から、プラスの感情と受け取れるものとマイナスの感情と受け取れるものに分類した。プラスの印象を述べているのは19名おり、高齢者の行動力や地域の結束力・人の暖かさなどコミュニティの力を評価する記述、住宅の内部の見学や当時の話を聞くなど貴重な体験ができたとする記述、かつての暮らしや炭鉱独自の制度など新しい知識を得ることができたとする記述などがあつた。

マイナスの感情を記述していた9名のうち5名は新聞をみて参加した人で、移動手段の充実やわかりやすいマップ、ガイドによる案内などを求める記述をしていた。これは新聞の限られた紙面では、催事の趣旨がうまく伝わらず、充実した観光を期待して訪問したものと思われる。そのほかは食事をできる場所が少ないことや、多様な施設の公開を求める記述などがあつた。

これらのことから、ほとんどの参加者はこのような対話による交流に意義を感じ、半数近くの人はい再び訪れて今回以上の対価を支払ってよいと感じていることが明らかとなった。

5-4-3 清水沢地区の印象の変化

清水沢地区の印象について、見学前後それぞれについて自由記述により尋ね、感想と同様、プラスの印象と受け取れるものとマイナスの印象と受け取れるものに分類した。

見学前の印象は、プラス印象が4名(11%)に対し、マイナス印象29名(83%)であった。マイナスの感情には「知らなかった」や「想像もできなかった」というような、清水沢地区に対する事前の関心の低さも含めている。

しかし見学後では数値がほぼ逆転し、プラス印象が29名(83%)、マイナス印象5名(14%)となっている。これをクロス集計したものが表 5-5である。

表 5-5 清水沢地区の印象の変化

参加者アンケート結果から筆者作成

見学後 見学前	プラス印象	マイナス印象	空欄 ¹¹	総計
プラス印象	1	2	1	4
マイナス印象	26	3		29
空欄	2			2
総計	29	5	1	35

見学前にマイナス印象を抱いていた29名のうち、見学後に26名(90%)がプラスに転じている。前述の関心の低さだけでなく、破綻の暗いイメージや、炭鉱閉山により人がいない、建物が古いなどの寂れたイメージを抱いていたが、見学後には「思ったより明るかった」「人がたくさんいて温かかった」「建物がきれいだった」などの好印象に変化した。一方でマイナス印象のままの人は、催事の企画の不備の批判やまちの美観の問題(公園の清掃やパチンコ店など)を指摘した。

見学前にプラス印象であった4名のうち2名は、マイナスに転じている。これは「スピーカーがうるさい」「色々な施設の見学を期待したが見学できるところが少ない」という意見であった。特に後者は企画そのものが参加者に取り期待はずれであったことへの落胆が表れている。ただし、見学後にマイナス印象を表した5名のうち3名は次回「お金を払っても参加したい」としている。まちの美観の問題などは、今後地域住民を巻き込んだ観光展開が進めば、克服可能であると考えられる。

これらのことから、7割以上の人が、催事前後で地域への印象が好転したことが明らかとなった。一部、期待していた内容と異なる内容であったことでマイナスの印象を受けた参加者もいたが、ほとんどの参加者はこのような対話による交流に意義を感じ、半数近くの人には再び訪れて今回以上の対価を支払ってよいと感じていることが明らかとなった。

前節では3分の2の人がほとんど発言せず、満足度が得られたかどうか疑問であったが、本節においては、現地で居住者との対話を通じて交流を行うという今回の形態は、参加者側からは好評であったと言え、清水沢地区の観光まちづくりにとって、好影響を与える可能性が明らかとなった。

¹¹ どちらも空欄であったのは、分析の対象外とした。

5-5 催事による居住者の意識変化

5-5-1 分析方法

本催事で行われる対話を通じた交流により、居住者にはどのような変化をもたらしたかを考察することで、本催事の効果の検証を行う。

調査方法は、筆者が行った催事前・後それぞれ1回ずつのインタビュー調査である。催事前には個人の経歴・催事についての反応・清水沢地区への思い等について、催事後には催事についての感想・清水沢地区への思い等、事前に設定した質問に基づき行った。

居住者への事前インタビューは、2008年10月7日(火)・14日(火)の二日に分け、居住者の自宅で各1時間ほど行い、居住者の妻が同席した場合もあった。項目は以下の通りである。

表 5-6 催事前居住者インタビュー項目

1 個人の経歴 ¹²
・プロフィール(年齢、出身、職歴、閉山後何をしてきたか)
・炭鉱での職務経歴
2 現在の状況
・地域活動への参加状況(町内会活動やボランティア・趣味など)
・行動範囲(外部とのかかわりの有無)
3 自宅について
・現在の住居への入居年
・自宅の特徴(構造・特徴・リフォームしたところ)
4 事業の予想
・今回のイベントの依頼を受けて、どう思ったか
5 地区評価
・地域資源としての炭鉱遺産(炭鉱時代からの生活・施設等にどんな価値があると思うか)
・観光資源としての炭鉱遺産(炭鉱遺産に来訪者が興味を持ってやってくると思うか)
・自地区の評価(「清水沢地区は一言で言えばどのような街ですか。」)

事後インタビューは、2008年10月20日(月)、同様に各45分間ほど行った。項目は以下の通りである。

¹² 個人史の聞き取りにより、個人に内在する記憶や生活文化の収集・分析が可能である。しかし今回は、プロフィール部分のみ参照することにする。

表 5-7 催事後居住者インタビュー項目

<p>1 催事の感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加者が自宅を見て、どのような感想をもっていたか ・参加者の印象
<p>2 外部との交流に関して</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外部の人と交流することで、何か発見はあったか。 ・話をするうちに何か思い出したことはあったか
<p>3 地区評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後地域のために何かやろうと思ったか。何ができそうか ・清水沢地区に、客が来ると思うか

事前に設定した質問は、こちらが質問する前に居住者がその内容について語った場合は、改めて質問することを行わなかった。また、一つ一つの質問に対して明確な回答を求めるのではなく、あらかじめ用意した質問からの逸脱や、論旨の矛盾なども許容した上で、回答者の意図を包括的に汲み取り、分析に活かした。

分析方法は、西條(2007)で採用されている「構造構成的質的研究法(SCQRM)」¹³を参考にし、表 5-8の手続きを取った。同書では、本論文と同様、複数名へのインタビュー結果を理論モデル化しており、発言者の意図をできるだけ客観的に把握するために有用な方法だと考える。

表 5-8 インタビューの分析方法

筆者作成

テキスト分析	居住者の発言をテキスト化し、発言の中からキーセンテンスを抽出、発言のまとまりをグルーピングしたものに対し、概念名を付与
分析ワークシート作成	これらの概念をさらにグルーピングしたものを上位概念とし、定義づけ、ヴァリエーションの収集を行う。
理論モデル作成	上位概念間の関係を整理し、理論モデル化

個人の理論モデルを作成後、再び分析ワークシート作成に立ち返り、全体としてのモデル作成を行うことで、個人の感情の動きを精緻に捉えた理論モデル作成を目指した。

居住者5名の反応の変化を催事前後で比較し、清水沢地区にてこのようなイベントを行うことの

¹³ 「構造構成的質的研究法(Structure-Construction Qualitative Research Method: SCQRM)」は、西條が体系化した質的研究のメタ理論である。インタビュー内容から、発言者が意図する概念を抽出・整理し、理論モデルを作成する。インタビューなどの質的データの分析の際、解釈の根拠を示しながら、解釈を導き出すプロセスを示すことで、反証可能性を残す。西條(2007)に詳しい。なお本論文での分析方法の流れは、資料⑤に示した。

意義の検証を行う。

5-5-2 催事前の居住者の反応

参加者への感情

賛成の感情をプラス、反対の感情をマイナスと表現すると、第一声では「いいんじゃないか」「なんとなくわかる」という肯定感や「何を見るんだろう」という戸惑い感を口にし、マイナスの感情を表に出さなかった。しかし、会話が進むうちに、炭鉱時代からの地域の変容ぶりに落胆するのではないかと憂慮する気持ちである「期待はずれを憂慮」や、多少興味があるくらいでは理解できないという、自身へのプライドなどの「疑念・反発心」という、プラスマイナスゼロないしマイナスの感情レベルを表す人がいた。

「期待はずれを憂慮」(感情レベルプラスマイナスゼロ)

・興味があるから来たいんじゃないかと思うけど、興味はずれじゃないかなと思うんだけど。今の炭鉱の生活ぶりは昔と違って。昔ね、ここの夕張にいて札幌とかに行ってみると人は、(まちの様子が)変わってるから。(C)

「疑念・反発心」(感情レベルマイナス)

・聞くことがあるか？というのを聞きたい。興味があると言ったって、何を読んできて僕らにお話をするかわかんないけど、聞きようがないんじゃないの。どういことを聞いていいのかわからないんじゃないか。昔のことをわかってくるならいいけど、なんもわからないで来たら、無理じゃないか。勉強してくるなら、話題はもってますから。体験上。それに対してのお答えはできます。(B)

・どうなんでしょうね。来る人の質。どういう関心を持ってくるのかなあ。ただ珍しいから行ってみるかという気持ちで来るのか。それともいまこういう価値があるのかないのかっていうのか、そういう分析は私ではできないですね。してもらいたいですね。(E)

地域に対する発言内容

「現在の住みよさ」と「過去へのプライド」という、相反する意識に区分され、発言者も明確に分類することができた。

「現在の住みよさ」グループは、A・C・Dである。イベントで参加者が来訪することについて、それほど積極的に歓迎しているわけではないが、拒否反応も起こしていない。

炭鉱の社宅群が集落の基礎になっている自地区について、付き合いが長く居心地がよい、交通の便がよいという長所だけでなく、集まりが悪いなどの短所も挙げた上で評価している。炭鉱遺産についても、一定の評価をし、保存したい気持ちを表現している。

・これからできるわけじゃないから、できれば残しておいた方が、本当は。これから若い人たちの世代に、ああこんなのあったんだとなるんだけど。(D)

3名に共通するのは、地域での住み心地に満足し、質素でも充実した生活を送れるという気持ちであり、根底に流れている感情であると推測できる。

・地道に暮らしていれば、年金が多いから。札幌なんかより。(A)

・妹方が札幌でこいっていうけど、出て行くつもりないし・・・住みいい。(C)

・いいよね。もう慣れたせいか。悪いとは思わない。(D)

「過去へのプライド」グループは、B・Eである。感情レベルはマイナスであるが、「本当に来るのかな(E)」「勉強してくるなら、話題はもってますから。体験上。それに対してのお答えはできます。(B)」など、決して来訪者の拒否を意味しているのではないことが看取できる。2名からは炭鉱時代の技術や過去の栄華が強調され、それを忠実かつ容易に再現し来訪者に見せることが現状では不可能であることから、ただ興味があるだけで参加することへの警鐘という旨の発言につながったと考えられる。すなわち 過去に対するプライドが、2名の発言の根拠となる感情であると推測できる。

「技術への誇り」

・偉い人はすごい頭を持っていた。たいしたもんですよ。コストを下げて発電量を多く、各炭鉱に送るって言うのを本当に真剣に考えて。誇りに思ってますよ。(B)

「技術継承ができないことへの憂い」

・今(炭鉱を)開発するとなってもだれも技術者がいない。(B)

「過去の栄華」

・いい。昔は良かった。(中略)今は、無理。昔は炭鉱がある時代は結構よかったですよ。北町(市街)最高おもしろかった。酒飲んだり、飲み屋100軒あったんだよ。(中略)いまなら誰一人こないでしょ。人がいないもの、来たってしょうがないでしょ。(B)

・今になってみれば暗い。若いころだったらいい街だったよ。飲み屋はたくさんあったし、とにかく炭鉱時代は、酒飲むのが楽しみに働くようなものだもん。(E)

「過去再現性の乏しさ」

・残ってるもんじゃ、あんまり価値ないんでないかい?(興味を持ってくるか?)来ても設備がほとんどない。〇〇でした。跡ですよ」ぐらいしかわかんないでしょ。建物見なきゃわかんない。(B)

Eからはこの点での発言はなかったが、石炭博物館での説明員を10年間務めた経験を持ち、保管している説明員の資料をインタビュー時に提示するなど、設備の整った空間での解説に意義を感じている様子であった¹⁴。

・「これは昭和20年代の状況であって、その後30年代になったらぜんぜん変わってくるんだよ」って言うけど、まあ理解できないだろうね。見てないんだから。むしろ博物館連れて行って説明した方がいいんだけど。10年間やったからね。そうすれば結構質問出の。賃金いくらくらいもらってるんだとか、いろんな質問出の。(事後インタビューにおけるEの発言)

地域への感情と、「参加者への感情レベル」は一致している。すなわち、最終的な感情レベルがプラスマイナスゼロの人は「現在の住みよさ」の感情を表すグループ(A・C・D)であり、感情レベルがマイナスに位置する人は「過去へのプライド」の感情を表すグループ(B・E)である。

以上、催事前の感情についてまとめると、居住者は積極的には歓迎の意は示しておらず、感情レベルでは、プラスマイナスゼロからマイナスに位置している。これは、居住者が地域に対して抱いている、「現在の住みよさ」もしくは、「過去へのプライド」という、相反する二つの意識に規定されていると言える¹⁵。

¹⁴ この点は、事後インタビューで具体的に言及された。

¹⁵ Aは現在の町内会長であり、催事への協力要請を受け、各居住者に参加を呼びかけた人物である。その発言

これらをまとめたのが、図 5-5である。

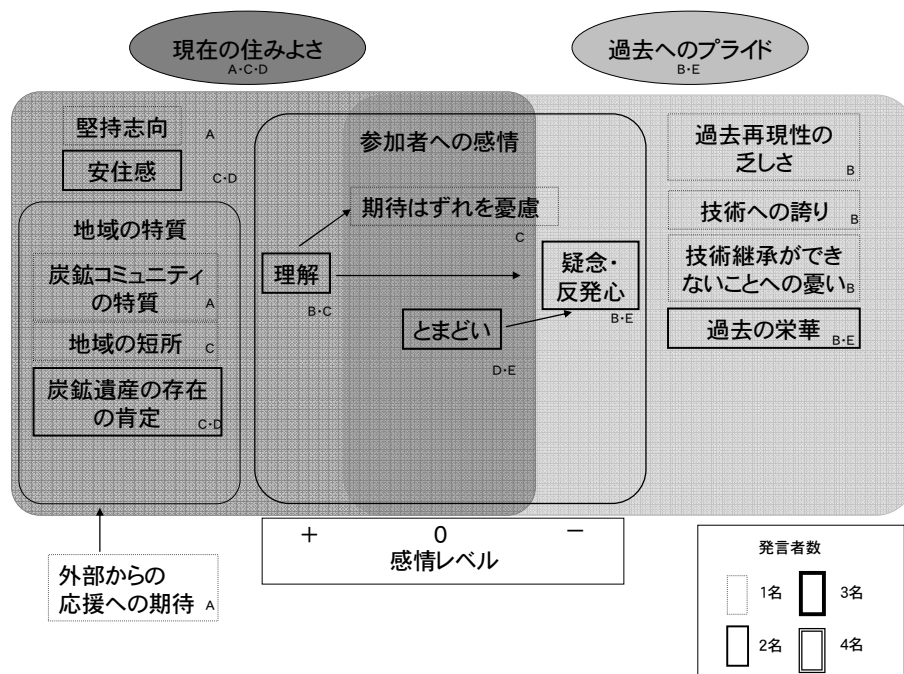


図 5-5 催事前の居住者の反応理論モデル

筆者作成

5-5-3 催事後の居住者の反応

催事後の反応は、生活風景の公開に対し好反応を見せる参加者や、炭鉱に対する知識の有無に関わらず一生懸命に話を聞こうとする参加者との交流に、おおむねよい印象を持っていた。

- ・印象は悪くありませんでしたよ。お客さんにほめられたですしね。(略)そのような意識ないのに。「明るいですね」とか言ってたけどね。うちから行った人はみんな頭下げてたよ。(C)
- ・そんなことまで知らなかったなということもいってた人もいたな。(略)心強く思う。炭鉱が薄れていってるのに、本当にあったことをおっしゃってますから。(D)
- ・遊びなのかなあ。なんか趣味あるのかなあ。だけど一生懸命質問したり、一緒に聞いたりしていたけどね。(E)

一方で、一部の目的のない参加者には一様に戸惑いを見せた。しかし人数の多さには驚いており、なんらかの興味が注がれていることは感じている様子である。

- ・炭鉱知らないから聞き方もわかなんない。(A)
- ・炭鉱のことをよく聞くのが趣旨だったんだろうけど、あまりそういう人もいないし。(B)
- ・あまり興味もない人…本人たちは何を見にきたんだろうね。うちの中を見る人もいるし、見ないでここに座って話をする人も多いし。どっちかっていうと、ここに座って話をする人が多い。(E)

ただしBは、催事当日に自宅屋根の塗り替え作業を行っており、時間をかけて参加者と接するこ

はリーダーとしての立場に基づき、他の居住者とは一線を画した内容である部分が多かった。それは例えば、参加者への感情をはっきりと示さなかったり、外部への視線を向けていたりなどに表れている。

とができなかったため、他の居住者に比べ深い感想をもたなかった。

・(感想は)別に特にないですよ。「広いですね」(と言われたので)、「役宅、炭鉱で言えば職員の偉い人たちが住んでいたんですよ」という説明はしました。(B)

・忙しくてたからか。最後のほう若い人きただけで。申し訳ないなあ。(B)

しかし最後に話したという若者グループとは、趣味のカラオケの話などを中心に会話が盛り上がり、炭鉱の話はほとんどなかったものの、非常に満足していた。

・若い人とこんな風に話すこともないし。帰りには、「うちは若い人こないし、今日はよかったよ」って言って。(B)

このことにより、Bにおいても交流が充足したものになれば、催事への満足度も高まるのではないかと言える。すなわち、濃密なコミュニケーションと参加者の主体性が、ホスト側である居住者の満足に結びつくと考えられる。

一方で、対応できる人数への限界や、プライベートの公開や周囲の視線などに対する心理的負担が催事の課題として浮き彫りになった。

・ここにどんどん入ってきてても大変だから、ストップしてもらって、「どこか見てもらいながら、他のところね。また来てください」って話を。(E)

・実際ね、こういうところ住んで、見せるの勇気いるんだよね。(C)

事後インタビューにおいて、事前インタビューの際に触れられなかった事項について、いくつか新たに言及されていた。炭鉱に関わる言及は、「炭鉱マンとしての誇り」「炭鉱の技術・記憶を継承したい」の二点である。事前にこれらについて言及していたのはBのみであったが、事後にはBも含む4名が、それぞれの得意分野における炭鉱の記憶・炭鉱技術継承への願望・責任感に言及していた。いずれも参加者との関わりの文脈中で言及されており、参加者との交流がこのような感情を呼び起こす契機となったと言える。

・この服をね。まだ持ってたんだよ。おれ。救護隊のね。投げようかなと思ったけど、「着てみて」って言われて着てみたら写真撮られた(笑い)モデルになったみたい。ばちばち写されて。(D)

・こんな風にしゃべったのは初めて。講師じゃないからね。でも覚えてることはしゃべりますよ。坑内のことは忘れないからね。(C)

・炭鉱ってどういふところかって初歩的なことを教えればよかったかもしれないね。教えてやるっちゃうのも一つの方法かな。(E)

また、「地域・資源の新たな評価」「地域の発展への思い」という地域に対するプラスの感情も言及された。事前インタビューでは、現在の地域への評価として利便性やコミュニティの充実に起因する安住感が指摘されていたが、事後インタビューでは水や景色など、外部への提示を意識した地域資源の価値評価がされた。

・ズリ山から清陵町、南清水沢、宮前、清水沢・・・上がったことある？あれ見たらぜんぜん違うんだよね。(E)

・「夕張なにがいいですか？」って言われたから、「水がおいしいですよ」って言ったら、「ああお水ねえ〜」って。確かに水おいしいですよ。この間おたく(筆者)に「清水沢何がおいしいですか？」って聞かれたときにまさか水がいいって言えないもんだから、難しいって思ったけど、確かに水はいいですよ。(C)

・夕張は水が日本一おいしい。(A)

・大分前から思ってるんだけど、独居老人が住んでいるうちに「今日元気だよ」という札を玄関に貼るのをやろうかと思ってるの。町内会の福祉(担当の役員を)やってるから。(B)

これらのような、事前インタビューでは言及されなかった事項の言及は、外部の参加者との交流が影響した可能性が高いと指摘できる。

しかし、催事を踏まえて自らの地域資源の価値を認識できたかどうかを問う、「清水沢に客が来ると思うか」という質問に対しては、事前インタビューで「現在の住みよさ」グループであったA・C・Dは、生活の利便さは評価しつつも、清水沢が観光対象になることはなく、一般的な来訪者が訪れることもないという従前の考え方が変化しなかった。

- ・ぼくらがこういう離れたところに住んでるから。(A)
- ・(清水沢に客が来ると思うか?)清水沢に?ないでしょ。夕張にっならあるでしょうけど。(C)
- ・やっぱり夕張。便利は(清水沢地区が)一番いいと思うんだけどね。(D)

一方、「過去へのプライド」グループのB・Eの2名は、劇的な変化とまでは言えないものの、少なくとも過去へのプライドを強調していた事前インタビュー時よりは態度を軟化させ、現在の地域価値を認識するような発言をしていた。

- ・何回かイベントやったら?わざわざってのが(わざわざ来るのかどうかという問題が)あるのかもしれないね。近くの人だったら来るかもしれないけど。(略)ズリ山から清陵町・南清水沢、宮前、清水沢・・・上がったことある?あれ見たらぜんぜん違うんだよね。(E)
- ・少し来てお金をおとしてもらいたいよね。夕張はただ関心もってね。(破綻したからという関心を持ってくる人ばかりだ)(B)

またこの2名はいずれも、自分が貢献できる活動について言及していた。Bの独居老人対策の取り組みについては、以前から温めていたもので、催事により考え方が変わったことを示すものではないが、この催事が何らかの心境の変化を引き起こす契機となり、これらの発言に至った可能性はある。

事後インタビューについてまとめると、濃密なコミュニケーションと参加者の主体性が、双方の満足に関連すると考えられた。また炭鉱と地域に関わるプラス感情が新たに言及され、これは外部の参加者との交流が影響した可能性が高いと指摘できる。このように本催事が居住者にとり、何らかの心境の変化を引き起こす契機となった可能性が高い。

これらを図 5-6の理論モデルに整理した。

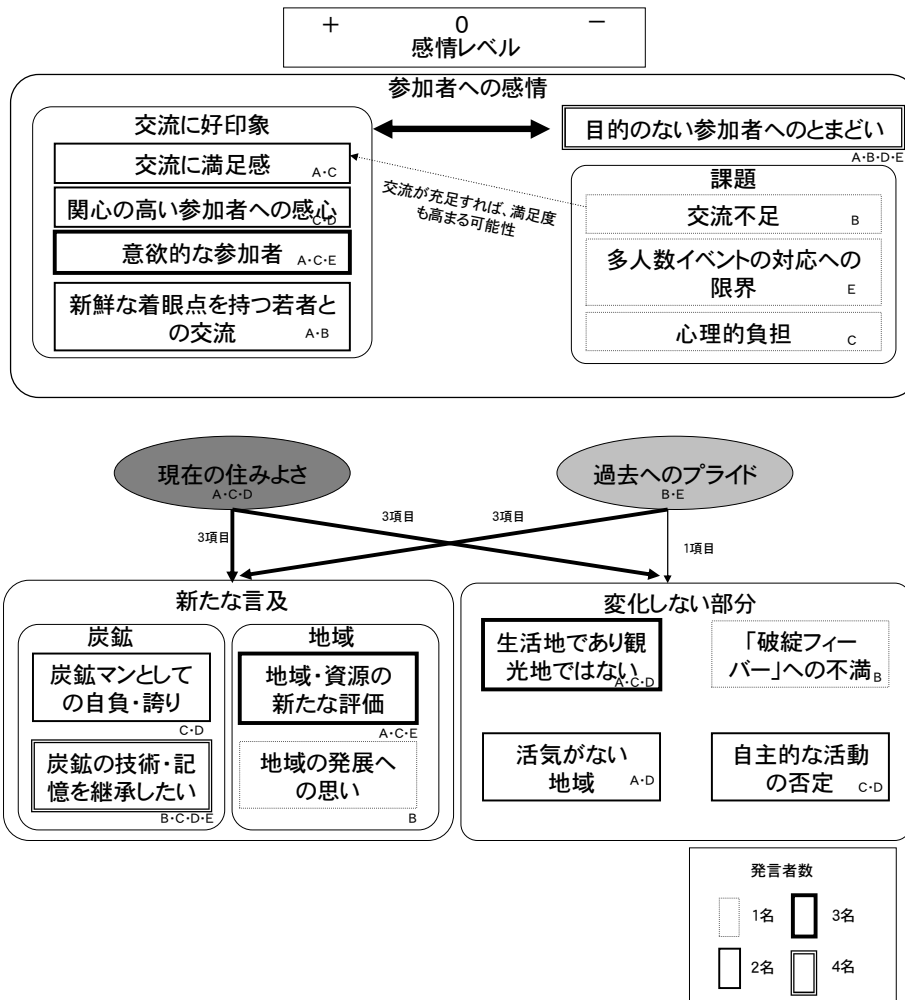


図 5-6 催事前の居住者の反応理論モデル

筆者作成

5-6 まとめ

本章では、前章で示された清水沢地区の有力な地域資源の一つである炭鉱住宅と、そこに住む元炭鉱マンの生活を手がかりとした、「炭鉱住宅オープンハウス」を行った。これにより、炭鉱住宅での対話を通じて地域内外の双方向的な交流を深化させていくという手法が、清水沢地区での新たな観光展開にどのように貢献するかについて、催事の参加者と自宅公開に応じた居住者の意識変化を中心に考察した。

D宅の状況では、3分の2の人がほとんど発言せず、満足度が得られたかどうか疑問であったが、参加者へのアンケート調査においては、多くの人が現地で居住者との対話を通じて交流を行うという今回の形態に意義を感じていることが明らかとなった。

公開に応じた居住者における事前のインタビューでは、地域に対する感情のスタンスにより、「現在の住みよさ」と「過去へのプライド」グループに分類でき、多数の参加者が訪れることに対し、歓迎と疑念という異なった反応を見せた。

催事後の感想は、おおむね参加者との交流に満足しており、特に主体性のある参加者との濃密なコミュニケーションが、居住者の満足に関連すると考えられた。また事前のインタビューでは現れなかった、炭鉱と地域に関わるプラスの感情について新たに言及された。このように居住者と外部の参加者との交流が、各人の何らかの心境変化の引き金となる可能性が高い。

以上のことから、このような交流形態が、清水沢地区の観光まちづくりにとって、好影響を与える可能性が示唆された。

これらの知見を勘案すると、現実の生活空間を公開し、住民と外部の人たちが交流を行うという趣旨においては、受動姿勢の参加者を広く受け入れることは困難である。従って、炭鉱に興味を持っていたり、産業に関わった経験があるなどにより、基礎的な素養を有し、主体的に居住者と交流を行おうとする姿勢を持つ人々を対象にすべきである。翻せば、炭鉱や清水沢地域について興味を抱き始めた、まだ話を聴いているだけで満足感が得られる、基礎知識レベルの来訪者が地域のことを学習できるような、ワンストップ型の施設があれば望ましい。

また前章で課題として挙げられた、不可視資源の活用ならびに自文化の価値認識についても今回のオープンハウスにより、解決の糸口が見出された。個人に内在する記憶や生活文化など不可視の資源は、居住者が記憶を語ることで収集できる可能性が示唆された。また居住者において、来訪者との交流が、自文化の価値認識につながる可能性も示唆された。またこれらは、エコミュージアムの「記憶の収集」や「来訪者に差し出す鏡」といった概念に合致すると言える。

これらを総合すると、清水沢地区において、エコミュージアムの手法の導入は、炭鉱遺産を地域資源として認識する観光まちづくり活動の端緒として妥当性を持つと言える。

そこで、第4章・第5章において、清水沢地区という現実社会での活動と考察により得た、これらの知見に即し、現実的かつ妥当性のあるエコミュージアム構想を提案する。

第6章 清水沢地区におけるエコミュージアムの構想

6-1 本計画の位置づけ

夕張市の財政再建計画には観光事業の見直しが明記されており、観光施設を指定管理者に運営委託する以外の観光への関与は、事実上皆無である。また財政再建団体である以上、新たな観光方策の打ち出しに財政的な支援が期待できる状況ではない。従って今後の夕張市には、①適正な規模で、②地域資源を活用し、③住民が主体となった観光への転換が求められ、これを体現するには、炭鉱遺産を活用したエコミュージアムによる観光まちづくりに可能性を見出すことが妥当である。

その適地として、大型の炭鉱関連施設や炭鉱時代から変わらぬ生活風景が残存している清水沢地区に着目した。しかし、住民の間に炭鉱遺産を地域資源として保存・活用する意識が見られないという課題があった。

そこで、タウンウォッチングとオープンハウスという二つの催事を通じ、地域住民が炭鉱遺産を地域資源と認識するための可能性を検証した。これにより地域資源の発掘や地域内外の視点の差の明確化という成果のほかに、地域内外との双方向的な交流が、住民の自発的な観光まちづくり活動への行動の端緒になりうるという知見が得られた。

これらを手がかりに、より具体的な実現への道筋として、清水沢地区におけるエコミュージアム構想を計画し、提案する。この構想は、夕張市が現在に至るまで行ってきた観光への反省を踏まえているため、これまでの夕張市で展開されてきた観光とは対照的な内容を有している。

表 6-1 これまでの夕張観光と清水沢エコミュージアムの関係

	これまでの夕張観光	清水沢エコミュージアム
観光のスタイル	ハコモノに頼り、観光客数の増加を追求する、従来型観光のスタンダード	地域に埋もれているものを掘り起こす、新しい観光のスタンダード
主体のスタイル	行政・外部資が独走	住民と外部との持続可能な交流による協働
観光資源	スキーや遊園地など流行の追従	地域の歴史的な文脈に依拠した地域資源
観光客	ボリューム重視、集客が必要	ボリュームよりクオリティ
対象地域	隆北地区の炭鉱跡地	炭鉱遺産が点在し、場の力が発揮できる、清水沢地区
炭鉱遺産を扱う博物館機能	石炭博物館への収蔵	地域の記憶の中で、住民やファンらによって研究・保存・活用されるエコミュージアム

また清水沢地区は、空知支庁の構想において重要拠点として位置づけられており、上位計画との整合性という観点からも、妥当性がある。

6-2 基本構想

6-2-1 計画の目標

第5章のインタビューにおいて、「年金が多いので贅沢をしなければ質素に暮らしていける。」という発言があった。居住者は町内会や趣味サークルを中心に活動しているが、地域内で完結し、これらの活動により外部の人々と接触することはほとんどない。

その一方で、炭鉱の技術や経験など、炭鉱に関わった誇りを後世に伝えたいという潜在的な希望を抱いていることも明らかとなった。社会との関わりにより他人から評価されることで、自らの存在意義が確認でき、生きがいにつながることを期待できる。

この地区の住民の多くにとって炭鉱は、人生の大部分で関わってきた、生きてきた証ともいえる存在である。炭鉱から得た技や炭鉱への思いなどに光を当て、資源として顕在化することができれば、そこから社会との接点が生じる可能性がある。そして外部の人々から評価されることで、社会の中で生きているという実感を確認し、生活にうるおいを感じながら暮らしていくことができると考える。それは炭鉱遺産を活用した、地域内外との双方向的な交流によるエコミュージアム活動に取り組むことで実現可能である。

そこで本計画では、夕張市清水沢地区において、地域に残る「炭鉱の記憶」を「再生」することを通じ、現在の住民の生活の質を漸次的に向上させ、未来にまちの誇りを伝えていき、最終的には「地域が元気になる＝地域再生」ことを目標とする。それは清水沢地区においては、地域住民が外部からの多くのファンと共に日常的に活動し、経済的・文化的に生活がうるおっている状態を指す。

6-2-2 コンセプト

この計画の最大のコンセプトは、「石炭の歴史村」との対抗軸を打ち出し、夕張観光の新しいスタンダードとして提示することである。

これまでの夕張市ないしは北海道のスタンダードであった、マス・ツーリズムに依拠した観光を見直し、住民たちが主体となり、地域に埋もれているものを掘り起こす新しい観光を打ち出し、具体化する。このような観光の概念は、清水沢だけではなく夕張全体、空知全体に拡大していく可能性がある。

このコンセプトのもとに、具体的な指針が導き出される。

● 地域のストーリーを解きほぐす

清水沢地区は石炭があったからこそ成り立った地域であり、石炭にまつわるさまざまな繋がりが凝縮された地域である。埋没している資源や不可視の資源を、可視化・顕在化することで、それらが意味に沿って解きほぐされ、炭鉱遺産の価値を表現する。

● 交流を引き起こすスイッチとなる

始めから住民主体で活動するのが難しい清水沢地区においては、エコミュージアムが外部

のファンと地域住民との双方向的な交流を引き起こすスイッチとしての役割を担う。

●プロセス重視

結果で差別化するのではなく、住民と外部の参加者が交流することで作り上げられていく、途中過程にも価値を求める。

なおエコミュージアムの名称は、対象とする「炭鉱の記憶」とその手段としての「再生」がわかりやすく表現できるものがよいと考えるが、以下では仮称として「清水沢エコミュージアム」とする。

6-2-3 計画期間

計画期間は、2009(平成21)から2019(平成31)年までの10年間で妥当であると考えます。

第一の理由は、2009年からの空知支庁の長期計画との整合性である。清水沢地区は空知支庁の政策における重要拠点であり、本計画は支庁の計画と連動して進められることで、他の拠点との創発効果が期待できる。

第二の理由は、炭鉱閉山からの時間経過により、炭鉱の記憶を直接語ることのできる元炭鉱マンの確保が困難になることである。すでに炭鉱閉山から清水沢炭鉱は1980年、夕張新鉱は1982年に閉山しており、当時50歳であった人でも既に77歳となっている。さらに10年後には87歳になり、それ以降は炭鉱第一世代である人材を確保することが困難になると予想される。早急に計画に着手し、炭鉱の記憶の保存と語り手となる次世代の育成を行うことが急務である。

第三の理由は、活動の担い手となる地域住民の人口減少と高齢化が進行していることである。2008年12月公開の人口推計によると、夕張市の人口は2010年に11,351人(対2005年-12.7%)、2020年には8,515人(同-34.5%)と推計されている。一方高齢化率は2010年43.4%、2020年には49.7%と予測されている¹。現状においても活動の中心は高齢者を想定しているが、第二の理由同様、次世代にバトンタッチしていかなければ、10年後にはこのような地域活動を発動させるだけの体力が、地域に残存していないことが推測される。

¹ 国立社会保障・人口問題研究所(2008)「日本の市区町村別将来推計人口(平成20年12月推計)」(最終検索2009年1月29日)

6-3 エコミュージアムの構成

6-3-1 エコミュージアムの空間的構造

まず4章で選定された資源を地域内外との関連性において整理すると、清水沢地区の形成に関連し、石炭を頂点とした3つのテーマに集約できる。

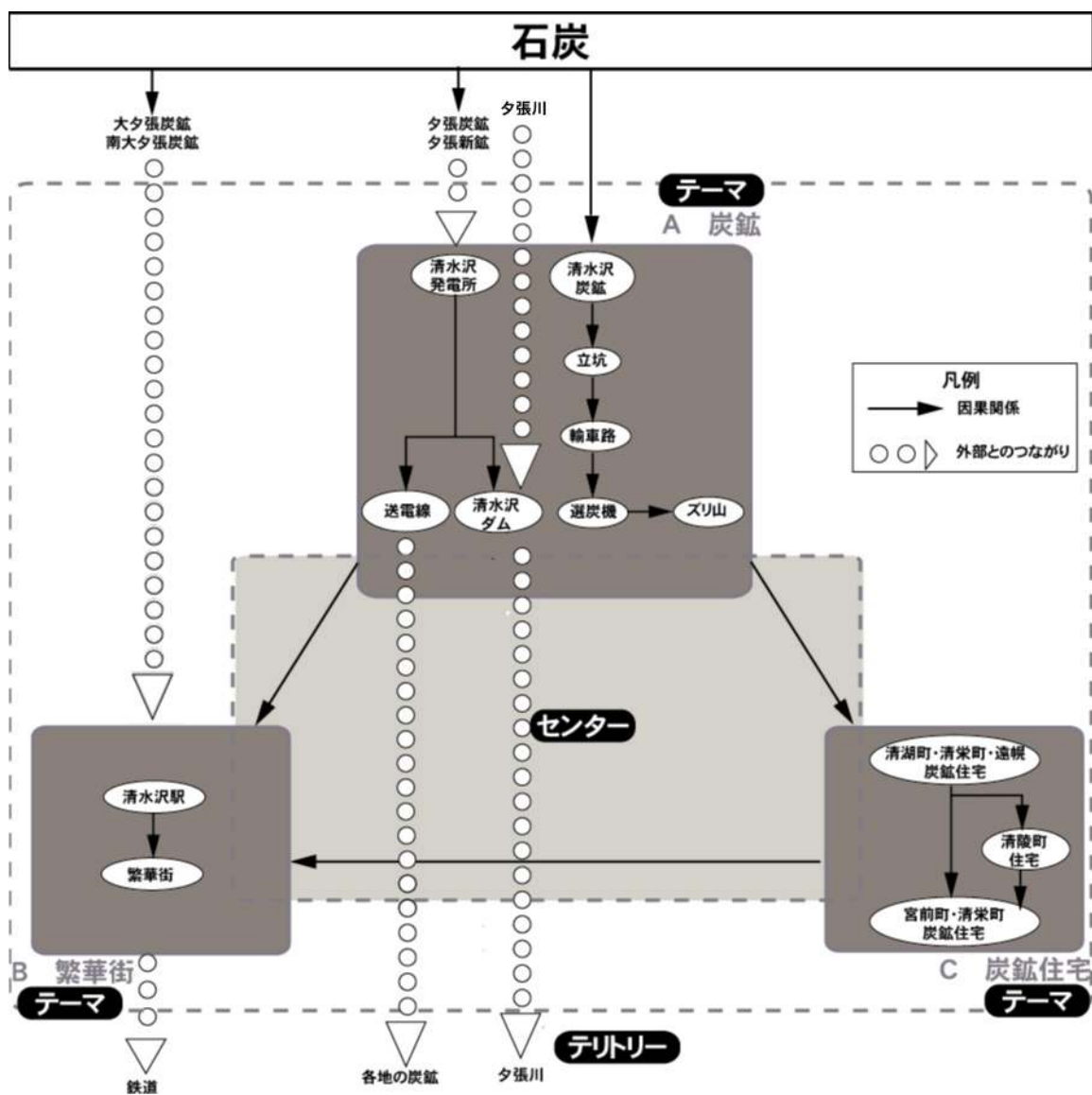


図 6-1 清水沢地区の地域資源関連図

筆者作成

「A 炭鉱」のテーマ

清水沢炭鉱で採掘された石炭は、選炭機にかけられ、出荷する石炭は鉄道により地域外へ、不要な石炭(ズリ)はズリ山に運ばれる。

一方、炭鉱に送る電気を発電するために発電所とダムが造られた。それによりダム湖が出現し、夕張川の景観が形成された。ダムと発電所により作られた電気は、各地の炭鉱に送られた。

「B 繁華街」のテーマ

各地に炭鉱が成立したことで、交通の結節点として成長した。さらに大夕張方面への玄関としての役割と、地元の清水沢鉱・夕張新鉱により発展し、にぎわいは 1980 年代まで続いた。

「C 炭鉱住宅」のテーマ

炭鉱が成立したことにより各地に住宅が建てられ、いくつかの集約を経て現在の場所に移動した。浴場・集会所を中心とした炭鉱コミュニティは今も継続している。

これらのテーマが持つ歴史的関連性を活かした、清水沢エコミュージアムの構造を設計する。

テリトリー

図 6-1が示す、石炭を頂点とする 3 つのテーマの展開範囲(破線で囲まれた部分)をテリトリーとする。

テーマ

図 6-1で示した相互に関連性を持つ資源群を、エコミュージアムのサテライトや発見の小径の集合体という位置づけの「3つのテーマ」として設定し、背後関係や因果関係が極力明快になるようにする²。

「炭鉱のテーマ」炭鉱があったからこそ生まれた、石炭と電気のダイナミックな流れをトレイルで結ぶ。

「繁華街のテーマ」外部との玄関口としての繁栄の面影を伝える。

「炭鉱住宅のテーマ」炭鉱住宅の多様性と濃密な炭鉱住宅でのコミュニティを描く。

表 6-2 各テーマを構成する要素

筆者作成

	サテライト	トレイル
炭鉱のテーマ	清水沢炭鉱事務所・立坑・輸車路・選炭機・ズリ山・清水沢発電所・ダム	サテライトを繋ぐ「石炭の流れ」
繁華街のテーマ	清水沢駅・街並み	(鉄道による外部とのつながり)
炭鉱住宅のテーマ	浴場・集会所・炭鉱住宅	(炭鉱時代の生活風景を垣間見る路地裏)

² 今回は対象外とするが、以下のネットワーク化も将来的に推進されるべきである。
各地の炭鉱を結ぶ「電気」、以前住宅があった遠幌地区・清湖町、夕張新鉱の住宅が現在も数多く残る清陵町地区も対象とする「炭鉱住宅」清湖町の「自然」、炭鉱住宅や観光施設の跡地の活用等。

テーマに求められる機能は、地域住民や来訪者が現地で直接地域資源に接することで、現在の清水沢地区の姿を形成させたストーリーを体感できるようにすることである。さらに、単に現地保存するだけではなく、これらの資源を活用する取り組みが行われる。

表 6-2は、各テーマを構成する要素である。「炭鉱のテーマ」では、各サテライトを結ぶ「石炭の流れ」に沿って歩くことで、清水沢地区における石炭の生産や発電の流れを知ることができる。また、「繁華街のテーマ」「炭鉱住宅のテーマ」では、サテライトは面的に広がっており、推奨する散策路などはない。各テーマのシンボルとしての役割を持つ、テーマセンター(各テーマにおける中核施設)を設置し、テーマ内を説明する展示だけではなく、そこを活動拠点とし地域住民との交流を通じて、各テーマの理解を促す。ただし「繁華街のテーマ」では、鉄道による外部とのつながりを、「炭鉱住宅のテーマ」では、端正に整えられた花壇や家庭菜園、漬物干しの風景など、炭鉱時代の生活風景を垣間見る路地裏をめぐる散策路を、トレイルとして位置づける。

なお、テーマセンターの場所は、現時点で地域の拠点であり、ある程度のスペースを確保することができる、宮前浴場・集会所(炭鉱住宅のテーマ)、清水沢駅(繁華街のテーマ)を候補とする。

センター(中核施設)

清水沢エコミュージアムに求められるのは、複雑な因果関係を持つこれらの資源の混乱を解きほぐし、わかりやすく構造化することである。従ってこれらのテーマを結節する地点に、エコミュージアムの中核施設(センター)を設置し、地域を貫く石炭や各テーマとの関連性の解説等を行う。

センターは、外部からの来訪者に対してはワンストップ的なビジター施設として、地域住民に対しては活動の統括的な拠点として利用される。また、研究・広報・情報・教育・サービスなど、内外の人々を引き合わせるファシリテーターとしての役割や事務局機能などもセンターで担う。

センター設置場所は以下の特徴を揃えた、旧清水沢郵便局(現在の読売新聞夕張支局)付近が最適であると考えられる。

- ・アクセス道路である国道 452 号線に接している
- ・テリトリーを俯瞰できる小高い丘の谷口部分に接している
- ・繁華街と炭鉱住宅、石炭が出荷されていく出口という、3つのテーマの接点である

なお、既存の施設の再利用を基本路線とするが、将来的に外部の人々が立ち寄りやすい「道の駅」的な機能や、夕張市の市街地集約も視野に入れ、市民が気軽に集まることのできる機能も担うことが理想である。

以上を踏まえた、清水沢エコミュージアムの展開図を図 6-2に示す。

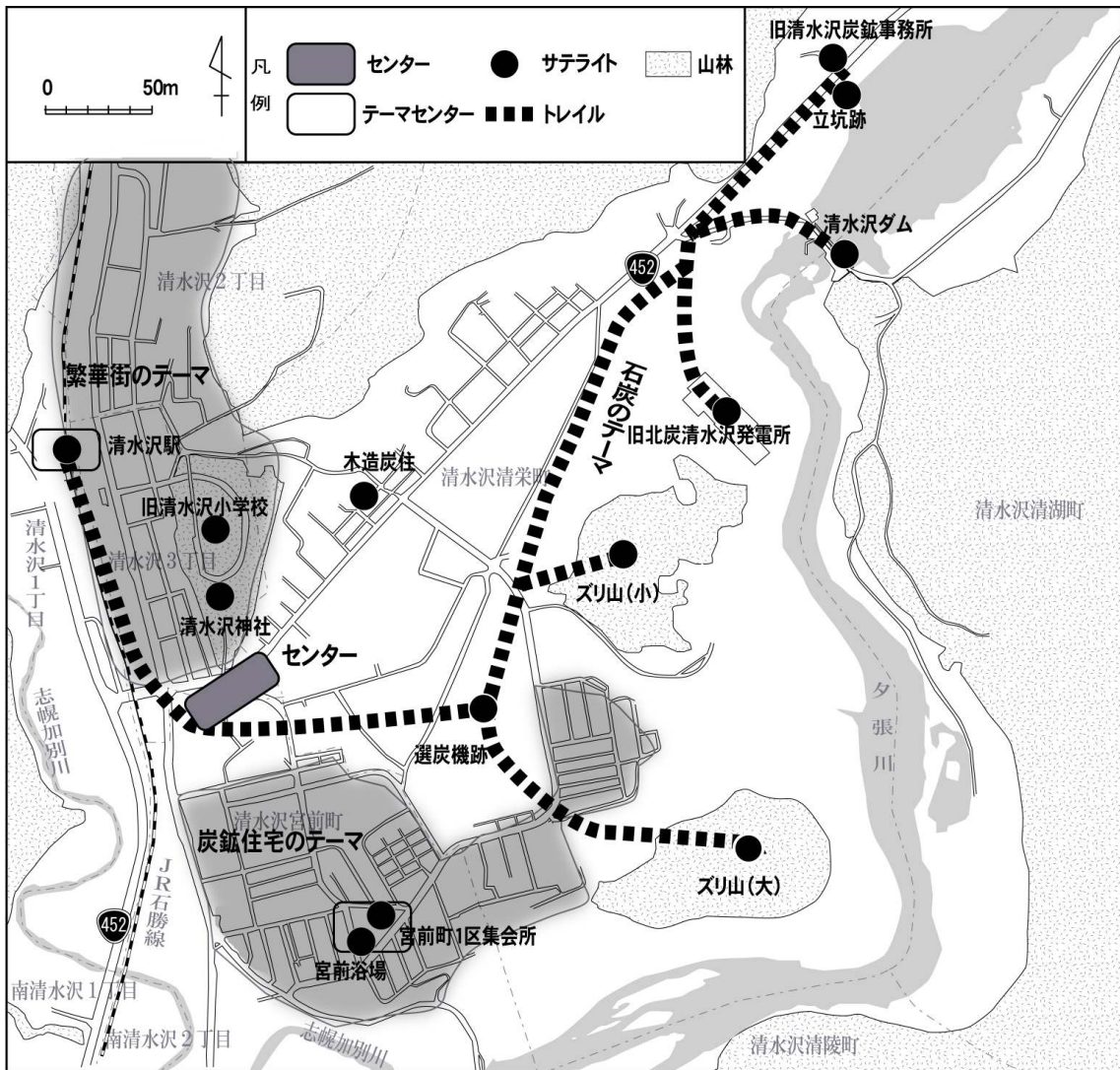


図 6-2 清水沢エコミュージアム展開図

筆者作成

さらに現状との比較を交えつつ、清水沢エコミュージアムを空間的に構成する諸要素の概念を
図 6-3に示し、清水沢エコミュージアムの構造イメージを解説する。

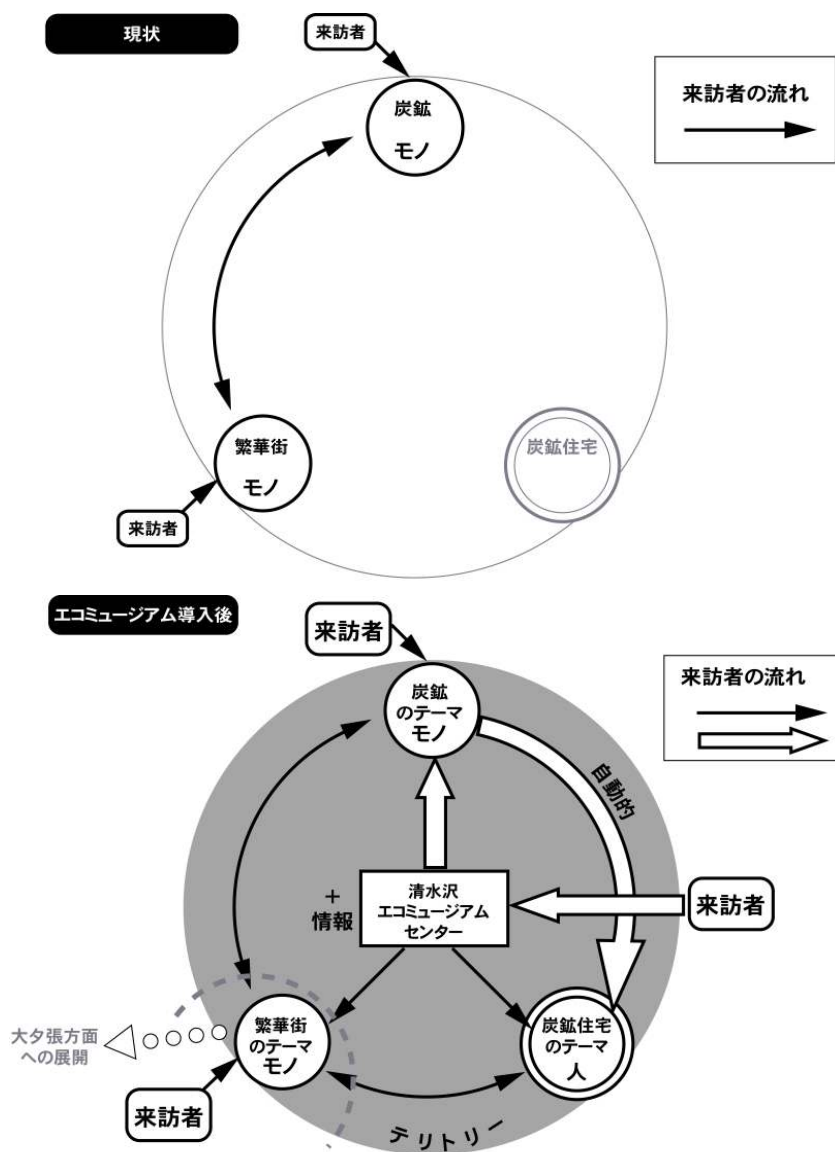


図 6-3 清水沢エコミュージアムの概念図

筆者作成

エコミュージアム導入前の現時点では、来訪者がほとんどなく、炭鉱や繁華街の遺産など、「モノ」に関心を持って来る来訪者がごく少数いる程度である。エリア相互間の回遊も考えられるが、炭鉱住宅地区はこれらとは完全に切り離されており、こちらを目指してくる来訪者はいない。

エコミュージアム導入後も、来訪者が直接「炭鉱のテーマ」や「繁華街のテーマ」を訪問することが考えられるが、大多数の来訪者は、より理解を深めるために、「エコミュージアムセンター」を訪れる。そこで石炭を頂点とした各テーマの関連性の情報や知識を入手し、テリトリー内に出発する。

石炭を頂点とした地域資源の関連性を最も動的に感じることができる「炭鉱のテーマ」では、

清水沢鉱事務所や発電所など、石炭利用の流れに沿って見学することができる。石炭の流れは選炭機で出荷されるものとズリとして積み上げられるものに分岐することを知ると、眼前のズリ山の意味が理解されると同時に、この石炭の流れを支えていた炭鉱マンが今でも多く暮らす、空間的に隣接している「炭鉱住宅のテーマ」へと、自動的に誘導される。

「炭鉱住宅のテーマ」では、テーマセンターである宮前浴場・集会所がインターフェイスとなり、多くの住民と接することができる。来訪者は地域の人々そのものが地域資源であることに気づき、徐々にこの地域のファンになっていく。つまり「炭鉱住宅のテーマ」は、来訪者と地域住民による次の展開の素地となる潜在的な機能を備えている。

一方、「繁華街のテーマ」は、清水沢と大夕張で働く人々たちに支えられて発展したという二面性を持つ地区である。

エコミュージアムセンターで得た情報、それぞれのテーマをまわって得られた知識などが有機的に結合し、石炭に支えられた清水沢地区の繁栄を理解することができるようになる。一方で、大夕張方面への訴求力を持つテーマとしての活用性を、別途検討しなければならない。

このように清水沢エコミュージアムのセンターと各テーマには、独立した機能を持たせるものの、石炭を頂点とした関連性において、来訪者の一定方向の動線が想定されている。特にセンターは外部へ開かれているものの、むしろ、地域住民との交流を指向しないマス・ツーリストが、生活の場である炭鉱住宅街に直接流入しないための砦としての機能も持っている。

6-3-2 エコミュージアムにおける「炭鉱の記憶」再生機能

それぞれのテーマにおいて、どのように地域に残る「炭鉱の記憶」の「再生」に取り組むかについては、エコミュージアムの3機能(研究・保存・活用³)を当地域において解釈し、以下の3つの方法を設定した。

記憶の再生(Research)

生活や技術の記憶を後世に残すために掘り起こすこと。エコミュージアム活動の基礎的な作業となる。

例:聞き取り調査、資料収集、タウンウォッチング、炭鉱技術の保存

過去の姿の再生(Recall)

現存していない(失われた)かつての地域の姿を生き生きと想起できるように、異なるメディアで具現化すること。

³ 研究・保存・展示とする定義もあるが、現地保存を原則とするエコミュージアムならびに炭鉱遺産を基盤とする清水沢地区の性質を考慮すると、保存と展示は同時に行われる場合が極めて多いと考える。よって本エコミュージアム計画では、フランスのエコミュージアム憲章においては明文化されている「活用」を重視し、展示は保存や活用に通じる概念として、あえて明文化しないことにする。

例：写真展示、模型作成、昔の味を再現、インタープリテーション、痕跡の保存、花壇・家庭菜園作り

資源の再生(Reuse)

現存しているが活用されていない資源を本来の意味・価値で再利用すること、もしくは今日的な新たな価値を付与して活性化すること。(現代的目的への転用(Renovate)も含む)

例：ズリ山登山道の設置、遺産の保存活動、空き家(現住も含め)炭住の公開、空き店舗の再利用、駅待合室のコミュニティスペース化、技術の活用

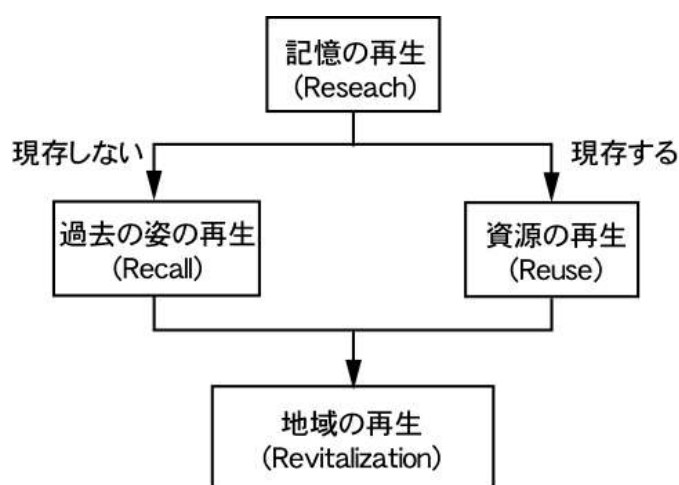


図 6-4 「4つの再生」の関係

筆者作成

これらの「再生」の関連性を示したのが図 6-4である。この図が示すように、記憶の掘り起こしにより再生された手がかりを元に、過去の姿や非利用資源を再生する活動が展開されていく。これらの活動が集積した結果、「地域の再生(Revitalization)衰退する地域を元気にすること」が達成される。これら清水沢エコミュージアムで図られる「再生」を総称して「4つの再生」とする。

6-4 実現までのプロセス

清水沢エコミュージアムの実現に向け、現時点で課題として認識される要素の検討を行う。

まず、活動の主体性に関わる問題である。現状の地域は、町内会活動が盛んな地域であるが、視野が固定化し、地域資源の価値に着目して活用するという動きはみられない。一方で、外部の現状は、炭鉱遺産に対する着目はあっても、地域の内部に踏み込む人々はいない。

しかし第4・5章では、地域内外の双方向的な交流により、地域住民が地域資源の価値を認識しただけでなく、社会の中で自らの価値を確認し、生きがいにつながる可能性を指摘できた。また地域住民という潜在的な資源により、外部の人々が「ファン」化する素地があり、活動のパートナーとなることが期待できる。

従って、清水沢エコミュージアムにおいては、住民だけではなく、外部で清水沢地区に知的関心を寄せる人々の関与も積極的に活用すべきである。現時点で地域住民よりも地域資源の価値を幅広く認識している、外部からの積極的評価を受けることが、地域住民の意識の変革をもたらしていく可能性がある。

ただし外部の人々が一方的に押し寄せることがないよう、地域内外を繋ぐ役割を担う組織が介入し、調整を図る必要がある。

さらに、エコミュージアムの「研究」機能も確保する必要がある。日本の近代化を支えた日本有数の炭鉱都市であったと言う歴史的な文脈から、それを生かしたエコミュージアムづくりには、地域に活動が根付き人材が育成されるまでの最低限の期間は、専門家の助言を導入する必要性がある。「住民すべてが学芸員」という考えが理想といえるが、エコミュージアム発祥のフランスなどでは専門の学芸員を配置して行われており、ある程度の学術性・専門性を担保するのが望ましい。その強力なサポート役としてNPO法人炭鉱の記憶推進事業団をはじめ、内外とのパイプや専門的知識を有する広域NPOなどの組織が関与することが必要となる。

以上をまとめると、清水沢エコミュージアムは、清水沢地区に知的関心を寄せる外部の人々が、積極的に地域に関わることから起動し、段階的に発展させていくことが想定される。初期段階の研究機能を含むエコミュージアムの運営は、広域NPOなどにより進められる。エコミュージアムにより、外部の人々が住民とのつながりを深めていくうちに、住民の間にも地域資源を活用したまちづくりの機運が高まり、将来的には地域住民と外部のファンがパートナーとして共に運営することを目指す。このことを図 6-5に、具体的なプロセスと活動のイメージを表 6-3に示す。

現時点では、活動が緒についたばかりで、地域住民の主体性が低く、広がりは見られていない。まずキーパーソンを内外に数名確保するなど、人々の交流を地道かつ継続的に進めていくことが肝要である。

また、炭鉱住宅など炭鉱関連施設の多くが夕張市に移管されたことを踏まえると、財政再建期間とはいえ夕張市の関与や、炭鉱の記憶を手がかりに地域振興を進める空知支庁など、行政の協力も不可欠である。

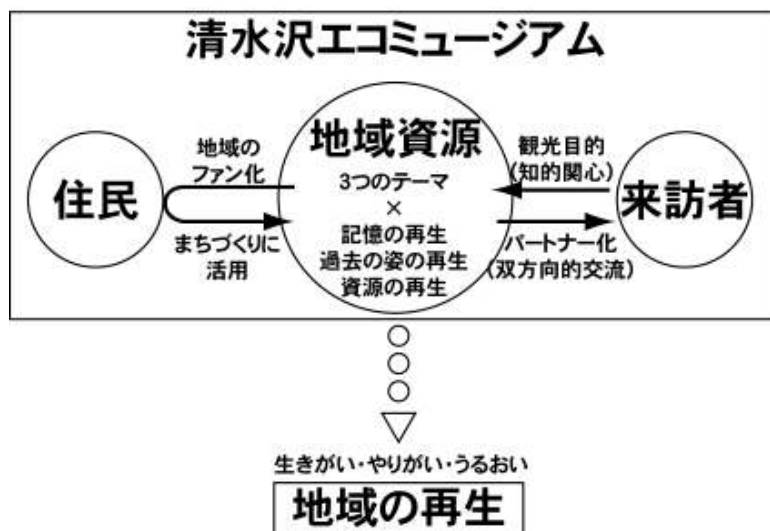


図 6-5 来訪者の関与から起動するエコミュージアム実現のプロセス

筆者作成

表 6-3 清水沢エコミュージアム実現のプロセスと活動イメージ

筆者作成

	第1期(1~3年)	第2期(4~6年)	第3期(6年~)	10年後の目標
目標の達成度	可能な部分から着手 新たな現実の創出による住民の理解	それぞれの「再生」の意味を意識した活動に発展	各テーマにおいてそれぞれの「再生」活動が恒常的に取り組まれている	地域の再生 経済的・文化的にうおいのある生活の達成
運営主体	広域NPOによる始動 追従的な住民の参画	広域NPO 地域に関わる内外の人々	住民・外部の人々からなる運営組織	住民・外部の人々からなる運営組織(最低限の収益性を追求するNPOや会社組織) 常勤・専任のスタッフを配置可能
活動主体	外部の人が主体 専門家 協力する少数の住民	住民の数人・ファン化した来訪者がコアメンバー化 それ以外の住民の協力が得られるようになる	多数の住民と増加した外部ファン	住民が日常的に活動に参加し、外部の多くのファンを獲得している
活動の活発度	イベントなどが単発的に行われている状態。	地域内からボトムアップされた活動が始まる 来訪者への単発的な対応が可能	地域活動が活発化、偶発的な来訪者への案内も可能	恒常的な活動
施設整備の達成度	各資源の整備	テーマごとの整備 センターの整備(拠点の確保)	テーマ間の連結	他地域との連携
訪問者数	イベント以外の訪問者はほぼなし	断続的に少数の訪問者がある状態	恒常的に少数の来訪者がある状態	1日あたりの訪問者数の増加

6-5 清水沢エコミュージアム構想の妥当性

本章では清水沢エコミュージアムの構想を行った。この構想が、本論文の目的である地域の再生に寄与するために、現実的な妥当性があるかを検討する。

エコミュージアムの基本条件である、「研究・保存・活用」という博物館機能は、「4つの再生」に付与された。

記憶の再生(Research)は、エコミュージアム活動の基礎となる研究機能を担保している。過去の姿の再生(Recall)と資源の再生(Reuse)は、保存・活用機能を担保し、その総体として地域の再生(Revitalization)を図るエコミュージアムが構成される。

「遺産を現地で保存」という形態的特徴は、「3つのテーマ」に付与された。

テーマは、相互に背後関係や因果関係を持つ資源群を明快化した集合体である。地域住民や来訪者が、現地で直接地域資源に接することで、現在の清水沢地区の姿を形成させたストーリーが体感できる。

さらに「地域住民の主体性」という手法的特徴については、本エコミュージアムでは、住民と外部の人々との交流により始動することから、将来はこの発展形として、地域住民と外部のファンによる運営を目指す。

これまでの夕張市における観光の反省を踏まえて計画された本エコミュージアム構想は、以上のことから地域再生に寄与する観光まちづくりを具現化するエコミュージアムとしての要件を具備していると言える。

また、すでに現実社会にて萌芽しつつある、地域内外の人々の双方向的な交流を題材としていることから、具体化の意義と実現可能性を有すると考える。

第7章 結論

7-1 本論文の総括

本論文では夕張市を事例に、疲弊した地域の再生に寄与する観光のあり方を追求することを研究目的とした。地域資源を活かした住民主体の観光が求められる夕張市清水沢地区において、地域内外の人々を対象とした二つの催事への参与観察の結果から、地域の再生に寄与する観光のあり方に対する示唆を得た。これらの知見をもとに、現実社会へのフィードバックとして、「清水沢エコミュージアム」の構想を提案した。

以下に各章のまとめを示す。

第1章では、本論文の目的や、事例となる夕張市の概要について述べた。

第2章では、本論文の論拠となる観光研究の系譜や、観光まちづくりとそれに類似する概念について整理した。

現在の観光は、環境・経済・社会文化など、あらゆる側面における持続可能性を考慮した「新しい観光」が主流となりつつある。夕張市は、日本有数の旧炭鉱都市という歴史的な文脈を踏まえると、新しい観光の理念に基づく「住民主体」「地域資源の活用」「来訪者との交流」を特徴とする「観光まちづくり」の導入が検討されるべきである。その手法として夕張市の場合は、「地域資源の現地保存」「博物館機能」などの特徴を持つエコミュージアムに、地域資源の価値が最大限発揮される可能性を見出すことができるのではないかとした。

第3章では、夕張市の歴史的背景や現状の分析により、今後あるべき観光の方向性を検討した。

夕張市は石炭産業の終焉後、観光への転換を図ったものの、地域の歴史的な文脈を無視した、大規模観光開発に依拠した観光政策が、財政破綻の要因の一つとなったと言える。

近年炭鉱遺産を活かしたまちづくりの展開可能性が注目されているが、夕張市では炭鉱遺産に価値を見出そうとする市民の意識が未成熟であり、地域住民が炭鉱遺産を地域資源と認識するための方策の検討が必要と指摘した。

第4章・第5章では、第3章で示した夕張市における観光のあるべき姿を、催事を通じて具体的に検証し、エコミュージアム構想に資する知見の収集を行った。

第4章では、清水沢地区で行われた地域内外の人々を対象としたタウンウォッチングにより、地域住民が炭鉱遺産を地域資源と認識するために必要な検討を行った。

清水沢地区の地域資源は、炭鉱遺産を中心に認識され、外部参加者は、炭鉱という地域の歴史的な文脈の中に位置づけられる、繁栄した時代の面影を残す文化・生活関連資源、地元住民とのふれあいなどにおいても、地域資源として認識していることが明らかとなった。さらに外部の視点を導入するという手法が、炭鉱遺産に関心を持つ地域内外の人々に訴求し、まちづくり活動に好ましい影響を与える可能性が指摘できた。

第5章では、炭鉱住宅の持つ資源性に着目し、炭鉱住宅での対話を通じて地域内外の双方向的な交流を深化させていくという手法が、清水沢地区での新たな観光展開にどのように貢献するか
の検討を行った。

参加者からは、実際に現地で元炭鉱マンと接することで、これまで地域に対して持っていた認識
が好転した様子が伺え、居住者からは外部の参加者との交流によるプラス面での意識変化が伺え
た。このような居住者と外部の参加者との交流が、双方に何らかの心境変化の引き金となる可能性
が高く、清水沢地区の観光まちづくりにとって、好影響を与える可能性が示唆された。

しかし、来訪者が主体的に居住者と交流を行うには、炭鉱や地域に関する基礎的な素養を持ち
合わせていることが求められる。従って、教育などの機能を含有するエコミュージアムの博物館とし
ての機能が必要とされる。

第6章では、これまでの知見を踏まえ、「清水沢エコミュージアム」の構想を行った。

炭鉱遺産を活用した地域内外の双方向的な交流により、清水沢地区に残る「炭鉱の記憶」を
「再生」することを通じ、住民の生活の質の向上と地域再生とを目標に定め、石炭を頂点とした「3
つのテーマ」と「エコミュージアムセンター」において展開される「4つの再生」を、活動の柱として構
成した。また当初は外部の人々を中心に、地域住民との双方向的な交流を引き起こすことから
徐々にステップアップし、将来的には地域住民と外部のファンによる恒常的な運営を目指すことを
示唆した。

本構想は、これまで夕張市において行われていた観光の対極に位置づけられ、すでに現実社
会にて萌芽しつつある、地域内外の人々の双方向的な交流を題材としていることから、具体化の
意義および実現可能性を有する。

以上のことから本論文の結論を示す。

疲弊した地域の再生に寄与する観光のあり方として、夕張市では、地域資源の価値を最大限に
高めることが可能となるエコミュージアムを、観光まちづくりの手法として導入する意義は十分にあ
ると言える。

本論文で得られた、疲弊地域の観光に必要な要素は、

- 1 地域の歴史的な文脈に位置づけられる地域資源を、地域内外の人々の協働により活用すること
- 2 地域内外の人々の意識変化を引き起こす可能性がある「双方向的交流」により、住民の主体性を高めること
- 3 地域に対する一定の素養を持ち合わせる来訪者の存在。また、それを補うため、来訪者に教育や情報を提供する機能

これらはエコミュージアムの持つ「地域資源の現地保存」「住民主体」「博物館」という3つの特徴
に合致し、エコミュージアムでしか捉えることができないものである。過去の夕張観光の反省に立っ
ても妥当性がある内容であり、これらは観光まちづくりを実現するために、広く一般的な地域で活

用できる知見であると言える。

これらを考慮して構想した「清水沢エコミュージアム」は、炭鉱の歴史的な文脈により形成されてきた地域の価値を、地域内外にわかりやすく提示する。住民のみの組織で活動を行うことが困難でも、外部の人々のリードが端緒となり、地域住民と外部からのファンの協働による活動を生み出すことが可能である。

エコミュージアムで「炭鉱の記憶」の再生に取り組むことにより、住民が地域での生活に生きがいとやりがいを見出すことで、経済的・文化的なうらおいが生まれ、最終的に地域再生に結実する。

観光学の視点からのエコミュージアム論としては、観光まちづくりの一手法としてのエコミュージアムの妥当性について検証することができ、現実社会における地域の再生に寄与する観光のあり方としての実効性への示唆が得られた。これは地域の特性が十分に反映された観光まちづくりへの普遍的な指針として、地域資源の活用度が低い地域において援用できる知見であると言える。

7-2 今後の研究課題

今後の研究課題としては、他の疲弊地域の再生に寄与する観光として、どのような手法が適用されるべきか、体系的に明らかにすることができなかった点が挙げられる。グラウンドワークやナショナル・トラストなどエコミュージアムに類似する概念を、地域において導入する場合どのように選択、あるいは組み合わせればよいか、また同一条件下での手法の比較など、一定の体系化を図る必要がある。

夕張市における観光まちづくり研究の課題としては、炭鉱遺産だけでなく、今日的な夕張市の地域資源である農業や映画・スキーなども組み合わせた検討を行っていく必要がある。また、観光まちづくりの前提として、住民生活のアメニティも考慮しなければならないが、財政再建団体という条件下において、真谷地や南部など人口密度が希薄な集落では、最低限の生活を維持することすら危うい状態に陥っている。外部との交流を核に、安心・安全な暮らしづくりをどのように行うか、検討されなければならない。

さらに、清水沢エコミュージアム構想に関する課題として、徒歩圏外の地域資源、特に清湖町の自然や清陵町の炭鉱住宅群などの組み入れを検討することが挙げられる。また、広域には、大夕張方面との関連や、北炭の重要拠点としての役割を果たした清水沢発電所を中心として、幌内や歌志内など遠隔地とのネットワーク化の可能性も考えられる。しかし、テリトリーが広範囲に及んだ場合、清水沢エコミュージアムで指向した、地域での生活や濃密なコミュニケーションなどが維持可能かなどの問題が発生する。従って、広域エコミュージアムの先進事例を有する欧米の事例との比較などを検討しなければならない。

これらは、観光学の視点からアプローチするエコミュージアム研究として、さまざま地域への援用や、清水沢地区での継続的な参与観察などにより、引き続き行われるべきである。

参考文献・参考資料・参考 URL・初出論文

● 参考文献

- Georges Henri Rivière(1980)「Définition évolutive de l'écumusee」Museum No.148,Unesco.
- 青野豊作(1987)『夕張市長まちおこし奮戦記』PHP 研究所.
- 新井重三(1995)『実践 エコミュージアム入門』牧野出版.
- 新井直樹(2006)「近代化遺産を活用した観光振興とまちづくりー富岡製糸場世界遺産プロジェクトの展開と課題ー」『地域政策研究』(高崎経済大学地域政策学会)第8巻第3号,pp.201- 218.
- 井口貢(2005)『まちづくり・観光と地域文化の創造』,学文社.
- 石川宏之・高見沢実・小林重敬(2007)「地域振興に地域遺産を活かすためのミュージアム活動によるエリアマネジメントに関する研究ー英国におけるアイアンブリッジ溪谷ミュージアム・トラストを事例としてー」都市計画論文集 42-3,pp.883-888.
- 石原照敏・吉兼秀夫・安福恵美子編(2000)『新しい観光と地域社会』古今書院.
- NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団編(2008)「石炭博物館ガイドブック」炭鉱の記憶ブックレット 1.
- 延藤安弘(1990)『まちづくり読本』晶文社
- 大原一興(1999)『エコミュージアムへの旅』鹿島出版会.
- 大原一興(2002)『日本エコミュージアム憲章 2001』作成の経緯」エコミュージアム研究 7, pp46-47.
- 奥敬一・深町加津枝(2003)「森林レクリエーション行動下における景観体験の生起パターン」,日本林學會誌 85(1),pp.63-69.
- 上山輝(1995)「写真投影法を用いた景観の認識過程に関する研究」日本建築学会大会学術梗概 pp.123-124.
- 観光まちづくり研究会編(2002)『新たな観光まちづくりの挑戦』ぎょうせい.
- 布林・グリーン,小倉武一・原慶太郎他訳(1999)『田園景観の保全ー景観生態学、戦略、実践ー』社団法人農山漁村文化協会.
- 古賀誉章、高明彦、宗方淳、小島隆矢、平手小太郎、安岡正人(1999)「キャプション評価法による市民参加型景観調査ー都市景観の認知と評価の構造に関する研究 その1ー」日本建築学会計画系論文集 No.517,pp.79-84.
- 駒木定正(1993)「北海道の住宅形式の変遷過程についてー炭鉱住宅(明治開拓期～昭和20年代)の分析によるー考察」住宅総合研究財団.
- 小松光一編(1999)『エコミュージアム-21 世紀の地域おこし』家の光協会.
- 今尚之(2003)「旧産炭地におけるコミュニティ・ミュージアム活動によるオルタナティブな地域学習の展開」へき地研究 pp.83-92.
- 西條剛央(2007)『ライブ講義・質的研究とは何か (SCQRM ベーシック編)』新曜社xzx.
- 財団法人北海道開発協会(2005)「ゆうばり国際ファンタスティック映画祭と観光によるまちづくり」開発こうほう 505,pp22-24.
- 斎藤亮司・藍澤宏・北島千寿(2001)「農村集落における住民の居住環境評価からみた地域資源認識に関する研究」,農村計画論文集第 3 集,pp.1-6.
- 佐藤真奈美・吉岡宏高(2008)「地域資源としての炭鉱遺産の評価に関する考察ー夕張市清水沢地区でのタウンウォッチングを事例に」日本観光研究学会全国大会学術論文集 23,pp1-4.
- アラン・ジュベール(1996)「フランスから日本へ」エコミュージアム研究 No.1,pp.29-37.
- バーレン L.スミス・ウィリアム R.エディントン,安村克己他訳(1996)『新たな観光のあり方ー観光の発展の将来性と問題点ー』青山社.
- 須田寛(2003)『観光の新分野 産業観光』交通新聞社.
- 須田寛(2005)『産業観光読本』交通新聞社.
- 須田寛(2006)『新しい観光ー産業観光・街道観光・都市観光ー』交通新聞社.
- 須田寛・徳田耕一・安村克己(2002)『新・産業観光論ー近代化産業遺産の活用と「交流の世紀」への歩み』すばる舎.
- 杉本尚次(2000)『世界の野外博物館ー環境との共生をめざしてー』学芸出版社.
- 鈴木真理他(2004)『改訂博物館概論』樹村房.
- 瀬戸口剛(2008)「夕張における公営住宅の集約・再編による都市コンパクト化」都市計画 275,pp.64-68.
- 曾英敏、延藤安弘、森永良丙(2001)「サステナブル・コミュニティの視点からみた高齢者のための団地再生計画

の研究—写真投影法による高根台団地の考察—」日本建築学会計画系論文集 No. 549、pp.95-102.

そらち・炭鉱の記憶推進委員会(2000)「そらち・炭鉱の記憶コミュニティ・ミュージアム基本構想」

そらち・炭鉱の記憶推進委員会(2000)「そらち・炭鉱の記憶一覧」

高橋美寛・白木里恵子・久保勝裕(2007)「北海道の旧産炭地における広域まちづくりの実態に関する研究」日本建築学会北海道支部研究報告集 180、pp.273-280.

田村明(1999)『まちづくりの実践』岩波新書 p28

丹青研究所(2003)『ECOMUSEUM-エコミュージアムの理念と海外事例報告-(第6刷)』丹青研究所.

茶谷幸治(2008)『まち歩きが観光を変える—長崎さるく博プロデューサー・ノート』学芸出版社.

中野萌音・角幸博・小澤丈夫・石本正明・池上重康(2006)「産業遺産の保存活用と空知旧産炭地域」日本建築学会北海道支部研究報告集 79、pp.511-514.

日本エコミュージアム研究会「エコミュージアム研究」1～5,7～.13.(6は欠巻)

日本エコミュージアム研究会編(1997)『エコミュージアム 理念と活動』牧野出版.

日本経済新聞社編(2007)『地方崩壊 再生の道はあるか』日本経済新聞出版社.

日本建築学会編(2004)『まちづくり教科書』第2巻

日本展示学会展示学講座実行委員会編 (2001)『地域博物館への提言—討論・地域文化と博物館—』ぎょうせい.

橋本行史(2007)『改訂版』自治体破たん・「夕張ショック」の本質—財政論・組織論からみた破たん回避策』地方自治ジャーナルブックレット 42, 公人の友社,

長谷政弘編(1997)『観光学辞典』同文館出版.

羽田耕治・丁野朗監修(財団法人日本交通公社編)(2007)「産業観光への取り組み—基本的考え方と国内外主要事例の紹介」財団法人日本交通公社 pp.112-115.

深見聡(2007)『地域コミュニティ再生とエコミュージアム—協働社会のまちづくり論—』青山社.

布施鉄治編(1982)『地域産業変動と階級・階層—炭都・夕張／労働者の生産・労働—生活誌・史』御茶の水書房.

北海道空知支庁(2008)「元気そらち！産炭地域活性化促進事業中間報告書」.

北海道炭礦汽船株式会社(1958)『七十年史』.

ピーター E.マーフィー,大橋泰二訳(1996)『観光のコミュニティ・アプローチ』青山社.

前田勇編(1998)『現代観光学キーワード事典』学文社.

前田勇編(2003)『21世紀の観光学』学文社.

前田勇編(2006)『現代観光総論(第三版)』学文社.

安村克己(2001)『観光—新時代をつくる社会現象—』学文社.

安村克己(2006)『観光まちづくりの力学—観光と地域の社会学的研究—』学文社.

山下克彦・進藤 賢一(1999)「炭産地夕張における地域振興の推移とその課題」札幌大学産研論集 21、pp.345-366.

山田和広(2006)「田園空間整備事業について」エコミュージアム研究 11、pp.6-12.

山村順次(1995)『新観光地理学』大明堂.

夕張市(1981)『改訂増補夕張市史』上巻・下巻.

夕張市教育研究所(1988)「社会科副読本ゆうばり」.

吉岡宏高(1992)『戦後北海道の石炭産業(改訂版)』.

吉岡宏高(2005)『炭鉱遺産でまちづくり—幌内炭鉱の遺産を主題にした「場」のマネジメンター—』富士コンテム.

吉岡宏高(2007)「夕張における石炭産業の歴史と地域変容 夕張市財政破綻を理解するための基礎知識」北海道自治研究 465、pp2-9.

吉岡宏高(2008)「北海道空知旧産炭地域における炭鉱遺産を手がかりにした地域再生」第23回日本観光研究学会全国大会学術論文集 23、pp.5-8.

吉田春生(2003)『エコツーリズムとマス・ツーリズム—現代観光の実像と課題』大明堂.

吉田春生(2006)「産業観光とは何か」地域経済政策研究(鹿児島国際大学)7、pp.57-98.

吉田春生(2006)『観光と地域社会』ミネルヴァ書房.

吉本哲郎(2000)『風に聞け、土に聞け—風と土の地元学』地元学協会事務局.

読売新聞北海道支社夕張支局編(2008)『限界自治夕張検証—女性記者が追った600日』梧桐書院.

余京珍(2003)「日本におけるエコミュージアムの活動に関する分析」日本観光研究学会全国大会研究発表論文集 18、pp.265-268.

余京珍(2004)「日本のエコミュージアムの目的および特徴」日本観光研究学会全国大会研究発表論文集 19,pp.343-344.

鷺田小彌太(2007)『夕張問題』祥伝社新書.

● 参考資料

夕張市統計書(各年版)

資源エネルギー庁(2005)エネルギー白書

夕張市行政区・年度別住民登録人口

国立社会保障・人口問題研究所(2008)「日本の市区町村別将来推計人口(平成20年12月推計)」

● 参考 URL

UNWTO(2004)「Sustainable Development of Tourism Conceptual Definition」

<http://www.world-tourism.org/sustainable/concepts.htm>(最終検索 2009年1月29日)

NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団ホームページ <http://www.soratan.com/>(最終検索 2009年1月29日)

大塚勝海「『地元学』の特徴と背景—水俣における地域再生の取り組み—」<http://kuin.jp/fur/ootuka2-1.htm>
(最終検索 2009年1月29日)

奥敬一・深町加津枝・大住克博(2000)「森林レクリエーション利用者が認識する風景」森林総合研究所報 No.142
<http://ss.ffpri.affrc.go.jp/shoho/n142-20/142-4.htm>(最終検索 2009年1月29日)

観光まちづくり研究会編(2000)『観光まちづくりガイドブック』財団法人アジア太平洋観光交流センター
<http://www.aptec.or.jp/Guidebook.pdf>(最終確認 2009年1月29日)

「観光立国推進基本計画」(観光庁ホームページ)

<http://www.mlit.go.jp/kankocho/kankorikkoku/pdf/kihonkeikaku.pdf>(最終検索 2009年1月29日)

経済産業省「地域活性化のための「近代化産業遺産群33」の公表について」ホームページ

<http://www.meti.go.jp/press/20071130005/isangun.pdf>

国際博物館会議ホームページ「ICOM Statutes」<http://icom.museum/statutes.html>(最終検索 2009年1月29日)

国際博物館会議ホームページ「Development of the Museum Definition according to ICOM Statutes (1946-2001)」http://www.museum.or.jp/icom-J/hist_def_eng.html(最終検索 2009年1月29日)

国土交通省「地域いきいき観光まちづくり-100-」ホームページ

<http://www.mlit.go.jp/sogoseisaku/region/kanko100/pdf/002.pdf>(最終検索 2009年1月29日)

国土交通省 GIS ホームページ「国土情報ウェブマッピングシステム・国土画像情報閲覧機能」

http://w3land.mlit.go.jp/cgi-bin/WebGIS2/WF_AirTop.cgi?DT=n&IT=p(最終検索 2009年1月29日)

国土地理院「電子国土」ポータル <http://portal.cyberjapan.jp/index.html>(最終検索 2009年1月29日)

(財)下川町ふるさと開発振興公社クラスター推進部ウェブサイト

<http://www2.town.shimokawa.hokkaido.jp/cluster/srsa.html>(最終検索 2009年1月29日)

茶谷幸治(2008)観光経済新聞連載「成功する『まち歩き観光』」第2回

「茶谷幸治のホームページ」<http://www.geocities.jp/chatani001/kankokeizai-rensai.doc>(最終検索 2009年1月29日)

内閣府 NPO ホームページ「NPO ポータルサイト」<http://www.npo-homepage.go.jp/portalsite.html>(最終検索 2009年1月29日)

西山徳明(2001)「自律的観光とヘリテージ・ツーリズム」

<http://www.kyushu-id.ac.jp/~nisiyama/keyword/link/text9.pdf>(最終確認 2007年11月9日)

日本エコツーリズム協会ホームページ「エコツーリズムとは」

<http://www.ecotourism.gr.jp/what/>(最終検索 2009年1月29日)

農林水産省ホームページ「田園空間博物館について」

<http://www.maff.go.jp/nouson/nouson/denenukan/about.htm>(最終検索 2009年1月29日)

文化庁国指定文化財データベース <http://www.bunka.go.jp/bsys/index.asp>(最終検索 2009年1月29日)

文化庁登録有形文化財(建造物)ホームページ http://www.bunka.go.jp/bunkazai/shurui/touroku_yukei.html(最終検索 2009年1月29日)

北海道遺産構想推進委員会(2001)「北海道遺産構想の推進について～北海道遺産構想推進委員会検討結果報告～」<http://www.hokkaidoisan.org/files/iinkaihoukoku.pdf>(最終検索 2009 年 1 月 29 日)
北海道開発局まちづくり支援ネットワークホームページ「まちづくりアイデア集」
http://www.hkd.mlit.go.jp/zigyoka/z_jigyou/toshi/machi/idea/01/d_02.html(最終検索 2009 年 1 月 29 日)
文部科学省平成 17 年度社会教育調査 http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/004/h17.htm(最終検索 2009 年 1 月 29 日)
夕張市ホームページ <http://www.city.yubari.lg.jp>(最終検索 2009 年 1 月 29 日)

● 初出論文

佐藤真奈美・吉岡宏高(2008)「地域資源としての炭鉱遺産の評価に関する考察-夕張市清水沢地区でのタウンウォッチングを事例に」日本観光研究学会全国大会学術論文集 23,pp1-4.

謝辞

修士論文を提出するに当たり、本論文の主査である中鉢令兒教授、副査の河本光弘准教授をはじめ、ご指導くださいました札幌国際大学大学院観光学研究科の先生方にお礼を申し上げます。

特に本論文の副査で、私の指導教員である吉岡宏高准教授には、大変お世話になりました。

吉岡先生は、産炭地振興に貢献する研究に取り組みたいという私の考えを汲み取ってくださり、現実の地域活動を通して研究する機会を与えてくださいました。在学中の3年間、逡巡する私を常に温かく見守って下さったのも先生であり、私の研究ならびに本論文は、先生のご指導があつてこそ成し得たものです。

先生には感謝してもし尽くせない思いですが、私自身が今後とも地域活動を通じた研究に携わっていくことで、先生の教えに少しでもお応えできるように努めたいと思います。本当にありがとうございました。

また越塚宗孝教授には、1年次の演習でご指導を頂き、修士論文執筆に当たっても、様々なアドバイスをいただきました。先生のお人柄に惹かれて門を叩いた大学院で直接ご指導いただけたことは、非常にありがたいことでした。ここに深くお礼を申し上げます。

夕張市清水沢宮前町民生委員で、宮前浴場管理人の佐藤咲子氏には、様々な便宜を図っていただいただけでなく、常に私を温かく励ましてくださいました。清水沢宮前町町内会長・松田巖氏をはじめ、吉田正行氏、小西良一氏、樋宮實氏、綿引米雄氏、清水沢清栄町原田正夫氏には、ご自宅の公開・インタビューなどで大変お世話になりました。ここにお名前を挙げさせていただいた方々を含め、清水沢地区の皆様、ならびにタウンウォッチング・オープンハウス参加者の皆様に深くお礼申し上げます。ありがとうございました。

北海道空知支庁地域振興部地域政策課長・石川政宣氏、主査・野村直広氏、夕張市地域再生推進室地域再生グループ・平塚浩一氏をはじめとする地域再生グループの皆様には、二つの催事の実施にあたり、調整に当たってくださるなど、大変お世話になりました。また、NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団副理事長植村真美氏、理事熊谷隆文氏には、活動の場にて貴重な示唆を頂戴しました。さらに、日本観光研究学会での発表を通じ、長崎大学環境科学部深見聡准教授には、修士論文や今後の研究に対しての、温かいアドバイスを頂戴しました。皆様に深くお礼申し上げます。

大学院での3年間をともに学び、励ましあつた学友の皆さんにも感謝申し上げます。1年間の休学を挟んだ分、多くの皆さんと出会い、充実した研究生生活を送ることができました。

最後に、仕事と育児を抱えながら大学院で学ぶことに理解を示し、支えてくれた家族、両親に感謝します。ありがとうございました。

資料編

資料① リヴィエールによる「発展的定義」フランス語原文

Définition évolutive de l'écomusée

Un écomusée est un instrument qu'un pouvoir et une population conçoivent, fabriquent et exploitent ensemble. Ce pouvoir, avec les experts, les facilités, les ressources qu'il fournit. Cette population, selon ses aspirations, ses savoirs, ses facultés d'approche.

Un miroir où cette population se regarde, pour s'y reconnaître, où elle recherche l'explication du territoire auquel elle est attachée, jointe à celle des populations qui l'ont précédée, dans la discontinuité ou la continuité des générations. Un miroir que cette population tend à ses hôtes, pour s'en faire mieux comprendre, dans le respect de son travail, de ses comportements, de son intimité.

Une expression de l'homme et de la nature. L'homme y est interprété dans son milieu naturel. La nature l'est dans sa sauvagerie, mais telle que la société traditionnelle et la société industrielle l'ont adaptée à leur image.

Une expression du temps, quand l'explication remonte en deçà du temps où l'homme est apparu, s'étage à travers les temps préhistoriques et historiques qu'il a vécus, débouche sur le temps qu'il vit. Avec une ouverture sur les temps de demain, sans que, pour autant, l'écomusée se pose en décideur, mais, en l'occurrence, joue un rôle d'information et d'analyse critique.

Une interprétation de l'espace. D'espaces privilégiés, où s'arrêter, où cheminer.

Un laboratoire, dans la mesure où il contribue à l'étude historique et contemporaine de cette population et de son milieu et favorise la formation de spécialistes dans ces domaines, en coopération avec les organisations extérieures de recherche.

Un conservatoire, dans la mesure où il aide à la préservation et à la mise en valeur du patrimoine naturel et culturel de cette population.

Une école, dans la mesure où il associe cette population à ses actions d'étude et de protection, où il l'incite à mieux appréhender les problèmes de son propre avenir.

Ce laboratoire, ce conservatoire, cette école s'inspirent de principes communs. La culture dont ils se réclament est à entendre en son sens le plus large, et ils s'attachent à en faire connaître la dignité et l'expression artistique, de quelque couche de la population qu'en émanent les manifestations. La diversité

en est sans limite, tant les données diffèrent d'un échantillon à l'autre.
Ils ne s'enferment pas en eux-mêmes, ils reçoivent et donnent.

アンケート

【質問1】

あなたの性別はどちらですか？

1. 男性

2. 女性

【質問2】

あなたの年齢は何歳ですか？

歳

【質問3】

産炭地域とのかかわりをうかがいます。

◎清水沢に住んだことはありますか？（清水沢とは次の範囲です…清水沢1～3丁目、清水沢清栄町、清水沢清湖町、清水沢宮前町、清水沢清陵町）

1. はい（今住んでいる・以前住んでいた）

2. いいえ

いつからいつまで住んでいましたか？

年～年ごろ
（現在お住まいの方…右欄は空白にしてください）

◎清水沢以外の夕張市に住んだことはありますか？

1. はい（今住んでいる・以前住んでいた）

2. いいえ

いつからいつまで住んでいましたか？

年～年ごろ
（現在お住まいの方…右欄は空白にしてください）

◎夕張市以外の空知産炭地域に住んだ経験はありますか？（空知産炭地域とは次の市町です…芦別市、赤平市、歌志内市、三笠市、上砂川町）

1. はい（今住んでいる・以前住んでいた）

2. いいえ

いつからいつまで住んでいましたか？

年～年ごろ
（現在お住まいの方…右欄は空白にしてください）

【質問4へお進みください】

【質問4】

今日のイベントに参加した動機やきっかけは何ですか？

--

【質問5】

あなたのプロフィールを簡単に紹介してください。どんなことでも結構です！

<例>☆タ張新鉱で働いていた元炭鉱マンです☆炭鉱とは全く関係ないんですが、なんとなく街の雰囲気が好きです！☆おばあちゃんがタ張出身で・・・など

--

【質問6】

今日のイベントにご参加いただいた感想をご記入下さい。

--

●後日、今回皆様に撮影していただいた写真や「まち歩き」に関するアンケートのお願い、報告書などをお送りさせていただきます。大変恐れ入りますが、こちらにもご記入ください。

お名前
ご住所 〒
メールアドレス（お持ちの方）

資料③ 追加調査のアンケート用紙

清水沢タウンウォッチング・追加アンケート

※表・裏両面にあります

お名前



A 森林

まったく 評価しない	あまり 評価しない	どちら でもない	やや 評価する	非常に 評価する	見て いない
1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>

評価理由



B 水面

まったく 評価しない	あまり 評価しない	どちら でもない	やや 評価する	非常に 評価する	見て いない
1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>

評価理由



C 清水沢神社

まったく 評価しない	あまり 評価しない	どちら でもない	やや 評価する	非常に 評価する	見て いない
1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>

評価理由



D 鉄塔

まったく 評価しない	あまり 評価しない	どちら でもない	やや 評価する	非常に 評価する	見て いない
1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>

評価理由



E 清水沢市街地の特徴的な建物

まったく 評価しない	あまり 評価しない	どちら でもない	やや 評価する	非常に 評価する	見て いない
1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>

コメント



F 清水沢市街地の繁華街

まったく 評価しない	あまり 評価しない	どちら でもない	やや 評価する	非常に 評価する	見て いない
1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>

コメント



G 清水沢発電所

まったく 評価しない	あまり 評価しない	どちら でもない	やや 評価する	非常に 評価する	見て いない
1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>

コメント



H 清水沢ダム

まったく あまり どちら やや 非常に 見て
 評価しない 評価しない でもない 評価する 評価する いない

1 2 3 4 5

コメント



I ズリ山

まったく あまり どちら やや 非常に 見て
 評価しない 評価しない でもない 評価する 評価する いない

1 2 3 4 5

コメント



J 木造炭住

まったく あまり どちら やや 非常に 見て
 評価しない 評価しない でもない 評価する 評価する いない

1 2 3 4 5

コメント



K 改良住宅群

まったく あまり どちら やや 非常に 見て
 評価しない 評価しない でもない 評価する 評価する いない

1 2 3 4 5

コメント



L 旧清水沢小学校

まったく 評価しない	あまり 評価しない	どちら でもない	やや 評価する	非常に 評価する	見て いない
1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>

コメント



M 撤去された鉄道の跡

まったく 評価しない	あまり 評価しない	どちら でもない	やや 評価する	非常に 評価する	見て いない
1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>

コメント



N 清陵町の眺望

まったく 評価しない	あまり 評価しない	どちら でもない	やや 評価する	非常に 評価する	見て いない
1	2	3	4	5	<input type="checkbox"/>

コメント

●タウンウォッチングについてお答え下さい。

今回のタウンウォッチングのような機会があれば、誰かに勧めたいですか？

1つだけ○をお付け下さい。

※ご家族やお知り合いなど
誰を想定しても結構です。
実際の勧奨をお願いするも
のではありません。

まったく 勧めたくない	あまり 勧めたくない	どちら でもない	やや 勧めたい	非常に 勧めたい
1	2	3	4	5

ご協力ありがとうございました。
9月20日（土曜日）までにご投函下さい。

資料④ オープンハウス参加者アンケート用紙
(空知支庁が作成したものを再構成)

炭鉱住宅オープンハウスアンケート

(北海道空知支庁)

◎目的

空知の産炭地域には、北海道遺産や近代化産業遺産に選定されている炭鉱遺産など貴重な地域資源が豊富に存在しています。空知支庁では、こうした地域資源を活用した地域の活性化の検討をしており、その参考としたいのでご協力をお願いします。

1 空知で石炭が採掘されていた(一部露天掘による採炭は稼働中)ことをご存知でしたか。

①知っていた ②知らなかった

2 「炭鉱(やま)の記憶」(炭鉱に関連する施設、機械、鉄道施設、生活用具、イベント、食文化など=「炭鉱遺産」という言葉を聞いたことがありますか。

①聞いたことがある ②聞いたことがない

3 オープンハウスを何で知りましたか。

①知人から ②報道機関(具体的に記入ください_____)

③インターネット ④その他(具体的に記入ください_____)

4 オープンハウスに参加した目的は何ですか。

①「炭鉱の記憶」(炭鉱遺産)に興味があった ②炭鉱住宅など建築物に興味があった

③夕張市に興味があった ④コミュニティーに興味があった

⑤その他(具体的に記入ください_____)

5 参加した感想を教えてください。

①お金を払っても参加したい(支払可能金額_____円ぐらい)

②無料であればまた見学したい

③別の場所であればまた参加したい(ここを選択した方は次の2つにも記入ください。)

○希望の場所がありますか(市町村名や具体の住宅名など)

○料金設定について ・無料であれば ・有料でも(支払可能金額_____円ぐらい)

④1回見学すればよいと思った

感動したところや期待はずれだったことを自由にお書きください。

6 炭鉱住宅の空き家に短期(2・3日～1週間)滞在する企画があったらどうしますか。

①お金を払ってでも利用したい(支払可能金額1泊素泊まり_____円ぐらい)

②条件付きで利用したい

具体的な条件をお書きください。(例:無料なら、風呂付なら など)

条件がなかった場合の支払可能金額1泊素泊まり _____円ぐらい

③興味はない

7 夕張市清水沢地区の印象について自由にお書きください。

○見学前の印象

○見学後の印象

8 関連行事について(参加された行事に○をしてください。)

(感想や今後、継続実施(有料)する上でのアドバイスをいただけると幸いです。)

① 夕張いいとこ発見ウォーキング

② 宮前集会場での写真展示、映画上映

③ 夕張市清水沢地区ズリ山登山

④ 旧北炭発電所見学

9 地域活性化に活用すべき地域資源とその活用のアイデアを教えてください。

○地域資源(例:炭鉱住宅、○○立坑櫓、△△川など)

○活用アイデア(例:短期滞在、櫓を中心とした公園整備、川下りなど)

性別 ①男性 ②女性

年齢 ①10歳未満 ②10代 ③20代 ④30代 ⑤40代 ⑥50代 ⑦60代 ⑧70歳以上

居住市町村名()

ご協力ありがとうございました。

資料⑤ 居住者アンケートの分析方法

● テキスト分析

(例)

Bの発言

…(興味を持ってくるか?)

・来てても設備がほとんどない。「〇〇でした。跡ですよ」ぐらいしかわかんないでしょ。建物見なきゃわかんない。

→概念名「現物が喪失していて無意味」

聞くことがあるか?というのを聞きたい。興味があると言ったって、何を読んできて僕らにお話をするかわかんないけど、聞きようがないんじゃないの。どういことを聞いていいのかわかんないんじゃないか。昔のことをわかってくるならいいけど、なんもわからないで来たら、無理なんじゃないか。勉強してくるなら、話題はもってますから。体験上。それに対してのお答えはできます。

→概念名「基礎知識がない来訪者への忌避問」

…

● 分析ワークシート作成

(例)

概念名	過去再現性の乏しさ
定義	炭鉱時代そのままのものがあまり残っていないので価値がない。
ヴァリエーション	<ul style="list-style-type: none"> 残ってるもんじゃ、あんまり価値ないんでないかい?(B) (興味を持ってくるか?)来てても設備がほとんどない。「〇〇でした。跡ですよ」ぐらいしかわかんないでしょ。建物見なきゃわかんない。(B)
理論メモ	なぜ価値を感じないか?跡では昔とあまりに違いすぎるから。昔の様子を知っている人にとってはがっかりするものではないのか(C)(まったくないより痕跡だけでもあるほうがましだし、風化するさまにも価値を見出す人がいることには理解を求めなければならない)

②上位概念化

③概念の定義付け(説明)

①類似する概念をグループ化
「現物が喪失していて無意味」

「●●」
「●●」

④メモ

● 理論モデル作成

図 5-5ならびに図 5-6を参照。